

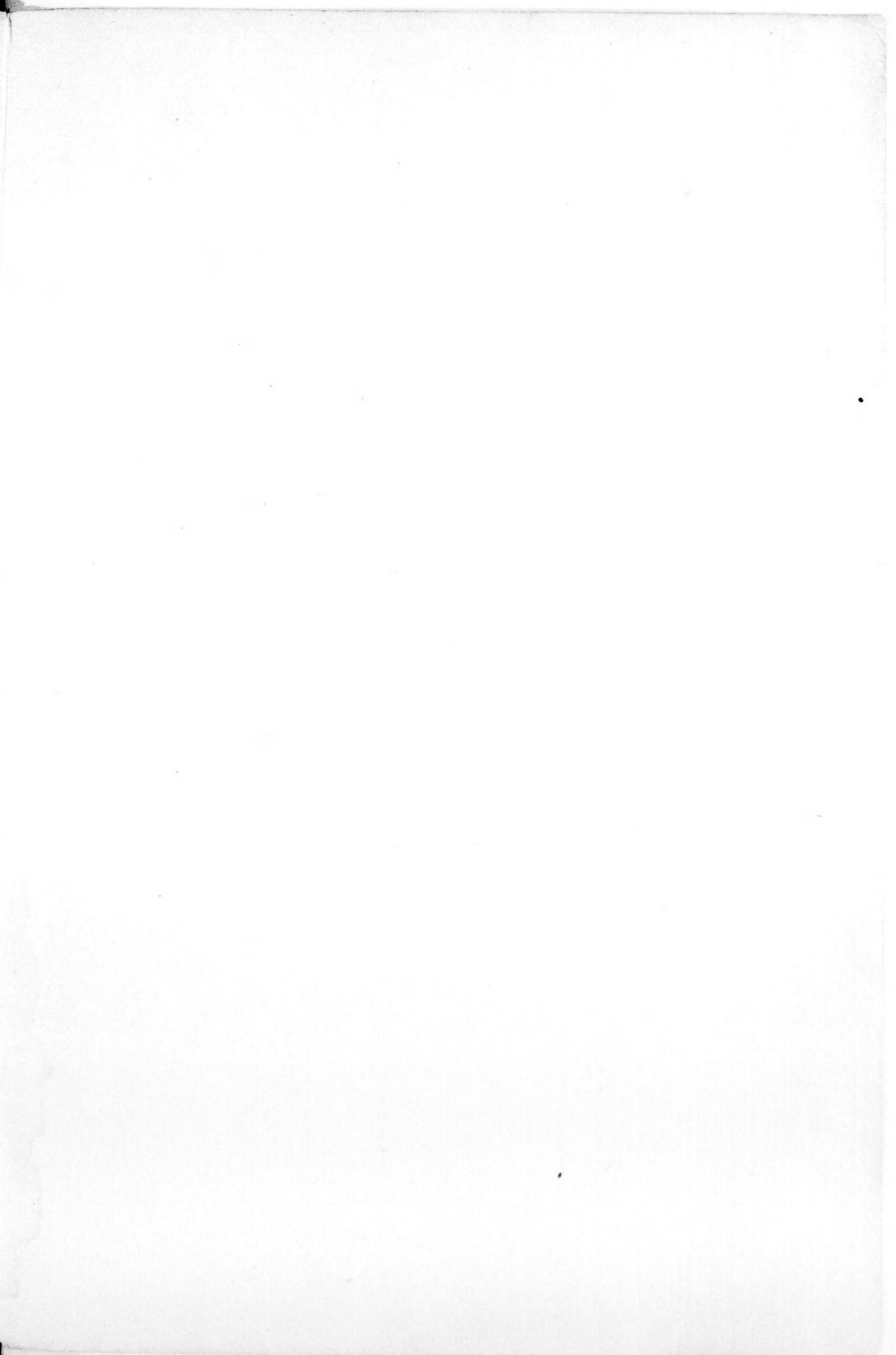
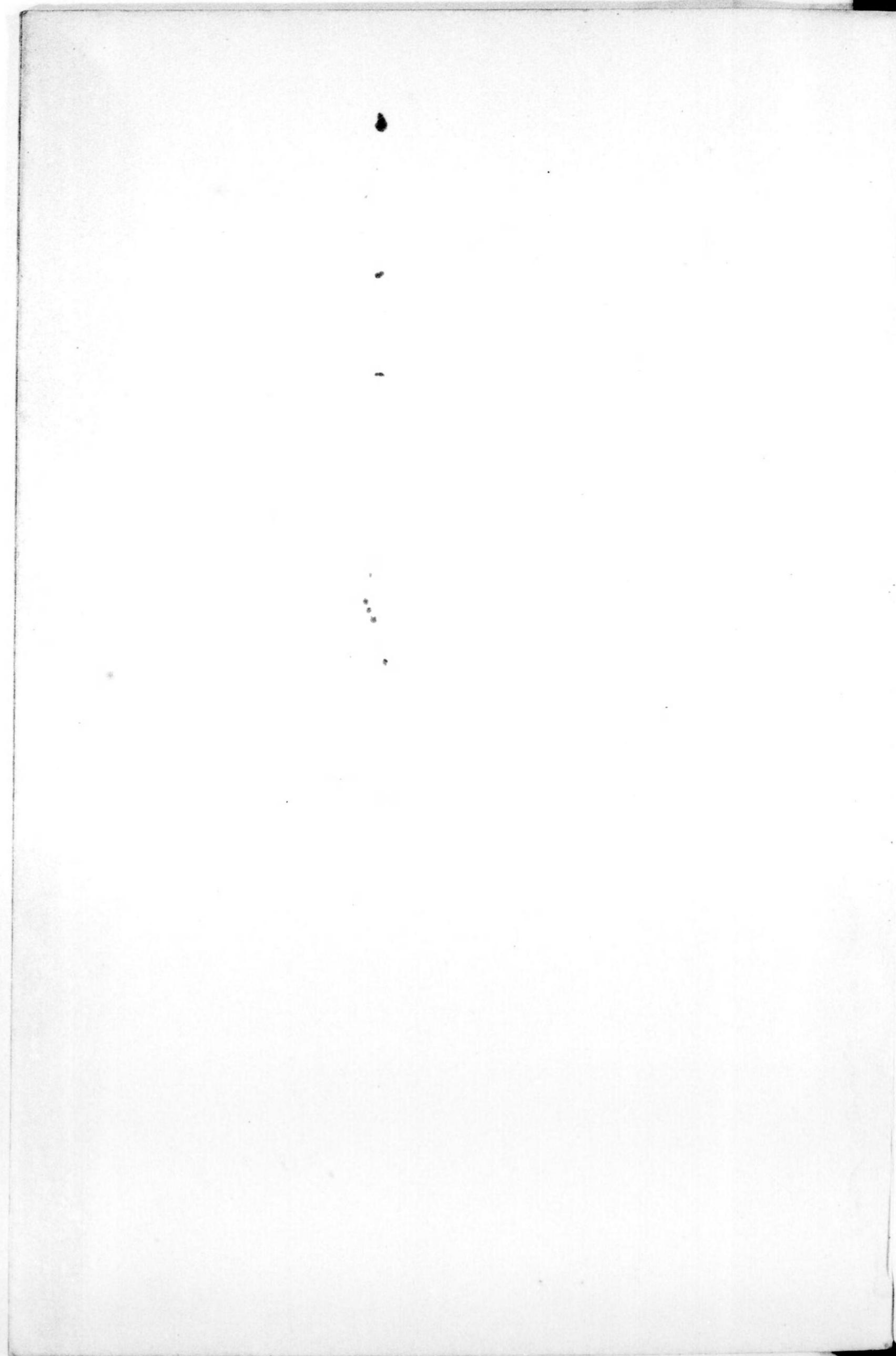
然祥著

伯爵銀次

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

始







伯

爵

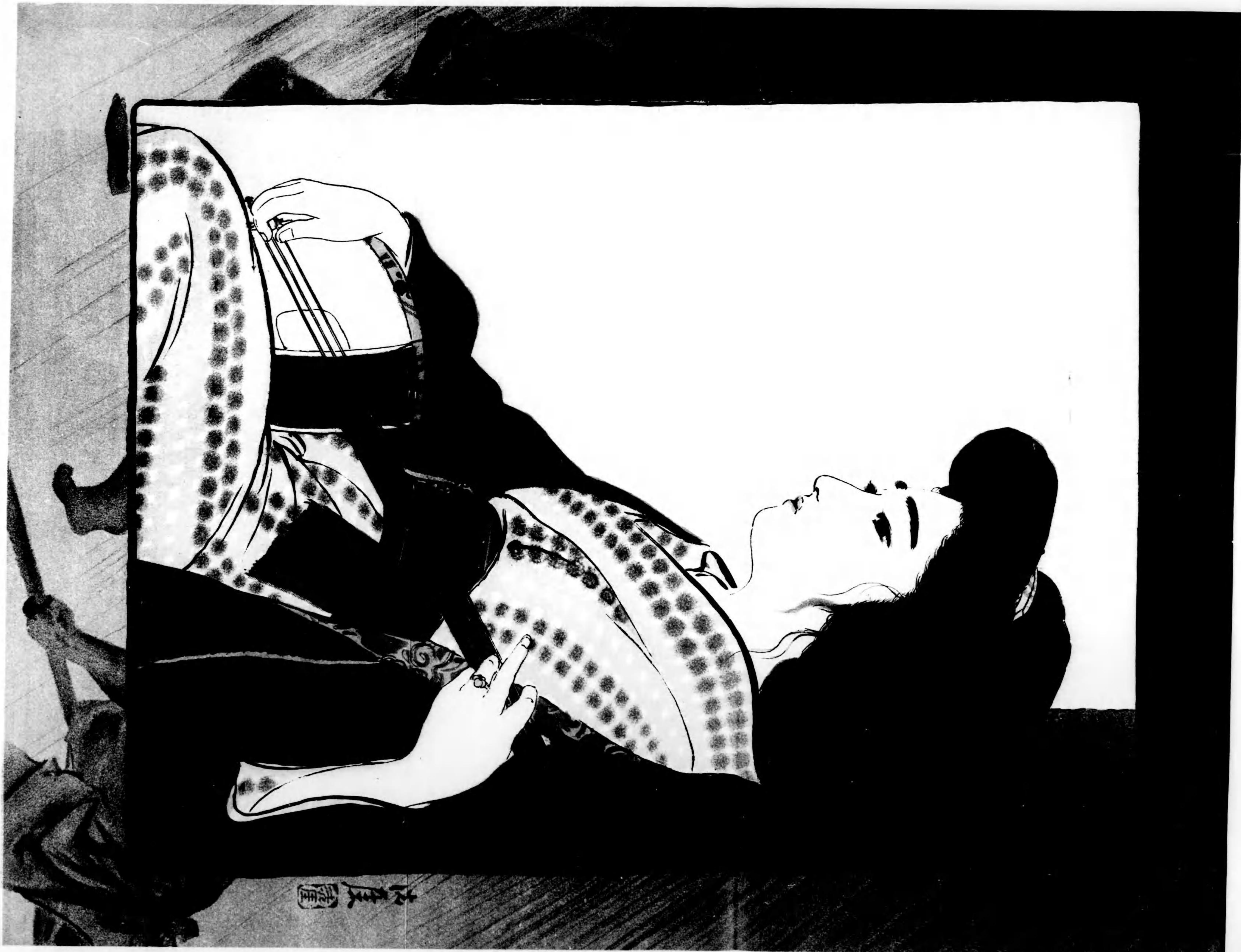
銀

次





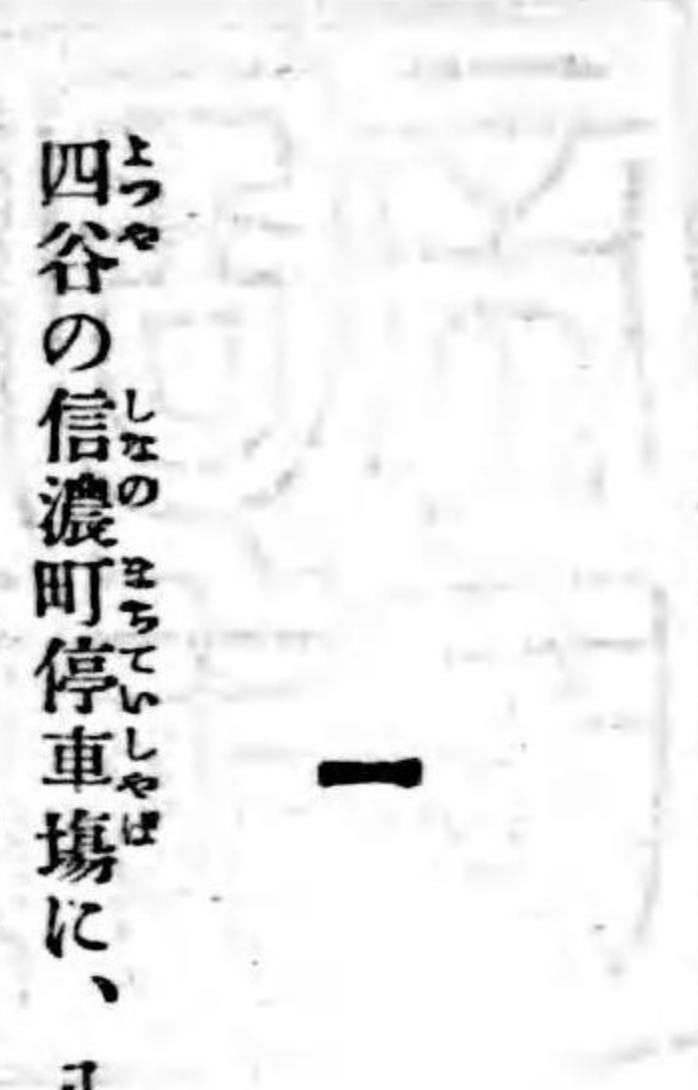
長生
印



特105
399

伯爵銀次

渡邊默禪著



四谷の信濃町停車場に、八王子發の上り列車が着いた。

その煤煙の棧橋の家根に消える頃、改札口から青山の原に現れた若い男が、のつそくと大股に歩いて、練兵場を南へ一直線に横断らうとする。

大學の制服らしい縞子目綾の黒い立襟背廣、遠足に打たれた雨の記念か、肩の邊の色褪せたのを、あゝ暑いといつたやうに上部の釦鈕を脱して、白い襯衣を胸から食出させ、角帽の廂を右へ廻して、折柄照つける西日に臨時遮断、見るから不規則な容姿をしてゐるが、長高く、さりゝと緊つた肉の、肩の張工合から脚の形好、線に弛みのない所が價打、細面の隆きに過ぎぬ鼻、一文字の唇、明亮と冴た眼光、是で色白であつたら柔弱な風にも見るであらうが、日灼に淺黒くなつた皮膚のお蔭は、何處か男らしい氣韻を有たせて、清秀松の如しとも銘を打たれる。

紹介すべきは手に提げた洋杖、それである。直径約五仙米突、太さ一握に餘る程の、何やら性の知れぬ自然木、爾も瘤だらけのをてら〜と黒光させ、柄杓へ不形好な鐵箍を箱込んで、どかりどしんと地響させながら曳いて行くのが、軍記の古武士か、屠狗兒をその儘の物凄いの打物である。

「フ、ン、飛行機も最古古くなつた、何を變つた物が飛出して呉れ、ば可いなア、天下絶無の珍發明！思ひ切つて痛快雄壯なやつが……」

俯げに地上を見ながら歩いてゐたのが、冷笑つてふいと目を舉げた。

潤い原にはところ〜、人行く路の黒土を埋め残して、見渡す限り夏草が滋つてゐた。頓ては蜻蛉蠶の子も飛んで出る濃緑の叢つゞきを、暖かく柔かな風が颯と奔ると、そよぐ穂波の青白い光が立つて、裏返る蛇の腹を見るやうである。生々した若葉の杜は、代々木から淀橋の邊にかけて、一氣に刷きなぐつた繪の具、ぼつと霞むその梢に、輪廓ばかりの秩父の山が腕つてゐる。青山通の人家の軒から、赤いのや黒いのや、小さく突出た五月幟の吹流しが、威勢よく空を蹴つて長閑な日影に閃くのが、心持のよい眺めの一つであつた。

「小さなもんだね、人間の力なんてえ奴は——科學萬能主義は講義でもつて、最、聞飽きてるくらゐだが、一方にはそれを嘲つて「科學の破産」と怒鳴る佛のブルンチエルのやうな男がゐるから面白い、それも無理はないと、今日の所澤で分るが、やれ、ブレリオ式が辻つたの、カティス式が

轉んだのと、わい／＼言つて大騒ぎをしてる、がだ科學の一大産物たる其の飛行機様がだ、飛べる範圍は精々二百米突の高さ、ドーバー海峡を跨ぐのが關の山ぢやないか、それさへ風といふ惡戯者がちよつげを出すと、シリンダーが挫んだ——になつて、空から眞逆さまの命懸と來るから憐れなもんだ。それよりも傳書鳩の方が餘程偉いや。元來我々の命の親なる空氣——高空氣流の高さへ正確に測定が能いぬのだから情ない、最近の研究者が氣球に乗つて調べたのは、稍と地上十四哩、それすら大成功だとしてある、だから氣圈のストラトスフィア（等温層）を説明するに、約二十里ぐらゐでござんせうなんて、曖昧なことを言つて濁してゐる始末だ、上も上なら下も下、地殻の結晶片岩を破つて、一萬尺の沸騰點にまで手を達かす譯にはいかず、世界中で一番深い獨逸サインシヤ州の堀抜井でさへ、六千六百七尺だといふぢやないか、だから時々、地震や噴火といふ氣まぐれ者に喫驚させられるのだ、未だ〜駄目だ、人間の智慧なんてえものは」。

「いや、其處に行くと、神秘術の方が確かに一頭地を抽いてゐる、む、仙人！仙人！仙人なるかなだ、好きなア、仙人てえ奴は……」。

途端に風に鎮く叢の中から、のたりのたりと匍ひ出した一疋の蟻墓がある。

「あッ、是だ、是だッ」。

忽ちそれに目を注いだ。直立した儘、凝乎として見てゐた。

のたのたと這つて、六尺許進んで出てから、びたりと其處に停つて、腕を張たなりに蹲踞んでゐる。學生も其の蝦蟇の跡を逐つて、前の方に廻つて、洋杖を肩に叢の上に腰を落して、飽かず小さな姿を囁めた。

幽玄な色彩を帯びた下腮の邊は、天地の活機を呼吸するやうに、びくびくと波打つてゐるが、オパールを鑲めたやうな双つの眼の光は、只一處に凝り着いて、泰然たる不動の姿勢をとつてゐる。何事を念じ何所を睨むのか、脚の下には可愛らしい蒲公英の馬の蹄に踏つぶされたのが、猶一輪の黄金を穂先につないで、涼しい野風にゆらいでゐるのが見えた。目ざす空の上層には、鯨に似た長い〜巻層雲があるばかり。

「アハ、氣に入つた、此奴は僕ア大好き、そのボンヤリした酒つ面に、禪味や茶氣を帯びてゐるばかりでなく、悠々として追らず、大空が頽れて來ても胡坐かな、で澄ましてけつかる態度が無性滅法に嬉しい、む、爾う〜、墓仙人、墓仙人、面白いな、彼の仙人を連想するせ、天竺徳兵衛、兒雷也なんか悪くはない、南無軍陀利夜又明王、何とかの板ひそ〜、ドロンドロンと來る、愉快だな、僕は矢張り窟張つた、ドライな科學なんぞよりも、ローマンチックな、暢氣な神祕主義の方が、柄にはまつてるかも知れんて」。

腕又して、小首を傾げて、さも感心したやうに蛙の顔を目成ると、墓の方でも妙な奴だと驚いて自分を仰見してゐるかの如く思はれた。

「世間の俗物どもは、僕が得意の仙人論を擔ぎ出すと、又かと思つて笑ひやがるが、事實決して架空のお伽話してはなく、現在見た人も遇つた人も、又た夫れに師事して仙術を授かつた人もあるのだから、荒誕無稽とは言はれんぢやないか、近い證據は此頃非常な勞ひで流行する呼吸術、何式かの筒式だのと勝手なキャピタルをくつつけてるけれども、その本體は取も直さず仙術の吐納法、昔から有來つた方式を少し計り焼直したに過ぎぬから、いはゞ一種の既得權侵害だ。禪だつて仙術の御親類、負ふところが少くない。彼の大鹽平八郎が一晚に三十里の路を往復したといふ神速歩術、あれなんぞも矢張一つの仙術だ、無病長壽、そんなことは仙人の目から見たら何でもない、百年、二百年、五百年、千年、生きられるだけ生きて、生きながら昇天する、愉快だなア」

罪のない空想に耽つて、獨でにやりやり笑つてゐると、墓は何を發見たのか、いきなり斗然と飛揚つて口をぱくり、其儘のた〜と横手の叢へ這込まうとしたので、此方は慌て、身を起した。

「おい〜、先生、何處へいくんだ、逃げちやア困るぢやないか、おい、待ち玉へ、君！」

追ひ縋つて兩手にそれを捉まへて、後脚を摩んで宙に吊すと、墓は喫驚したやうに悶え立て、ぐぐと鳴く。

「僕の目に止つたのが君の不運だ、まア交際ひ玉へ、今日は僕の家に案内するから、肝膽相照して大いに語ると爲ようぢやないか、可いだらう、君、格別の御馳走はないが、蠶ならどつさりゐるぜ、アハ、こいつで一つ家内中を驚かしてやれ、きやつきやつ言ひやがるだらうなア、女們は……巧いぞくアハ、ハ、」

肩に下げたズツクの學生靴の中へ、無理に墓を押込んで、其手を無頓著にズボンで摩つて、又大股に歩き出した。

「そこで其の仙人だが、明治の聖代にも實在してゐるから妙だ、第一大和葛城山の照道仙人、足利時代から修業を續けて、明治九年に首尾よく卒業、雲に駕つて昇天した人だ、それから杵築藩士の河野久、豊後の犬吠山で荒行を積み、至道壽人となつて登遐昇天したのは近年のことだ、次に豊前馬城山の童仙、甲州仙丈が嶽の白仙、先頃東京へ出て来て、博士連や有象无象を驚かした仙臺の源七老爺、彼奴が術を教はつたといふ荒神山の仙人、いづれも嘘だと否定するとの能きない事實だから不思議だ、いや、不思議はない、哲學者のメーテルリングが言つた通り、實驗された無数の神祕的現象は、大舉して正統的學術の門戸を叩き破らうとしてゐるのだ、今がその時代なのだ、仙人だつて成れないとはない、努力次第修養次第で必ず成れるやうに、人間の體も精神も出來てゐるのだ、荒行でもつて鍛錬工夫をつむにつれ、五感の官能も心理的狀態も漸次に變化して、神氣靈氣全身に

充實して來ると、霧を吐いて霧に乗り、雷を起して雷に跨がり、自由自在に深山幽谷の間を飛行するぐらゐは、お茶の粉さいくだ、催眠術的の神遊ではない、現實だ、實在の容積だ、愉快だなア、爾いふ術が能きたら……エ、何だぜ、山は愚か、ニユーファウンドランド邊の海上で、百米突以上の大かい氷山が、ぶつぐぶつと流れてゐる、その氷山の巔をあつちこつちと飛び歩いて、航海船をアツと驚かして遺るなどは、奇抜な悪戯だ、南極や北極の探検ぐらゐは、物の三日とはかゝるまい、あ、僕も寧ろそのと仙人にならうか」。

と思ふ途端、ひよいと爪先に引懸つたのが、古い破れ靴の一片。

「ちやッ、變な物があるぞ」。

再び立停つた。

いかにも汚なく破れた靴だ。

が、何と思つてか、薄氣味悪さうに右の手の指先にそれを掴み上げ、目八分に磨して清々と囁めた。

「ハ、ア、なか／＼立派な靴だな、僕は屑屋の批評眼がないから、よくは解らんが、佛蘭西の油革で深護謨、編上になつてゐるな。ム、爪先は細形で踵の高い所など、頗る氣取つたハイカラ物らしい、廉くは買へないぞ、こりや……什麼、何者の紳士かね、是を穿いたやつはア、其の歴史を聞いたら面白からうが、憾むらくは語るにくつなく、徒らに悲惨の骸を残して、泥土にくつること

をだ、アハ、酒落になつたな。

見てゐる中に、ぼろ／＼に千裂れた皮の下から、紐穴の所を目蒐けてによる／＼と蚯蚓が蛇くり出した、青年は呀と驚いて手から投げ落したが、でも其儘佇立を續けて未練の眼を辿らすのであつた。

「詩的だね、是は……確かに一種の悲劇的記念物だ、最初何處かの靴工の手にかかつて、日影の鈍い窓の下か、微暗いランプの邊で造り上げられるまで、その靴工が生活難につく太息を聞きながら病める兒や憔悴した妻を案じ過す胸の血汐のさゝらぎ、その悶にふるふる手先でもつて、ビシリ／＼と世を咀ふ怨の釘を打込まれたであらう。それから虚榮心に焚かれてゐる現代の驕兒の足に踏まれるやうになつてからは、紙幣の山なす金庫の間をも通り抜けたらうし、夜會のダンスで、花のやうな美人と抱合つて、底の底ける程跳ねもしたらうし、春の夢を見るやうな劇場にも行つたらうし、ホチムンの嬉しい旅にもお伴したらうし、海邊の花藻、山路の紅葉も踏んだであらう、雨の夜に待合の門をくゞつて、婀娜めいた姿を覗き、晨のお歸りに奥さんの腹立聲を聞くなどは遁れぬ所だ。それから經濟界の變動でもつて、會社が破産するかな、相場に手を出して失敗する、デットの蛇が喉を絞める、邸宅も自動車もばた／＼と賣飛す、細君から離婚を迫られる、執達吏が押かけて来る、といふ騒ぎになつて、その行詰りが本來空のから／＼喝、起上り達磨の腰も抜けて、友

人の家に食客、とう／＼此の靴と主従生別れの屑屋の籠か、大抵段取が爾う定つてゐる、騙る者は人しからずの運命なら是非もないが、人間の幸福なんてえものは當にならんものだ。享樂主義、性慾主義、物質主義、現實主義、すべてが駄目だ、おい、靴君、僕は君に依つて今更の如く活きた教訓を獲たよ、君のその破れた底に暗黒光明、二つの社會を寫して、人間生涯の逕路を語つてゐるところが偉い、僕は無言の説教者として君を尊重する、骸骨になつても猶人を悟道にみまひく、君は明治式の卒塔婆小町だ、こんな野原に晒して置いては勿體ない、拾つていくよ、君、可いか、家に歸つて書齋に祭り奉つて、朝夕三省する、座右の銘にするんだ、可いかい、君、併し汚ないなア。」洋杖の先に突懸けて、ドッコイシヨと肩に擔いだ。

「最う是で澤山だ、今度はどんな名器珍什が落ちてあつても、採集せんど、さうさうは持切れるものぢやない、アハ、好い土産が出来た出来た。」

得意の笑を洩らしてすた／＼と途を急ぐ行手から、杖に縋つて踏ぼひ／＼歩いて來た老人があつた。

「あう、爺ぢやないか、おい、甚五衛門何處へ行く。」

青年は其姿を見て大聲に呼びかけた。と、先方は立停つてくると回盼り乍ら

「阿誰ぢやな」と氣疎い聲音。

「えッ、若さま！アノ、友麿さまでわらしやいますか」。

喫驚して、目を摩りながら仰ぎ見た。

鷹の羽の打ちがひを、茶碗程の大きな五所紋にして染抜いた黒奉書の、丈短かな古羽織、早や煤色に化けたのを大事さうに着流して、田舎縞のこりこりした袴へ、確かに嘉永あたりの献上らしい、幅の狭い茶の帯を締めてゐた。それが一昔前に還暦の祝を済ましたといふ類、枯れ切つた脂肪の、疊む皺にかき消されて皮膚の黄色ばんだ、深く凹んだ眼窩に光のない、つるりと禿げた頭鬚の後に、夕霜の名残の毛を少しばかり止めた、見るからに悲しい影を、三尺の箆に支へた叟であつた。

「是はく妙なところで御目に懸りましたなア、近頃は御覽の如き老衰でござりますでな、御屋敷の方へも、つい存じながら御無沙汰を仕つて居りますが、お殿様を始め皆々様、お揃ひ御健勝でなあらせらるゝ儀と心得ます、エ、實はな國の方から孫奴が出府いたして参りましたで、その事、就て一寸四谷の親族へ相談に罷り越しますで、はい、若さまはどちらへ御出まし遊ばされますな」。

と首を長く、四邊を回看して

「お見受け申すところ、伴廻りもお召連がございませぬ様子なやが、大切な御主人を只御一人、個様な原中へ立たせ申すとは、何たる不心得か、いや實に今時の奴們には困りますの、全然君臣

の道を辨へて居らん、不届千萬なッ」。「アハハ、」。「青年は笑ひ出して「爺、心配する事はないよ、僕は伴なんぞに附かれるのは大嫌ひだ、何處へ出かけるのも一人さ、その方がどんなに暢氣だか知れやしない、今日もね、所澤へ飛行機を見に行つて、今歸る所だが、家から馬車なんぞを迎ひに寄越したけれども、停車場で追ばらつたやうな譯だ、蒼蠅いからなア、爺や、書生の送り迎へを爲るなんて、元來人を馬車にした仕打ちやないか、ね、爺や、爾だらう」。「え、馬車を……は、ア」。

その稚ない駄洒落も此の老人には通じなかつたと見えて、少時口を蠢動させてゐたが「併し若さま、お言葉を返すやうで恐れ入りますが、御外出の際は御氣をお付け遊ばさうと宜しく御座いません、従前のやうに亂暴狼藉を働く悪棍がないにもせよ、只今は巷賊申著切、但しは電車、又は何とやら申す恐ろしい陰を立て、飛び廻る車などが、市中を横行いたしますで、油断をいたすと懐中物を抜取られたり、轢殺されたり致します」。「戯談ぢやない、小兒だと思つてるんだね、お前は……爺や、友麿は當年二十三歳だぞ」。「でも御座らうが、御用心が専一でござります、御維新前などは若さま、一寸外出なさるにも御側衆小性は申すに及ばず、徒目付、御十人、御小納戸、小人目付、足輕仲間など少くも數十人、前後左右を取捲き、烏毛の槍、金紋の先箱を打たせて嚴重に警戒いたしたもので、それがいかに時勢が變つたからと申して、左様に無難な歩を遊ばされましては、萬一の際に……」。「アハハ、ハ、何を言つてるんだ、五十年前の夢物語を、今の世の

中に當嵌るのは、そりやア無理だよ、爺や、昔の將軍や關白さまだつて、此節は一人でノコノ遊びに出掛けるせ、昨日も篤の野郎が新橋の珞玞店から飛出して來るのに、不意に出遇つたから、あゝ何處へ行くと訊いたら、なに其處までなんか来て、好い加減な事を云つて、板新道とか何とかいふ怪しからん横丁へ、逃げるやうに曲つて去つた、奴、不可んぞ、此頃は……遊惰に耽りやアがつて……」

甚五右衛門はその語の粗野なのに憫れたらしく、其處へ蹲んだなりに、顔を仰見げてゐたが

「若様、野郎とは同誰のことで御座います、野郎とは？ え、若様」「ソレ、公儀の子息さ、僕とは同窓の友だ、お前も知つてるぢやないか」「困りましたなア」「何が困つた」「假りにも伯爵三位、國家の柱石たる英様の御嫡男、その尊いお方さまが、匹夫下郎にもひとしき御言葉を……」と言ひかけて「いや、是も時勢とやらで御座いませう、若さま、長生は爲たくないもので、ハ、ハ、ハ、」

齒の脱けた口を開いて、呵々笑つたが、その下から肩に擔いだ洋杖の尖へひよいと目をつけて

「若さま、それは何でございますか」「是か、これは靴だ、今拾ひ立のホヤホヤ、中に蚯蚓がのたつてるよ」「え、靴を……あの、お拾ひなさいましたんで……ホ、ウ」

喫驚したやうな顔へ、青年は無邪氣な笑聲を投げつけて

「爺や、此の靴をお前何だと思ふ、辱けなくも神君東照權現、小牧が原の合戦に御佩用遊ばされた……」。「え、何でございますか!?」「アハ、ハ、ハ、嘘だ、嘘だ、お前なら爾いふ所だが、實は何處の馬の骨が穿いたんだか、得體の知れない古物を拾つて來たんだ、其處だ、珍の珍たる物だらう、近頃書畫や骨董の賈物を掴まされて、千圓だの萬圓だのと死金を只奪される大馬鹿者もあるが、そんな奴に比べると、僕の方が餘程恰憐だぜ、ハ、ハ、ハ、」。「左様でございますか、張合のない返辭をして「一體甚麼遊ばすお心算ですそんな物をお拾ひなされて」「是か、なに、なんだ、廢物利用さ繕つたら穿けない事もなからう」「え、お召になる、それをへえ!」彌々呆れて「ですが、若さま、一隻の方だけで御座いませんか如何してお召になりますか」「なッ、爾か」「一寸慌て、帽子の廂に手を當てたが「なアに、癡病院に寄附するんだ、彼處には片脚の軍人も居るからな」と苦し頓智「なる程」甚五右衛門は釣込まれたが忽ち苦笑して「若さま、それも悪い事ではありませんが、向後はお止し遊ばした方が宜しうございます。假にも華族の公達、若者の龜鑑ともおなり遊ばする身柄でありながら、路に落ちてある物をお拾ひ遊ばすなどは餘り結構などでは御座いません、第一品位と申すものが……」。「おい、爺、頑冥不靈なことを言ふなよ華族だからと云つて、何も路上に落ちてある物を拾つて不可んといふ理意はない階級の如何に依つて人間としての自由を制限する法律も道徳も、未だ日本には無い筈だが」「あいや、でも御座らうが、それでは人の上に立

つ者の威光と申す物が……。「おい、爺、爺」。笑つて手を振つて「最ら止せ、詰らないぢやないか、そんな子供染みた小さな争ひは……第一問題にならんよ」。「いや、決して小さな事柄では御座らん上好む所下之より甚だしきは無しとやら延いて舊藩地一般の氣風にも關はることで、由しい大事でござるわ、老人の癖に何も箇様な御諫言は申し上げたくはないのであるが、以前は不肖ながら家老執權の職にも列なつて、御老侯のお側に仕へた……。「い、よ、い、よ、最ら分つた分つた、おい、爺、謝罪する」。頻りにお辭儀をして「そんな事よりお前に聞きたいことがある、エート、何だつけな」。無理に材料を投して「ア、爾ら、今度國から出て來るお前の孫といふのは、誰だつたな、僕は覺えて居らんが」。

話頭のハンドルを廻して、苦しく血路を開かうとした。と、効驗は現金、老人は急に機嫌が直つて、莞然と白い眉を揺がしながら

「孫でございますか、はい、左様でございます、貴君様は御見知置はございますまいが、恰ど十八になるお園と申すのが二番目の孫でござりまして、其下に甚之助といふ十三の小僧がございますや、それが二人とも出て参りましたやうな譯で、いやもう世話が焼けて致方がございせんよ、ハ、ハ、ハ、」。

嬉しさらな笑ひ方、その眼の蔭に人知らぬ慈愛の光が潜んでゐる。

「おう、爾か、それは娯樂なことだなア、見物か?」。「いえ、見物ではございませぬ。田舎に置きましては碌な奴になりませぬで、東京で一修業一苦學をさせましたなら、まア其處にか人間らしい者になるだらうと個様に存じましてな、倅ども相談の上で呼寄せましたので御座います、甚之助の方は今年小學校を卒業したばかりで、是から何處ぞ嚴しい中學校に入れます所存、又たお園の方は……モシ若さま、其事で明日にも御屋敷の方へ伺候いたしますが、實は奥さまへ御願ひ申し上げて、二三年の所、御側で御躰をして戴かうかと存じますで、はい、御歸館の上は何卒貴君様よりも、然るべく御執做しの程をお願ひ申します、御屋敷に御奉公を致させましたら、根が田舎出の鬼瓦でも、幾分か又た光が出やうかと心得ますでな、はい」。「なに、家へ?それは止した方が可からうせ、華族なんぞへ奉公させると、虚榮心が増長するばかりで……。「え、何と被仰います」。「いや、なに、其處でも可いや、あつ、不可ない、苦しがつて手を出しやアがつた、おう險呑、既のことに逃げられるところ……おい、大將、後生だ、辛棒して呉れ、直に解放するから……エツ、此ン畜生、此ン畜生?」。

靴の鍵が外たのを幸ひ、例の墓君が油斷に乗じて逃走を企てゝゐる、それを一所懸命に抑へ付て獨語をいふのが、甚五右衛門に發狂したかの如く聽做された。

「若さま、ど、ど、其處遊ばしました、モシ、若さま」。

驚いて眼をさよろ／＼させた。

「最う可い、心配するな、ちやア爺や、明日来い、失敬ッ」。

見られては大變と、狼狽駈出した、その後、甚五右衛門は呀然と口を開いて、腰を熨しながら後姿を目送つてゐる。

II

「いや、彼兒にも困つたものだ、甚麼してあんな獣子が飛出したか、一家の前途が想ひやられるのう」。

恚う言つて太息を吐いたのが、伯爵の英彰である。

取つて今年が六十三、人間は百二十五歳まで生きるものと云ふ誰やらの説に、一割だけ衣をかけ、舊藩地に萬平といふ百五十歳の長壽者があつたことを例に引き、いつも宴會で不老論を揮回す人であるが、實際は氣焔を置去に逆行して、最眞の力士に偉いもんやと後退させた腕相撲も、昔程には振はなくなると、髪の毛は癩に障るほど白さを加へて、膏切つた頬の色艶も、不必要な皺ばかりを後に残して、何處へか焼て消えくさる、衰へたるかな、止んぬと口惜くも鏡に聞かせる嘆聲を、尺ばかりの鬚たる髯にかくして、それでも金剛流の謠に、息の長さを慢じてござるといふ柄。

大島袖の揃ひをゆつたりと召して、兵兒の濱縮緬を臍下に寛げ、蒔繪の脇息に肘をのせたなりに、ピール脹れの腹を前に突出してゐた。

「いえね、それも皆な私しの不行届から出ましたことで、御前に對して誠に申譯が御座いません、私しも折に觸れては種々とね、申し聞けもいたしますんで御座いますが、何分にもね、良人、彼の通りの氣性だもんですから、取つてもつけない挨拶ばかり致しまして……」。

前に坐つてゐた夫人の康子は、沈んだ聲を少し戰かして、訴へるやうに言つてから、俛目に我が膝を見た。

輪廓の狭つた小柄の體へ、古風な古紋縮緬を不斷著にして、白茶縹緞の時代がかつた帯を叮嚀に締めてゐる。慈じ濃い眉があるだけに細面の子皺が凄く見えもすれ、鼻の隆い、眼つきの柔かな、昔を偲ばるゝ上品な奥さま。人知らぬ御苦勞の憔悴か、較や蒼味ざした顔に、折柄の陰翳がたゞよつてゐた。

「ソレ、それがお前を愚弄にしてゐる證據ぢや、つまり甘やかし過ぎるから甘く見られる、いはゞ自業自得、自然の結果で仕方がない」。

伯爵は忌々しげに舌打したが「いや、併し何ぢや、家庭教育の罪とばかりは謂はれはせんぞ」。

術なげに打萎れた夫人の様子に、氣の毒と思つてか、急に論鋒をかへて

「乃公に言はせると、學校が悪い、又た社會が悪いのぢや、昔の如に倫理道徳を主として教へるんぢやなくつて、只智識智識と一方に偏した教育を無理押附に鵜呑にさせて、ドン／＼人間を粗製濫造する、それぢやから友鷹のやうな不具が出来揚る、社會も爾ぢや、器械のやうにクルクルと廻る奴ばかりを驢迎して、どつしりと沈着いた精神家などは、取毀した墓石のやうに厄介物扱ひにして居る、その器械も薄つべらな、羽車のやうな奴ばかりで、厚味のある、堅い一方の、大砲のやうな人間は、振向きもせん世の中ぢや、それが不可ん」。

慨然として言ふ下から、埃及窓の太いのを把つて、ぶつと紫の煙を吐いた。

「左様でございますねえ、何でございますか、近頃の若い者は、皆な不可なくなりませす様で」。

夫人は道理らしく跋を合せた、自分の責任問題から迂り抜けたやうに。

「今になつて考へると、慈中大學なんぞに入らずに、乃木さんの所の玄關番にでも頼み申した方がよかつた、其方がどのくらゐ精神教育になつたか知れんわ、哲學をやりたいと云ふから、流行の厭世家にでもなられると大變ぢやと思つて、不可ん、實用的の學問をやれと命令して、無理に理科に入れさせたんぢや、すると先頃、父さま、理科なんぞは僕の性質に合ひません、些とも面白くないので、熟々可厭になりました、止ませせうと云ふから、那麽薄志弱行で何を成せる、學問を芝居や小説ぢやと思つて居るか、譎氣奴と叱つて遣つたが、それからボーとして了うて、時々變なと

を行り居るやうになつたぢや、彼奴、そんな事が原因で頭腦が甚麼かしたんぢやないか、妙だぞ」。

氣遣はしさうな目づかひである。夫人は唾を呑込むやうに頷いて

「成程、爾ら被仰れば訝しなことが御座います、つひ此頃のことなんで……」。

「うむ」。

伯爵は細を乗出した。

康子夫人は眞面目に、低い調子で

「こんな事をお耳に入れましたらば、嘸喫驚なさるだらうと存じまして、故意とお話申し上げなかつたんで御座います、實に呆れて了ひましたよ、恰ど二週間程前、夕景からふらりと家を出ましたッ切、一晩戻つて參らなかつたことが御座いましたの、それで大層心配を致しましてね、方々へ電話で問合せるやら、車夫を捜しに出すやら、家中大騒ぎを致したんで御座いますが、翌る朝、氣のない顔をして、茫然と戻つて參りましたから……」。

「うむ、奴、悪い遊びを覺えたな、怪しからん」。

伯の眼は光る。「いえ、ま、お聞き遊ばせ、私も爾う思つたもんで御座いますから、部屋に呼つけて嚴重に吟味をいたしますと、良人、如何でございますませう母さま、證據を御覽なさいつて、いきなり附き突けましたのが、淺草の花屋といふ判の据つた受取書で」。

「何ぢや、それは？ 割烹店か」。

「い、え、此頃繁昌してゐるホテルださうで、宿泊料十錢として御座いました、大層お安いぢや無いませんか」。

「なに、十錢のホテル？ そんなのが有るかの、餘程勉強して居ると見える」。

「爾

と見えます、實は社會を研究する爲に、其處へ一晚泊つたんだが、藝術家やら學者やら大事業家やらが居合せたので、その成功談や失敗した話を聞くのが、非常に面白かつたと申しますの。「何ぢやらう、其のホテルは……は、ア、矢張學生を教化する爲に、特志家がこしらへた一種のスクールホテル、食堂兼帯の講堂といつた様な物かな、成程好い考案ぢや、美譽ぢやのう、奥さん。「感心でございますわね、しますと就睡しましてからは大變で、薄い煎餅とやら申す蒲團にくるまつて、木枕をさせられるんださうでして、頭痛がいたしますところへ、失禮な話でございますが、蚤や虱がチクチクと螫廻るのが、いかにも堪へ切れないので、夜半に飛起きて、戸外へ出ましたと申します。「辛抱甲斐がない奴ぢや、爾いふ苦痛を與へて、學生の忍耐力と克己心を鍛錬させるのが、ホテルを設立した特志家の目的ぢやらうに、夫では何にもならんぢやないか。「私しにお叱言を被仰いまして、彼の方が御座いませぬ、それから淺草觀音の境内に這入つて、アノ、そら、腰掛が御座いますね、彼の上に轉がつて臥せりました所が、警察の角桶巡査が巡つて参りまして、怪しい者とも思ひましたか、無理に分署へ連れて参つて、高飛車に叱りつけて身許を調べたのが、近頃はない愉快だつたと、爾う申すではいませぬか、私泣きたくなりましたわ、野宿をするなんて、アア何といふ不心得な奴でございますませう」。

愁を帯びた聲が顫へる、伯は鬚を撫でる手を止めて、ぶる／＼と肩の邊に波打たせた。

「莫迦なッ、何が愉快だッ」。喝するやうに言つて「野宿をしたのは、未だ可いとして、警察になんぞ拘引されてからに、身分を調べられたとすると、當然乃公の名が出る、假にも英ぢや、その嫡男が深更の一人歩き、樹下石上に寝たとあつては、當家の名譽にも關することぢや、同族の手前も耻かしい、エ、呆れた阿房ぢやなア」。膝に拳を握る。「いえね、良人、それは御心配遊ばしますな、障りのないやうに、他の名前を申し立て、嫌疑を解いてから、戻つて参つたさうで御座いますから……未だ其外に……」。

夫人は言はうか言ふまいかと猶豫つて、黙つて息を呑んだ。

「何ぢや、有るなら話せ」。「でも御立腹遊ばしますと、彼の兒が」「いや叱りはせん、叱ると際限がないぢや、アア聴いても聽かんにと爲る、言へ」。

穩かになつたのを見て、夫人は

「それではお話し致しますが、五日許前の晩、馬丁の源吉と一緒に、アノ、青山の墓地へ参りましたね、近所に徘徊して居ります、お菰を呼び集めて……。「何、お菰？ 乞食か」「はい、どういふ心算か、お金を皆なに遣しまして、演説のやうなことを致したさうで御座います、それから焚火をして一緒に宴會を……。「宴會？ 乞食とか、な、な、何を爲居るッ、愈々以て狂人ぢや、打捨つとけはせん、コレ、奥さん、未だ戻つて來んか、見て參れ」。

鼻息が荒くなつた、鼾がめき〜と蠢く、吸残しの葉巻はやけに咬砕かれて、ぶつと灰吹に吐き出された。

「いえ、未だでございませう、なに、最う直に……まア御立腹遊ばされずに……困りましたねえ」。

飛んでもないと話したと悔んで、狼狽へ氣味にそわ〜と座を立つ。

「きやッ！あれ、お姫さまア」。

途端に二間ばかり隔てた座敷の方で、魂消るやうな小使の聲がした。同時にばた〜といふ聲。

其の聲に驚かされて、康子が急いで行つて見ると、小使のお道といふのが、袴と縁側の柱に據み着いて、妙な腰つきをしながら、きやッきやッと呼んで顫えてゐる。座敷の隅には令嬢の須磨子が立つて、右手に白菖蒲の花を振翳して、叱、叱と何物かを追ひのける様子。

それを庭先から窺き込んで、脾腹を抱へて假つ反つ、アッハッハと笑つてゐるのが、若殿の友麿であつた。

「甚麼したといふのです、騒々しいぢやアありませんか、靜肅になさいよ、仍ない、おや、友麿、いつの間に……迎への者を歸したとかいふとだつたが、何處ぞへお立寄かえ」。

康子は爾いふ口の下から、恟乎して飛退いた。

「あら、何處から上つたらう、這麼蟲が……汚ないぢやないか、須磨さん、早く誰ぞに追出させてお了ひなさい」。

始めて目についた、高麗縁の青疊に一疋の大蝦蟇、臆面もなく奥を目蒐けてのたり〜と推參する。

「奥さま、奥さま、は、早く、ど、甚麼か遊ばしてくださいませよ、わ、私、壽命が縮まります、

眞箇に蛙と來た日には、話を聞いたばかりでも、悚然とするくらゐなんで御座いますからさ、ア、可厭ぞ、ア、可厭だ、姫さま、お願ひでございますから、た、助けてくださいませよ、道は最う、死、死にさうです」。

眞蒼な顔から、睨々と目を光らせて、お道は柱の蔭に救を呼ぶ。

「お母さま、兄さまですよ、兄さまがこんな物を持つてらしつて、道と一緒にお花を挿けてるところへ、突然放り出しなされるんですもの、喫驚するぢや御座いませんか、ねえ、お母さま」。

須磨子は甘えるやうに訴へた。二十に足らね芳紀の、父に肖てか、豊かな肉づきの伸々と發達した脊形好、下膨れの活々した顔立に、眉毛の濃い、鼻筋の奇麗に透つた、額の生際の浮立つた、殊には鈴のやうな清しい瞳の、黒く潤んだ光に、邪氣のない温味をもつてゐる。紫紺矢筈緋のお召の袷に、水映風に大きく染出した花菖蒲模様の黒つばい被布、今様のふつくりとした髪に、白鼈甲透し彫の櫛が、

眞珠のきらめきを床しく見せてゐた。

「又お悪戯かえ、仕様のない兄さまねえ」と康子は優しく睨んで「友鷹、早く捉まへてお棄てなさい、可哀想に道が死ぬと言つてるぢやありませんか」「アツハツハ、を、可笑しい、こりや堪らん、ハツハツハ」。友鷹は沓脱石の所で、頓足ふむばかりに哄笑ひをして「滑稽、滑稽、道の様子ツたら奇々妙々、實に愉快だ、ぼ、僕は、反對に壽命が延びた、アツハツハ、ほうばら〜」。

縁側の所へ腹匍になつて、手を伸して、須磨子が必死と追のけた墓をぐつと手摺みにして、宙にぶらりと吊した。

「君、御苦勞、御苦勞、首尾よく御目見得相濟みますれば、是より食堂へ御案内の、蠅と蚯蚓のバケツトで、懇話會を開くと爲ようか、ハツハツハ」。

「いやアな兄さま」。須磨子は憫れに其の手元を觸めた。「おい、友鷹待てツ！」。

庭を出ようとする後方に父の聲がした、何時か奥の間を出て来て、縁先に立つてゐる、常とは異つた眼の輝き。

「はい」。友鷹は飛石の上に蹲まる。

三

「友鷹、お前に少し訊ねたいことがある、暫く其處に居れ」。

伯爵は縁先近くに柵を置かせて、儼然と坐つたが、其の眼は友鷹の顔へ電光の如く落ちて來た。

「今聞いたのぢやが、お前頃頃の晩、何處へか泊つて來たさうぢやの、確か花屋とかいふホテル、淺草邊の……爾ぢやらう、何を爲にそんな所へ行き居つた、先づ夫から答へろ」。「誰からお聞きなさいました、いやア早いもんですなア、機敏ですな」。友鷹は意外だといふ顔をして「別段に難かしい理由はないです、下層社會の探検……爾いつた様なことで、はい」。「何、下層社會の？ハ、ア、す

ると其のホテルは何か貧民の生活状態でも調査して、これを救済するとか、教化するとか、爾いふことを研究する爲に、學者や經世家の講演會を開いて、學生の夜の時間を有益に利用させる、いは夏期講習會、そんな種類のものぢやな」。「ハツハツハ」。友鷹は堪らず失笑した。「お父さま、そ

れは尊臺の理想でせう、花屋といふのは淺草町の本質宿ですよ」。「本質宿？といふと何ぢや」。「こりやア解りがありますまい、その歴史や組織、性質内容等を説明すると大變ですが、手取早く申

しますと、マア何ですなア、つまり生存競争に突落された落伍者、歸るに家なく、臥すに枕なく、食ふに糧なしといつたやうな日傭人足、車力、大道藝人、新聞賣子、人相見、千箇寺參り、盲乞食、

そんなのは猶上等の部で、場合に依ると癩病患者泥坊も泊ることがある。下等社會の憐れなる孤

獨者が無二の樂境、それが此のホテルの特色で、はい、宿泊料は七錢ぐらゐから十錢止り、安いも

「んですなア、お父さま」。「莫迦ッ！」伯爵は目を睨つた。「そ、そんな所へ泊つたのか、た、謔氣奴ッ、言語道斷、憫れて物が言へん」。叱つてから康子の方を向て「おい、違つてるぢやないか、違つてるぞ」と不機嫌さう。「左様でございましたか」。怖々と後に畏まつた康子は、間が悪さうな返辭をして「アノ、情望穩かに……」。流石に吾兒を庇つてゐる。「穩かには能さん、醉狂にも程がある、む、それは未だしもぢやが、汝は野宿したといふぢやないか、觀音の境内……事實ぢやらう」。「致しました、野宿といふと變ですが、實は勇敢の氣性を鍛鍊する爲に、夜間の斥候任務、野外露營をいたしましたんで……夜半の公園、妙でございませうか、お父さま、如何でございませう、尊臺も偶に爾いふ御見學を遊ばしては……第一社會の暗黒面を……」。「莫迦ッ、つまりんことを云ふな、生意氣に軍隊の定語などを用ゐて、瞞著し居る、汝は何を苦しんで那麽浮浪人の眞似を爲るんぢや、自分の位地、一家の名譽といふことを願ふのか、よく新聞などに見える不良少年、名家の子弟が墮落して、悪い奴の群に投じた結果ぢやといふが、汝も注意せんとそんな無頼漢になるぞ、ア、情ない奴ぢやわい、夫は未だ可いとして、汝警察へ拘引されたといふぢやないか、汚らはしい警官の手にまで懸つて、赤恥を晒すとは何事ぢやッ。呆れ果てた阿房者、華族といふ肩書を忘れたのか、む、」。

伯爵の語氣は次第に厲くなつた。須磨子は自分にその劍尖が向いてゐるやうに、肩を潤めて母

の近くに小さくなつてゐたが、此時燦かな顔を擡げて、

「お父さま、情願御免遊ばしてくださいまし、私しが、アノ、兄さまをお止め申さなかつたのが、悪いので御座いますから……兄さまだつて別に……」。「黙つてお存在なさい、お前の知つたことではなう」。

何か言はうとするのを、父に一喝されて口を緘んだ。

友麿は何にも言はずに唯にやり／＼と笑つてゐた。

「夫ばかりではない、汝、此頃青山墓地で乞食共を集めてからに、何か饗應様のことを致したといふぢやないか」。あらそれを被仰つては。「惕悚して聞いてゐた康子は、驚いてついと口を出したが、睨つけられて顔を背けた。「いやア、秘密漏洩！」。友麿は手を額にあて、「不可ませんア、お母様密告なんぞ爲すつぢやア」。怨めしさに母を仰見げた。「何ぢやと思つて左様な莫迦な行爲をした、人も有らうに乞食輩と同席いたして、一緒に酒を飲むといふのは、幾んど常識をもつた人間の爲るとではない、發狂したのか、汝は!？」。

伯爵の聲はいよ／＼甲高に響く。と、友麿は飛石の上に隣り出して、

「お父さま、發狂したかとは何といふ御言葉です、私は正當の理由なく、又た目的なくして、此の手や足、唇、眼を妄りに動かした例はないです、木賃宿の探檢も乞食の招待も、皆夫相應の理窟が

あつて爲たことですから、妙と謂はざるを得んではありませんが、其の理窟もお確めなさらぬ先から、發狂呼はりは些と慘酷ですなア。「何が慘酷なや、何が妙なや、理窟があるなら聞かう、言へッ」。「申しますとも、お父さまは近來社會の生活狀態がだん／＼險惡になつて來て、その結果、いろんな犯罪者や、道徳の刃に人格の目鼻を殺ぎ落された精神的不具者が、梅雨時に微の生えるやうな勢ひでドン／＼出來ることを御承知でせう」。「知らんで甚麼する」。「畏くも仁慈に富ませ玉ふ我が大君より、無告の窮民へ巨額の御救恤費を賜はつたことも御承知でせう」。「む、いつも大御心の辱けなさに感激し奉つて居るわ」。「手を捧げ首を下げた」。「それだからして、私はお父様のいはゆる馬鹿な眞似を爲るです、馬鹿だと被仰るけれども、それはお父さま御一人のお考で、爲る當人の私、是でも餘程偉い抱負であるんです、貴族相應の事業だと信じてゐるんです、つまり下層社會に足踏して實際の情況を探るのも、人外漢の乞食に交際するのも、野宿をするも、又た警察に引張られるのも、渾て是れ活きた學科、文字のないブックを讀むんやありませんか、爾うせんでは暗黒界の消息が解りません、消息が解らんでは、彼等を救済するにしても感化するにしても、その急所に向つて直ちに薬を投ずるといふ譯には參りませんからなア」。「すると汝は、貧民救済の慈善事業でも始める目的か」。「外に最う一つあります、暗黒社會の内狀を研究すると共に、その趣味に同化して、悠々たる樂を享くる、それです」。「異な事をいふ、乞食に同化するとなると、同じ乞食に

なつて了ふぢやないか」。「左様、どうかすると爾うなりませすな」。「洒落どころぢやないわ、併し身分、名譽、品位といふとを考へなけりやならん、貴族の身として爾いふ輕佻な……」。「モシ、お父さま、尊老は身分々と被仰るが、人間の名譽や富、權勢、そんな物は何の價値がありますか、む、好い實例がある、今のお話のその乞食ですがな、實は墓地を巢窟にして、附近の人家で窺々泥坊を働くやら、墓を荒すやら、亂暴狼藉に至る所なしといつたやうな始末、家の墓所などもその難に罹つたといふ注進がありましたんで、餌を與へて一所に召集してから、懇々説諭をして、正業にありつくやうに相當の資本も呉れて遣つたですが、それを好機會に彼等の生活振を調査しますと、驚くべしですね、お父さま、其中に以前關西地方で、百萬の資産を有して、一時實業界の羈王とまでいはれた男が居ましたぞ、殷鑑遠からず此の乞食に在り、お父さま、一つ今日のお土産を御覽に入れますら、さア是です」。

足下にあつた例の古靴一隻を取るより早く、ばたりと音させて縁の上へ投げ出した。

「何ぢや、是は？」。

伯爵は眼を圓くした。母も妹も伸上つてそれを見詰めた。

友麿は得意貌の元氣な聲で

「お父さま甚麼です、その靴は？古色蒼然、氣韻流動、非凡の名器でせう、尊臺は骨董がお好でゐ

らつしやいですが、是なんぞは近頃の掘出物でムいませ、お氣に召したらお買上ください、お安く致して置きますよ。」何です、友麿、こんな汚穢しい物を……失禮ぢやありませんか。「愈々こりや發狂ぢや」。

双親は只と憫れて目を見合せた。

「え、その汚ない所が値打で、はい、お父さま、夫は歸つて来る途で拾つたんでございますが、實に好い教訓でございますぞ、尊臺は誰が御自慢で、よくおうたひなさいます邯鄲、彼の文句を聞覚えて居りますが、確か慙でしたな、宮殿樓閣はたゞ邯鄲の假の宿、榮華のほどは五十年、さて夢の間は粟飯の、一炊の間なり、不思議なりや、はかり難しや、つらく人間の有様を案ずるに、百年の歡樂も、命終れば夢ぞかし——おしまひが南無三寶——か、アハ、此の靴が即ち邯鄲一炊の夢を現實に表したもので、虛榮の末路が此の通り悲惨な骸になるといふ無言の證人です、如何です、お父様、是でも尊臺は猶且、品位だの名譽だのといふ詰らない執著心をお捨てになるとが能きませんか。「なにを生意氣なツ、さ、汝は華族が、さ、嫌ひぢやといふのかツ」。

伯爵は赫となつた。

「嫌ひです、大嫌ひです！」。

友麿は聲に應じて叫んだ。

「勝手にせい！狂人奴。」憤然として身を起した、伸す腕に無手と押取つたのが、承塵にかゝつた由緒ありげな弓の折、それをざりと握つて、袖捲りの凄まじい見脈で庭に下りたが、爪先の戰慄にも極度の亢奮が明かに讀まれた。「其處へ直れツ、不所在者奴ツ、さ、汝は當家を何と心得る、畏くも清和天皇の皇孫、鎮守府將軍源の經基八世の後裔、新羅三郎義光の血統ではないか」。

劈けるような聲である。又かといつた風に友麿は目許で笑つたが、神妙らしく首を下げて、その笑を隠した。

「代々國家の精華として、上に對し忠勤を擡んで來た家柄ぢや、其家に生れながら貴族が嫌とは何ぢや、何の謔言ぢや」。「ですけれどもお父さま、嫌ひだから嫌ひと申すんで、好悪は人間の自由意思ですもの、如何するとも能きないぢやありませんか」。「まだ口應へをするか、ふ、不埒者奴、さ、汝のやうな奴と口舌の争ひは無用ぢや、祖先への申譯、エツ寧そのことにツ！」。

把直す弓杖が閃くと、友麿の背の上の邊で、ばかりと音がした。

「あれツ、お待遊ばせツ」。

先刻から堪へかねた様子で、もじくしながら囁めてゐた須磨子は、いきなり足袋跳のまゝで庭へ駆下りて、犇と父の手に取紐つた。

「お父様、お父様、御免遊ばして下さい、情願這麼お手荒な事を遊ばさらずに」。「いや、放せツ、

お前に關係したことをぢやない、退け退けッ。」「いえ、放しません、お怪我でもなすつたら大變でございます、わ、私し兄さまに代つてお詫を致しますから、ね、お父さま私しにお免じ遊ばして……」。

後は聲が亂れた、凝然と父を仰見ける瞳に露、その光を兄の方に向けて

「兄さま、貴君は何故そんなことを被仰るの、御立腹なさるのは當然ですわ、さ、お詫をなさいまし、ね、兄さま、貴君がお悪いんですもの、仕方がございませぬわ。」「む、」。友麿は氣のない聲を唸るやうに吐出して、腕又したなりに妹の顔を見返した。「致方のない奴ぢやのう。」伯爵はパタリと笞を投げて太息をついた。

康子は座敷に坐つたなりに、脊を見せて手巾を顔にあてゝゐた。

四

程なく日が暮れかゝつた。友麿は庭先に居残つて、唯一人木苧然と考へてゐた——跡に棄てられた様な佻しい影を、支那焼の凳子に託して。

一口に怒と云つても色々品がある。その中で愛から出る怒、たとへば春の海である、夏の雷である。氣立ましい轟きのうちにも、暖かな慈悲の潮があふれ、優しい愛の光がきらめく。お父さまのは

それだ、叱られても心地が好い、怨めしいとか不平だとかの感じは更に残らぬ。もそつと強く骨身に徹へる程、打つてくだされば可いに——彼箇だけの見脈なら、打つにも精一杯の力が入りさうなもの、入らねばならぬ筈なのに、痛いと思ふ丈のズンとした強味も、此の肉に泌込まなかつたのは什麼いふ譯であらう、よくいふ可愛い子には急處を避けて打つ、それだらうか、否、那麼女々しいお方ではない、と、矢張精力が衰へたのかな、最う今年は六十三だ、御心配なさるのも無理はない、是は考へなければならぬ。が、併し其の思想には絶対に服従することが能きぬ、或は間違つてゐるかも知れぬけれど、正しく間違であるといふ解案を得るまでは、僕は即ち僕の意思として、必死と是を擱んでゐなければならぬ。僕は不幸か幸か、こんな意思を與へられた、與へられたといふよりは、囚へられたと云つた方が可い、囚へられても構はぬ、囚へるだけの力が彼に在るのだ、彼は今激刺として僕の胸に躍りつゝある、どんな壓迫を加へて來ても只一飛に突劔ねる、これ程強大な、爾も陰微なものをお父さまの瘦拳で、喉でも、絞めるやうに、無理に窒息させやうとなさるのは、失禮だが、活きた人間に對する作法ではない。と云つても家——此の家庭がなア。

こんな事を止途もなく繰回してゐるうちに、烈しく刺撃された頭腦が、づき／＼と蠢くやうに覺えて、凝乎と沈着いてはゐられなくなつた。凳子をひよいと離れて棒立になつて、空を仰ぎながら下つ腹で深く息を吹込んだ。

初夏の庭園は自らなる水彩畫である、水々した若葉の柔かに折重なつた隙間から、金色の瞳で窺くやうに、夕陽の鮮かな光線がまぶしく洩れて来る、その縁を面白さうに揺がし立て、囁き合ふ風の匂ひが、小さな蔭に似た紅い楓の花を、ばらばらと足下に振落した。

「若さま、若さま、エへ、」

何處でか呼ぶやうだ、斃枯れた太い聲を忍ばして、その尾にエへ、と来た。

「誰だ。友麿は回盼つた。」「私で、へい。」「枝折戸を開けて、こつそり這入つて来たのが、馬丁の源吉であつた。」「大丈夫ですか、最う何誰もゐらつしやりアしませんか。」「

座敷の方を氣遣ひながら、爪立てた足を鷺のやうに運んで来る。それが三十年配の、毬栗天窓のしやくれ顔、眉の下がつた、眼の細い、額の出張つた、併しながら口許の愛らしい、氣の好さうな男。

「源吉か、何だ。」「エへ、何だつてかんだつて、驚いッちまつたんで。」「紺の法被の裾をばつと捲つて、其前に蹲みながら「實アちよいとね、濟まねえを失敬させて、大向ふから立見をやらかしたんで、一幕三錢、安いもんで、凄うがしたな、若さま、彼の弓の折がピンと来た時なんぞア、俺ア實際ぎよつとしましたぜ。」「見てゐたのか、汝……悪い奴だな。」「甚麼で此方も敵役なら、悪いに定まつてまさア、だが若さま、青山墓地の一件ばかりは大味噲をつけやしたね、だから私ア言はね

えこツちやア無え、知れると首になつちまうから、お伴は眞平だとお斷り申したのに、汝に迷惑は懸けないツてんで、無理に引張出したんぢやありませんか、露見ッちまつた日にやア、最う長えこともあるめえ、今にもボカリとやられるに定つてゐるが若さま、私ア甚麼なつても構はねえから、尊君は是にお懲りなすつて、最う彼麾下等な遊びはふツつりお止しなさいやしよ。」「いや、止めない、止めないよ。」「えー。」「え、止められねえンだつて?」。源吉はぎよろりと眼を睜つて、思はず大きな聲を出したが、其下から辭の粗野だつたのに氣がついて「いえ、なに、お止しなせることが能きならねえと被仰るんでげすか、そりや一體甚麼いふ譯でね」と今度は莫迦に御叮嚀だ。」「止まなくつたつて可いちやないか、何も止まなければならんといふ理窟はないさ。友麿は双の脇をくの字に胴の所を抑へて、庭の楓の青い梢を仰見げながら言つた。「ですが若さま、そいつア不可ませんよ、そいつは些と非常線だ。」「何だ、非常線とは。」「なに、聞立のほやく、先刻御前様が被仰つたお叱言のいくさり、何のこつたか、私には吞込めねえ。」「あア、非常識か、莫迦ッ。」「だからハツペイ戦で。」「又た解らないことを言ふ、何だ、それは。」「いえ、なに、無鐵砲の御親類で。」「む、白兵戦のことか、アハ、いろんな符牒があるな。」「エへ、學者は違つたもんさ。」「源吉は口を窺めて眼をぱくりさせながら短かい顔を前に突出して

寧ろその、止めやうと思つたら止められねえつてえ理由は、恐らく到底、生蕃人にもお生憎さまで
 げせう、赤坂見付の電車でさへも、ブレーキ廻せば直停る。止めて止らぬ厄介物は、栓の壊れた水
 道の水と、惚れた二人の仲ばかり、コリヤ〜でせう。「アハ、何を言つてるんだ、暢氣な奴だ
 おい源吉、又た何處かへ出掛けようか、何ぞ變つた所がないか、おい」。

友麿は前に體を屈まして、莞々した目つきで、おびくやうに其の顔を見た。

「え、又た出掛けるツツで？デョ、戯談ぢやねえせ、本賃宿の御案内で御用済になつたかと思つた
 ら、直とお替りで、今度は乞食の懇親會に接待役仰せつけ候とお出なすつた、最う〜澤山〜、
 若さま、拜む、願ひ下〜」。

右の掌を鼻の頭へ持つて来て、びよこびよこお辭儀をした。

「ぢやア汝、俺の吩咐に背くんだな。友麿は故意と佛然とした様子を見せて「宜しい、そらいふ精
 神なら俺にも考がある」。「ど、ど、甚麼……」。源は慌てた。「最う汝を庇つては遣らん、過日のこ
 とも源吉が私を教唆して、誘ひ出したので御座りますと、お父さまに爾申し上げて、直と放逐する
 が、可いか」。「な、な、情ないことを被仰る、わ、若さま、そ、そいつア胸慥だ、餘りだ、泣くよ、
 俺ア、汽車の笛の聲を出すよ、出すよ、慥なりやア」。「ぢやア、連れて行くか」。「行くかつて、
 何處へ行くんですよ、助からねえなア、眞箇に」。

源はベソをかいた、友麿は笑つて

「何處か無いか、面白い所が……我々が滅多に足踏の能きない、慥う何だな、一目してよく世態人
 情が解るやうな場所なら至極佳いが」。「困つちまうなア、是が道樂だつてんだから、手が著けられ
 ねえ」。源は天窓を搔いたが「エヘ、若さま、有りやすせ、有りますせ」何か思ひ出して、急に
 やにや。「有るか、何處だ？」「有るの無えのツツで、エヘ、こ、堪えられねえのロースビーン、じ
 や〜肉の膏こつてり、憚りながらサンキーオーライ、ペーロシヤア、南無妙法蓮華經とおゐでな
 ざるんだ」。「ハ、ア、洋食屋か」。「どつこい、なか〜那處所かい」。

掴んだ手拭を肩に投げて、腹掛の井から敷島を抜き出しつゝ、舌を管ずつて摺寄つた。その瓢筋
 な顔は笑に頰れて、目も鼻も消えたやうだ。

此の道化た、間違つたことをひよいひよいと眞面目でいふのが、ひどく友麿の氣に入つてゐた。罪
 のない面白い奴——そんな意味で可愛がつた、併しその可愛がり方が、鬨哥や飼犬のヂヨンに對する
 心持と同じであつた。

「うむ、吉原か、でなければ洲崎だらう、如何だ、違つたか」。

それくらゐな事は知つてると云つた様な、惻怍を銜ふ眼つきをして、友麿は言下に衝込んで見た。

「ヨイシヨ、その通り」。源公は手をびしやりと拍つて「是だもの、今の華族さまは油斷がならね

え、エへ、若さまの前だが北廊と来ると悪くござせんぜ、惚けちや濟まねえが、何日だつたか、情歌ごっこで痴語つたことがありやした、エ、腹を立たせりやボン／＼跳ねる、主は甚麼やら馬らしい、俺のお里を素破抜さやがるから、うまくあてたぞ此の古狸、頼むぜ畜生お手柔かに、とヤツつけると今度は、淨氣なお前に縛を篋めて、私の苦勞を曳かせたい、と吐しやアがる、癪に障つたから、狐を乗せたら汚劣が下る、是でも競馬ぢや二等賞、と吹いてやつたと思えなせえ、すると奴の言草がい、主の爲なら身を磨墨の、茸毛にされても厭やせぬ、だつてさ、エへ、堪えられねえぢやござせんか。「薄ッ氣味の悪い聲を出すな、何だい、それは——歌の會か」。「エへ、是でさア」と小指と一緒に首をすーと突出させて、「若さま／＼、繰出しやせう」嘘しかけるやうに微聲にいつて「まア行つて御覽なさいやし、可うがすせ、大店なんぞア詰らねえから、一つ變つたチヨ／＼格子、積熊のトンネルてえ所へワアと威勢よく突貫しませう、お目に懸けてえね、紅え襦袢を着た女の兵隊が一聯隊、長え煙管のさ、げ録で、ズラリと兩側に列んだ所へ、突込めッ、オーイ」。「何を言つてる、そんな妓樓なんぞは見たくもない、何か外に有りはせんか」。友麿は氣のない顔。「お氣に召しませんかい、こいつは失策つた」頭を掻いて「ぢやア寧ろのこと、恠いふ所は甚麼でげす、ちよいと學生さん、インパチスのお方、寄つてらッしやいな、駄目よ、逃げるなんて卑怯だわ、又來ると化物ア出たこたない、あら好くないお巡查さんだよ、てえを所へ」。「は、ア、何物

だ、それは」。「銘酒屋！溝ッ畔の薄ッ暗え横丁にウヂョウヂョと群つてる、顔の眞白い、豚のお化で」。「莫迦ッ、そんな不潔な場所へ足踏が能きるか、僕は動物の研究をするんではないぞ」。「ぢや、又た脱線か、何でえ」。「外に無いか、最つと毒々しくつても構はんから、恠う何だよ、極めて深酷な惡辣な、例へて云へば人間と人間とが咬合つて、どろりと血が流れてゐるやうな、心と心の痛手の呻きが、絶えず暗い空気をかき濁してゐるやうな、まア那處場所なら申分がないんだがなア」。「妙なことを言出した」。「え、何でげすッて」。源公には一寸腑に落ちぬらしく「咬合つて……血が流れて……はアてね」と首をひねつて「そいつは恐ろせえ註文だ、戰爭場か地獄の外にはそんなのは有りやアしねえ、ぢや若さま、病院の外科室か屠牛場へでも行つて御覽なすつたら可いでせう」。「いや、そんなのは面白くない」。「困つたな、無理ばかり被仰つて」。「考へる下から、ひよいと顔を擡げて「あッ、有る、有る、是ならば説へ向だ、爾う／＼不思議館！不思議館！彼箇だ／＼」と叫んだ」。「何？不思議館！名を聞いたくでも面白さうだな、ど、ど、何處だッ」。「友麿は的を射抜いたやうに、満足の笑を洩らした。忙しく摺寄る刹那のうちにも、早や好奇の心がずき／＼と胸の血を煽る。

庭はいつしか暗くなつて、老樹の梢に銀色の夕庚が瞬いてゐた。

* * * * *

翌る日は日曜だつた、午後の三時といふ頃、英家の玄關先へ立つた二人連の客がある。
青山の原で友麿に遇つた甚五右衛門とその時の話に洩らした孫であらう、未だ若い娘が後に隨いて居た。

五

英の邸宅は青山の高樹町にある。木立の深い庭を後に、室町式を今様に折衷した普請、思ひ切つて翼を張らした幾棟かの館づくりは、グロツス大名氣質をよく現してゐる、中にも三十疊敷の大廣間は、主人が青年時代に登城した柳營の帝鑑の間を小さく見せたものとやらで、天井唐草小壁山吹、襖は濱松、狩野主馬の書をそつくり模させた。此の書院は十萬石以上の御譜代が詰めた將軍家の對面所、恣して昔の面影を偲ぶのだと、いつでも客に對して誇る。それほど保守的な主人であるが、時の流行に乗せられてか、いつの間にもやら表に一棟の洋館を拵へた、序に垣も花崗石に、門も青塗の鐵扉にあらためた。

伯爵の影はいろいろな肩書を持つてゐる、現役ではないが陸軍少將といふ嚴めしい履歴もある。有難い金盃も光る勳章もある。會社との關係は前年感ずる所あつて悉く絶つた、今では單純な貴族院議員で、何會とやらの政友間に副首領の位地を占めてゐるばかりだ。

康子との仲に出来たのが、友麿と須磨子二人のみである。友麿には同族の佐伯伯爵の令嬢で喜多子といふのが、新夫人として迎へらるゝ約束で、大學を出ると直ぐ式を擧げる筈だつた。伯爵夫妻は小兒のやうな心持になつて、そればかりを嫉みに侍つてゐた。と、茲に飛んでもない問題が湧いて來た。此の春以來の友麿の行狀——妙な方面に逸れた心理的變化——それである。

何處から落ちた種が、こんな異様な花を咲かせるやうになつたのか。その心蓋をかくまで怪しく彩つた色素は何か、放任して自ら伸びるまゝに曬めてゐたら、如何にその蔓が屈曲してゆくか、結局どんな實を結び、どうなつて枯れるであらう、と研究して見る餘裕もなく、伯爵は只ひたぶるに驚いていきなり其の花を搔撈らうとしたけれども、不思議な植物はその根の存つてゐるかぎり、依然不思議な特性を最後まで發揮すべく、不斷の努力を以て長閑に營養分を吸上げつゝある。何等かの實を此秋に作らうとして、絡まる枝を求めつゝ自ら上を仰いで進む。

その晩から翌る日にかけて、家庭は何となく不快の空氣に包まれた。友麿は父の顔を見まいくと避けるやうにしてゐた、康子も成べく遇はせまいと努めて居やうに見えた、須磨子は學友の音樂會があるとかで、朝から出て居なかつた。其處へ甚五右衛門が訪ねて來たのである。

甚五右衛門は舊藩地の故老で、大祖父の時から三代も御小姓や御側用人を勤て來たといふ、古い折紙のついた爺さんだつた。その長男は國に、次男の香取甚三郎といふのが工兵少尉になつて、麻布の

斧町に居る、平生は其の家に住まつて郷里へ往つたり來たり、暢氣な餘生を送つてゐた。英家には時々見える、その度ごとに舊主人から優しい言葉をかけられて、何か頂戴物をする、ほくほくと悦んで、杖に縋りながら元氣よく歸る。それが甚麼したのか暫く來なかつた、今日不意に孫娘のお園を連れて參上したのは、恰ど三月越である。

友麿は午後から二階の書齋で午睡をしてゐた。其處へ甚五右衛門がお園と一緒に這入つて來たが、心地よさうに眠つてゐるのを見て、お園一人を置いて、自分は樓下へ降りて去つた、お目覺になるまで夫人の所でお話をしてゐるから、と言置いて。

「うん、あ、あ、あ——」。

友麿は撲然と寢返打ちながら、呻吟ともつかず欠伸ともつかぬ變な聲を揚げた。書齋の真中へ斜に顛がつて、不行儀な寝姿を見せたまゝで。

天窓は空氣枕から外れかゝつてゐる、腰から下にはシルクダマスクの美しい花模様ある旅行蒲蒲を、ふはりと被けてあつたが、それも形式的で、白メリヤスの股引を穿いた片足が、膝を立てたなりに抽然と出てゐた。その側には讀みさした洋綴の書と、朱總のついた古い鐵如意が、抛出されたやうに別と置いてあつた。

少し離れて坐つてゐたお園は、喫驚したやうに俯けた顔を擡げて、慌て、居すまひを直した。

が、友麿は猶且目が醒めたのではなかつた、危く敗れかゝつた夢を繕ひ直して、更に奥深く無我の境に入つたやうに、轟といふ聲を立てた。

お園は呻としたかの如く、斜めに男の寝姿を覗めた、それが偷むやうな目づかひであつた。けれども生憎脊を此方へ向けてゐるので、どんな顔だか見えなかつた。

その瞳はぐるりと一廻轉した。室内のあらゆる物が移つた。來た時は何だか茫として、輪廓さへも朦朧氣であつたのが、心の沈著くにつれて、霧の霽れたやうに分明と印象されたのであらう、物珍らしさうな、氣味悪さうな、驚いたやうな色が面にまざりと露れた。

書棚に列んだ金びかの洋籍は、起きたのもあれば倒れたのもある、紫檀の机には書き損じの原稿紙らしいのや、紅い墨汁を拭いた紙屑、草花の凋れたのやらを亂雑に取散らして、傍の古詩繪の胴丸火鉢に、半分も吸つたか吸はぬ紙莖が、船著塙の橋のやうに林立してゐる。それは未だしも、頗る異様に見られるのは、石膏細工のヴィナスの像へ、肩からだらりと懸けてある一隻の古靴で、泥を洗ひ落したその濕氣が乾き切らぬやつをぼろぼろになつた儘麗々しく飾つてある。臺の上には眞物の鬮體へやはり石膏の白蛇をあしらつた置物と、銹だらけの鏡の取れかゝつた、鹿の角の前立ある古兜、黝く燻ぶつた武者人形、南洋産の蜥蜴の剝製などを列べてあるのが、天井から吊した西洋物の玩具人形と、柱にかけたヒョットコ面の滑稽なものと相映じて、怪しくも殺風景にも又た可笑しくも見て取ら

れるのである。

「うむ——、うん」。

又た唸つた、と思ふうちに此の不思議の趣味を持つた書齋の主人公は、くるりつと旋回機關のやうに體をまはして、お園の坐つてゐる方に頭を向けた。にゆつと伸して手がその胸の邊を掠めて、柔かな膝の上へばかりと落ちた。お園は愕然として逃げるやうに後退した。さうして室の隅に肩を凋めて小さく跣まつた。

友麿は大きな欠伸をして、眼をうつとりと開いた。お園の姿がそれに朦朧と寫し出された時に、夢ではないかと思つたらしく、倦さうに手を舉げて臉を摩つた。

「誰だ、其處にゐるのは？」。

半は寢眠聲で咎め立てたが、黙つてゐるので、勃然と飛起きて、睨めるやうにお園を見詰めた。

「何處から來た、汝は……あゝ？」。「……」。「……」。双方とも少頃無言。

今は鮮かにその姿を看るとが能きた。體つきの娉妓とした、細面のおつとりした、青ばむほどに色の白い、肉の貧しげなのと眉の薄いのだけが、寂しくも見ゆれ、刻みつけた様な鼻の小高い、口許のきゆつと緊つた、額際の劃然した、いかにも生地其儘の美人ではあるが、始終俯き勝に下目を使つて居るので、美しい表情機關も、あたら臉の陰に殺されて了ふのが一つの憾であつた。須磨子とは同じ

頃の年配らしいが、彼とは違つて消極的の、何だか陰氣な、無愛嬌な、冷たさうな、無口な、引込思案な、めそ／＼しさうな、死んだら幽霊になつて化て出さうな女だ——と友麿は極端に爾う思つた。服装も極めて野暮流行遅くれの藤紫を半襟にして、茶が／＼つた銘仙へお譲り物らしい紺の琥珀の帯をお太鼓に脊負上げてゐる、それでも髪だけは山の手風の高島田、昨宵あたりは枕を氣にしてゐたらしい。

「アノ、何でござやります、私、アノ、ちよつくら……此處へ……祖父さまが待つてると被仰るものだから……アノ」。

お園はぼつと顔を染めて、忸怩しながら答へた、半分は口の中で呟々、膝の上に乗つた麻黄の手拭が、その織い指尖で何遍も疊んだり擴げられたりした。

「ござやりますと來たな、ハ、お前、田舎だな、國の者らしいが、祖父さまとは誰のことだ……困るなア、家の奴も……無断に這座女を入れて……おい、誰か居らんか」。

友麿はぼん／＼手を拍した、お園は泣き出しさうな顔をして後を回盼つた。次の間の襖が開いた、軽い足音を刻ませて、書齋に這入つて來たのが妹の須磨子であつた。今歸つたばかりと見えて、被布の下に桔梗色の袴を着けた儘——その匂やかな面に少し汗ばんでゐた。

「兄さま、なアに」。立つたなりに一寸窺いて「あら、お前なの」。眼を直とお園の方へ向けて嫣然に

笑つた。「お、順磨さん、お前此の婦人を知つてゐるかい、誰だい、是は？ 訊いて見ても一向要領を得んのだ、僕が午寝をしてゐる油断を窺つて、女人禁制の此の室へ得體の知れん女を引入れるなんて、怪しからん事だ、お前の悪戯だらう、連れて行け」。「オホ、何を言つてらッしやるの」。須磨子は兄には頓著なく、馴々しい調子でお園に「お前でせう、爺やの孫さんは……今私遇つて来てよ、爺やに……まア眞箇に嬉しいことね、私、須磨よ、是からは世話になるわ、いつ出て来て？ 佳しのねえ」。

急しく言つて其の髪を仰見げた、閃くやうな詞の意味を一々解得めぬらしく、お園は當惑さうな顔をしながら、びたりと手を突いて叮嚀に。

「はい、私、園でおぢやります、尊嬢さまが、ほれではアノ、お姫さまでおぢやられますか、是はハヤ誠に恐れ入りましたことぞ」。「怖々と述べて「何にもハア存じませぬ無調法者でおぢやります、宜しうお願え申し上げますでおぢやります」と疊に額を摺つけた。「あア、それでは何か、甚五右衛門の孫か、ひ、道理でそんな話をして居たよ、ハ、ハ、ハ、何の事だ」。

友磨はぶつと失笑した、誤解をしたのが可笑しかつたといふよりは、寧ろ其訛澤山の莫迦堅い言葉が、臍をそつて堪えられなかつたのである。

「いえ、私こそ願つて置くは、仕様のないお轉婆者だからね、喫驚して逃げたり何かしらやア可厭よ、いゝこと、仲好くしませうねえ、オホ、」。須磨子は眞眞にする舊臣の血統と聞いて、他ならず懐かしく感じた見え、さも嬉しげな態度であつた。「いえ、御勿體もごぢやり申さねえ、有がたいお言葉で、御奉公をするからにやア最う二度と家の鬨を跨ではならねえぞと、アノ祖父に固く言はれましてごぢやりますゆゑ、どんな事がごぢやりましたも、御暇を戴きますやうな事は……」。

お園が懸命になつて、何か言つてゐるうちに、友磨は頻りと背後の置時計を覗めた、さうして胸の底で「遅いなア、未だ日が暮れんのかな」。

「ねえ、兄さま」「何だ」。

お園を傍に置いたまゝで、兄妹は他の談話に轉つた。

「あら、随分ねえ、怖いわ、そんな顔をなすつて……最つと優しく返辭を遊ばせな」。「ぢやア、はい、何の御用でござります」。「可厭ね、挑弄つてばつかり」。「須磨子は笑つたが、直と眞面目になつて「あのね、兄さま、昨日のどね、悪いわ、尊兄の方が……何故彼歴亂暴なことを被仰るの、お怒んなさいますわ、彼箇ぢやア……傾で聞いてゐても惕悚するくらゐなんですよ」。

不意に手を捻揚げられた様に、友磨は聊か面吃つてきよろりと妹の顔を見た。

「何の事かと思つたら昨日の一件か、今頃になつて揚足を取る奴もないものだ、最う可いぢやないか、濟んだ問題なら」。「目を横に轟らした。「いえ、濟みません、私、昨夕から言はう〜と思つたん

ですけれども、會に行つたりなんぞ爲たもんですから」と遅くなつた理由を告げて「どんなにお母さまが、心配遊ばしてゐらつしやるか知れせんわ、私、お父さまの被仰る様なことは言ひませんがね、兄さま、切めて紳士らしい體面を有つて戴きたいのよ、何時までも無責任な書生ではゐられないぢや御座いませんか」。

兄思ひの眞心は、その黒い瞳に熱して、幾分か激したやうな調子を帯びてゐた。

「最上可いよ、可いよ、解つたよ」。

蒼蠅と言つた風で友麿は手を振つた。

「可かアございません、是から氣を注げて戴きませんと、中に介在つた私が、眞箇に切ない思をしなければならぬので御座いますから、ね、兄さま、私を可哀想だと思し召して、彼塵狂人染みた行爲は一切お止し遊ばしてくださいませ、宜しう御座いますか」。「……」。黙つて又た時計を看た。

お園には何の事だか解らなかつた。まじまじと瞬きして、所在なげに庭を瞰下しては、時々兄妹の方を偷み見る。足に癩れを切らしてか、そつと手を遣つて撫るやうな様子も交つた。

「そしてアノ何でございますわ、喜多子さんの方にこんな事が知れますと、それこそどんな誤解をされるか解りませんわ、そんなことから結婚の御約束に悪い影響……私の取越苦勞かも知れませ

んけども、萬一のことが無いとは申されせんからね、兄さま、些と將來のことも考へてくださいませしな」。

結婚といふ一語が異様に響いたのか、お園はふつと耳を敬てた、さうして正的に友麿の顔を見たが、それも刹那の間で再び俯いて了つた。

「チョツ、執濃いナア」。避けるやうに机の方を向いて、在合せた繪端書に何か横文字をのたくらせてゐた友麿は、突然ペンを投出して「喜多子が甚塵した、可厭なこつた、彼塵女！約束が破れたら却つて有難い、寧ろ破れて呉れ、ばよい、僕は切に祈る、一日も速かに其時が來て欲しい」。確かに敵を罵倒する聲だ、見るも不快らしい響めつ面。

「あら、マア」。須磨子は惘れて、少頃凝然と兄を睨みつけてゐたが、堪へかねた狀で「兄さま、兄さま、そりや眞箇の精神で被仰るの!?え」。摺寄て顔を窺いた。「正氣ですよ」。今度は嘲るやうに云ふ。「餘りですわ、それぢやア……」。須磨子は躍起となつた、聲が顫える。

お園は顔色を變た、石の様に硬くなつて二人を瞻つた。胸の動悸でか呼吸が喘む。譯は知らず馴染は薄し、仲裁の口を聞く方法もないので、甚塵してよいかと思ひ惱むやうにも見えた。其處へ甚五右衛門が這入つて來た。

「お、園、未だち邪魔をして居るか、いや是は、はい、若さ、甚五右衛門奴に御座ります、

昨日は誠に、ハヤ飛んだ所でお目通をいたしましたして、失禮を仕りました、はい。恭々しく闕の處に平伏した影を見ると、お園は重荷を下した様に、我知らず時と一時に太息が出た。

その時、机の上にある置時計の長い針が恰ど十一時の所へ来てゐた。友麿は甚五右衛門の挨拶も碌々耳にかけぬ如く、倍とした眼でその針を見詰めた。

「短かいのが彼處に行くと、占めたもんだがなア」——心の奥で。

甚五右衛門は今日から孫を行儀見習かたぐい、使つて貰ふつもりで連れて来たこと、殿様と奥様にお目通の上御願ひ申したところが、早速のお許可で、直と御小間使にお取立くださるといふ有難い言葉のあつたことや、ぼつと出の田舎者で、更に東京の様子も分らねば、口の听様も粗野であること、學校はそれでも高等科を卒へ、女になくてならぬ技藝は一通り心得させてあることや、薙刀の使ひ分、小具足柔術、武張つたことも少しは仕込んであるから、泥坊の用心にもなるといふ様などを、種々と吹聴してから、何分宜しく御引立をと諄く言置いて、お園を残して歸つて去つた。

荷物は後から届く筈だつたので、お園は女中頭のお道に凡の世話をして貰ひ、充がはれた部屋の一割を自分の倉庫として受取つた。桂庵の手から来たのでないだけに、納まり方も無雑作であつた。須磨子とお園が出て去つた跡の書齋は俄かに蕭然となつた。友麿は厄介拂ひをしたやうに、暢々と

した體を二階の縁先へ持つて行つて、例の深呼吸をしてから、椅子の上に腰を下して庭園を眺めた、かと思ふうちに突と立つて、又机の前へ来て、欠伸をしながら時計を仰いだ。

「地烈たいなア、眞箇に……今日は甚感かしてるせ、太陽先生……」。

呟く下から娛しさに、胸の秘密をそろそろと手繰出した。

「エート、不思議館！不思議館！面白い聞いた計りでも一寸好奇心を挑發する、淺草邊の見世物か活動寫真にでもありさうな名だが、それが市中の或る處に隠れた大なるハンテッドホース、ミア化物屋敷のやうなものだと云ふから、頗る異だと叫ばざるを得ぬ、一體そんなのは何處に在るのか知ら、源吉は聞いても話さなかつた、行かないでは解らぬ、行つた上の勝負だとばかり、いやに俺を怒らしてゐた、それも可い、場所や内容を先に聞いたんでは興味の半が消えて了ふ、話すことの能きない、行つた上でなければ解らぬ所が、即ち不思議館の不思議館たる所以であらう、が、早く知りたいな、化物屋敷！むむ、よくあるやつだ、或ひはそれかなア」。

にゆつと會心の笑を泛べた、さうして先づ想像されるだけ想像して見た。半分はロマンチックの夢幻で凝結つてゐる頭脳だけに、いろんな物が飛出した。一ツ目小僧、轆轤頭、口が耳まで裂けた鬼女、雲突くばかりの大入道、そんな前世紀のお化は数に入らなかつた。ずつと今様に廂をばらりと裂した女の幽霊、冷たい風がカーテンを、ふはりくと揺がすと、長い廊下にはたたくと足音がし

て、硝子障子に茫と影が映つる、と思ふうちに庭の夏草月に動いて、古井の邊から泣くやうな聲で讚美歌をうたふたのが聞える——そんなものであつた。

「だと妙だがなア。」

覺えず傍にある鐵如意を把つて、何のつもりか、流々と振廻して見た。

「併し。爾と定つた譯ではなからう。化物屋敷の様なものだ、とは云つたが、だと判然云切つたのではないからなア、でないとなると、或ひは夫以上の不思議があるかも知れない、有つて呉れ、ばよいとしても解らないのは、源吉が風装を變へて行く必要があると云つたことだ、奴、その服装をうまく拵へて来るか知らん、さうして何處へ連れて行く心算なのか、さア愈々沈乎としてはゐられなくなつて來たぞ、最う七時だ、後が四時間、四時間の辛抱が大事業！大事業！」

堪らなくなつて、勃然と飛起きて、亢奮した神經を賺すやうに、次の間をぐるぐると廻り始めた。

六

青山通を最終の赤い電車が奔るのも、最う間があるまいと思はれる時分、高樹町の英家の裏手についた耳門から、こつそりと忍んで出た男がある。

表はいつしか往來が杜絶えて、霞といふほどでもない薄い水蒸氣が、ところ／＼の街燈の氣疎く霞

ぎせ、カドミニームの淡い光を螢のやうに見せてゐるばかりだ。邸の塀からぬつと突出した大銀杏が、電話線を曳く時に朧を切落されて、草箒を逆さに立てたやうな醜い姿態になつたのが、眞黒な天窓で空の星を撫でゝゐるのも、寂しい深更の色彩であつた。

「やう、源吉、やう」

向ひ側に空地がある、その溝の所へ行つて呼んだ。

「ちッ」。洞魔聲の返辭が聞えた。

間もなく空地に溢つた夏草の間から、人影が躍り出した。それが近くへ寄つて來て

「若さま、大丈夫でげすかい」。「勿論！行かう」。

溝越しに双方から顔を覗込んだ、低い元氣な聲だつた。

「ぢやア此方へ入つしやい、いろ／＼樂屋の支度があるんだから」。「諾ッ」。

一飛びに溝を踏えた。五六間奥へ行くと草の上にセル地の膝蔽が一枚敷いてあつた。其處に待つてたものらしい。

「驚きやしたせ、若さま、最つと安直にくだらうと思つたら、途方も無えことを吐しやアがるから、俺ア癪に障つてね、シヨンベンして遣らうとは思つて見たんだが、それぢやア用が足りなくなるから、まア／＼と我慢して借りて來やした、只た一晚で五圓！無法の終點だらうぢやアせんか

彼奴、何でも怪しく氣取りやアがつて、此方の足下へ突込んでるに違えねえ、癪だなア、眞箇に」。「何だ、五圓とは」。「いゝなに、衣類でさア」。「卒塔婆？ 變な物が要るんだな」。「戯談いつちやア不可ねえ、ソレ、這箇のことさ」。「あア衣裳か」。

折柄東がぼつと明るくなつた。地續きの會堂の尖塔が黒光して、鐘樓の横手に殺いだやうな片破月が上つた。その光で源吉の解いた風呂敷包を窺くのが友麿であつた。

「ハ、ア是を著るんだな」。「へえ、左様で、何でも日本橋の大けえ商人の若旦那だと觸込でいくんだから、その心算でもつて、ちよいと恠う異な服装をこしれて來ました、オットそこでだ、若さま、一件物は？」。「む、指環に時計か、心配するな、時計はお父さまのを無斷で借用仕つて、それから指環は妹のを徵發さ、見ろ、ソラ、此の通りだ」。

左の手の薬指を出して見せた。正しく金剛石、ブリューノワイトの光華は燦然と月に閃いた。同時に右の手で懐中から掴み出したのが、白金の短鎖のついた瑞西タペンス會社出の金側蛇の目形。

「いやア素敵、そんなら最う申分が無え」源吉はほく／＼して「ぢやア若さま、是から一寸遠州屋へ行つて、晝の中に約束しといいた俵を引張つて來やすから、その隙に尊公は此の衣類を著りなせえ、なに、直でげすよ」。「爾うか、急いで呉れ」。「へえ」。

源吉は駈出して去つた。その跡で友麿は忙しく風装を變へた下着が羽二重の御納戸に葵の中形、表

が一樂の唐棧綸、羽織もそれと對で、胸裏が染分の有職模様帯が博多焦茶の算木花菱の共獨結、外にのめりの下駄、絹足袋、インパチス、烏打帽などもそつくり揃つてゐた。

身拵へをしてゐる所へ源吉が戻つた、曳いて來た俵を路傍へ置いて、のそ／＼と近寄つて、首をひよこつかせながら

「いやア、出來たく、横から見ても縦から見ても、是なら立派な若旦那だ、それは可いとして、モシ、若さま、何だか知らねえが、今御屋敷の跡の所をね、變な野郎が二人、蹶々してゐやしたせ何でげせう、彼奴は？」。「ふむ、爾か」と言つたばかりで、友麿は別に氣にも止めなかつた。

「甚麽も變でげすよ」と源吉は咬いたが一寸腹掛の井から銀側時計を出して見て「おや、最う十二時か」。「早く出掛けようぜ、さア、源吉」。「へえ、是からお支度」。

晝のうちから、がつがつと悶え切つてゐた胸の動搖、それを知らず貌に、際どくなつてからいやに沈著きすましてゐる源吉の態度が、いかにも小面憎くつてならなかつた。

「何を爲てるんだ、早くせんか、おい源吉」。「さア、お待ちなせえ、是でも戰鬪準備がிரりまさら」。「股引を穿直して、三尺を締かへて、それから蝦蟇口を出して、五六圓ばかりの銀貨を勘定して、最後に隠囊へ手を入れると、一口の七首が現れた」。

「エへ、こんな物まで擔ぎ出すんだから妙でげせう」鞘を拂つてすつと月に翳した、凄い光芒が

刀尖に奔る。「何だ、刀剣ぢやないか」。友麿は悶然とした様子で「な、何故、そ、そんな兇器を持出すんだ、護身用か」。

咄嗟の間に怖ろしい想像が泛ぶ——或ひは血を流すやうな、流さなければならぬ様な、危険、殺風景、凄惨な場所ではあるまいか、と思ふと我知す悚然とした。

「マア何でも可うがさア、地獄極樂壁一重、上る梯子は剣の山、這つて轉んでおでこを打つたら、可愛い天女が抱いてくれた、コレワイノサ、さア出掛けやせう」。

何か解らないことを言つて、さつさと車の方へ行つた。その車は白銅骨の護謨輪で、未だ新しいものであつた。

友麿は急いでそれに乗つた、最う一直線だと思ふと、どきくと心臓が波打つて来る。轆はどちらへ！

東、東、東であつた。風に流る、漆黒の車影は、人なき夜の巷を我物貌に、飛ぶが如く、竿町へ這入つた。

「若さま、何でげせうな、先刻の奴們は……其麼も様子が變でしたせ。」
餘程來てから源吉は、急に憶ひ出したやうに、又た先刻のと言出した。

「それに何だ、ソレ、角袖さ、泥坊を捉まへる爲に密行してるのだ」。

友麿は知つたか振に慍う答へた、實はそんなのを問題にして研究して見る餘地がないまでに、胸の凡てが前途に横たはる一大疑問で占領されてゐたのだ。

空の月は朧で、風が生暖かつた。

七

此の晩、英家へ二人の賊が入つた。

その忍び口が、友麿の出て去つた裏の耳門で、それから庭傳ひに二階の家根へ上つた。恰ど友麿の書齋の雨戸が一寸許開いてゐた、其處から座敷へ闖入して、先づ電燈のスイッチを外して全家を眞暗黒にしてから、電話室を探して送話機を破壊した。

眞先に踏込んだのが茶の間で、寝てゐた女中頭のお道を蹴起して、逃るところを背後から取つて押へ、針金でその腕を縛り上げた。

「莫迦な奴だツ、命に他行はあるまい、死ぬのが可厭なら、柔順に俺の命令を聞け、泥坊さまだツて何もな、人を殺すのが御營業ぢやねえんだぞ、拙に騒ぎやアがるから止むを得ず無益の殺生を爲ちやア、新聞屋の御厄介になるんだ、お前所は人間が澤山にあるから、十人や二十人は小玉にかけられて叩ツ斬つても、人種が盡きやアしめえが、そんなことを爲たら華族の御名譽さまが汚れ奉ら

ア、さア、黙つてあん殿さまの寝てる所へ案内しろ何處だ？」
縛り上げてから賊はお道にこんなことを言つた。脈管の血も一時に停るまでに、強い恐怖に打たれたお道は、その詞の意味も聲の調子も聞分ける力がなかつた。只眞暗なところに獣のやうに蠢いてゐる黒い影が二つあつたこと、懐中電燈を時々點けたり消したりすること、手に何か光る物を持つてゐたこと、夫だけを夢のやうに意識したまで、あつた。

「参ります、参ります、ど、ど、何處へでも案内しますから、て、て、手暴いことを爲ないでください」。

がたがたと顫へながら、纔かに乾いた口を動かした。賊は懐中電燈をばつと射向けて、灰色になつた其顔を覗きつゝ冷笑つた。

「ふん、早くしろッ」。

恰ど此時、二間ばかりを離れた女中部屋に寝てゐた小間使のお春といふのが、闇へ行つての戻りだけに、茶の間で何か嘸々と囁聲がするのを、ふつと耳に入れた、それが其處やら女ではない様な氣がせられた、平生から仲の好くないお道、或ひは情郎で——もと勘繰ると、其儘打棄つて置けなくなつた、知らない振をして見違すが、主人に對して不忠であるやうに思つた、評いてやりたくなつた、見届けて證據を押へるのが、最も憎い仕打のやうに考へられた、尤も是には幾分かの間焼も好奇も交つてゐた。

で、窃と縁側傳ひに拔足して、茶の間の障子の所へ来て、よく耳を澄ますと、懼々したお道の聲が聞えた。あッ大變！それどころではない、愕然として顫へる足も空に、急いで部屋へ戻つて来て、手探りに電燈を捉まへて、點火させようとしたが、いくら提梁をひねつてもパチンパチンといふ音ばかりだ。

眞足下には、新參の朋輩お園が自分と床を駢べたまゝ、すやすやと幽かな寢息を立てゝゐた。

お春は電燈を放すと同時に、仆れるやうに其上へ乗菟つた、いきなり耳を引張つて、顔ごとにごいぐいと揺ぶり立てた。

お園は喫驚して眼を覺した。

「お園さん、お園さん、ちよいと、ちよいと、大變よ、早く起きて頂戴」。

低い聲に必死の力を籠めて囁いた——寧ろ叫んだ。

「何でござやいます、火事かね」。

お園は氣疎い聲の下から、慵さうに枕を掻げた。

「いえ、ど、ど、泥坊よ、泥坊が這入つて、今ね、お道さんを……大變よ、ど、什麼したら可いでせう、ちよいと。」「泥坊かね、そんだったら何も魂消ることはないだよ、何處だね、居る場所は」。「あ、

彼所……茶の間よ、強盗の様よ。「待たつしやい、今私が取捉めえて遣るだから……静かにしてご
ちやれ、騒ぐと逃げるだからね、いゝかね」。
首つ玉に噛り著いて、凍えてゐたお春を突のけるやうにして、お園は勃然と起上つた、さうして極
めて徐かに部屋を拔出して、次の座敷に入つた。

其處の承塵に古い薙刀が、裝飾の一つとして置かれてある、お園は晝のうちにそれを見て置いた。
緋い腕がその薙刀にかゝつた、取外すと颯と落ちて来る煤塵が、煙の如く闇に飛んだ。

お園は扱帯で襟をして、きりゝと小袂をからけてから、薙刀の七分三分の位に柄を握つて、その切
尖を目鼻二尺餘の距離の所端へ劈した儘、兩足を揃へて蕙乎と衝立つた。

此の座敷は奥と中奥の仕切口ともいふべき處で、主人の寢間へ行くには其塵しても通らねばならぬ
關だ。天井も高く十五疊敷の潤さをもつてゐるから、敵を禦ぐには究竟の要塞である。

賊はお道を突飛すやうにして、追立て追立て、此室へ入つて來た。で、今次の間へ踏込まうとする
鼻の尖に、如龜とお園が直立してゐるのを認めて、一人の賊は「や！」と喫驚した聲を揚げながら逡巡
した、途端に後の賊に突當つて、二人ともひよろ／＼した。

「な、な、何だ、手前は？」。
狼狽へた聲を懸けた。が、お園は凝然として身動きもしなかつた。



お園

「おい」と再び喚んだが返辭がないので左の手に持つてゐた懐中電燈を捻つて、その火光をお園の方に向けるより早く「あ、刀物を持つてやがる」と叫んだ。

警乎と見えた二人の姿は、いづれもダークの保護色で包まれてゐた。一個の大幹の方は印半纏を裏返しに著て、半股引の黒い覆面、其手に光るのが大きな出刃だつた。小兵の方は黒つぼい衣裳に裏天竺木綿の兵兒帯、下に稽古著らしいのをつけて、矢張黒い布から小さな眼だけを出し、黒羅紗釜形の古帽子を眉深に冠つて、臘塗鞆の脇差を落し差にしたのが、何處か書生くさい柄であつた。

「奴、生意氣な真似をするとは是だぞ」。

小さい方が片足を踏出して、ぐつと狼ひをつけたのが確かに拳銃！

お園の頬に泛べた微笑が、斜めに賊の突出した電燈の火影に、寂しいほど蒼白く映つた。

「えいッ！」劈けるやうな嬌音。

浴せかけた氣合と俱に、お園は薙刀の鐙をとんと突いて、剣返す柄の鋭い弾力に、敵の手を發矢と撃つと、賊の拳銃は躍つて壘の上へ撲地と墜ちた。

「小癩な阿魔だ、殺ツつけちめえ」。

賊は左右に開いた、出刃、刀——血に饑えた黒魔の牙は、颯と風を起して闇に鳴る。

くるくるくる、渦く寛の目にも止らぬ白光は、一團の殺氣を曳いて、低く、高く、近く、遠く、二

人の頭上に飛び、背後に閃いた。

「あッ、あッ、あッ。」

呻きながら四途亂になつて後退りする、その虚に突け入れられて、一人は明門碎きの手懸けられ、伝といつて偃る所へ、お園は素捷く飛込んで、その脊を片膝で強く踏つけて置いて、一人の向ふ腰を車切にずんと斬つた。

「あッ痛！」。魂消るやうな聲の下に、出刃の方がどしりと尻を突く。「た、た、大變ですよッ、皆さん、は、は、早く起きてくださいよッ」。

匍ひながら次へ逃込んだお道は、此時始めて有りつたけの聲を絞つた。
十五分後の英郎は、火事跡の大混雑を極めた。邸内に住む家扶の全家、執事、馬丁、車夫、門番、近所の出入の者まで、悉く非常召集。

此の騒ぎに輪廓が加はつて、最一つ意外の出来事が發見された。それは二階の書齋に寝てゐた友麿が、いくら喚んでも返辭がなく、その枕頭は血だらけになつてゐるといふ小間使の注進に接したとである。

伯爵夫妻は、恟然とした。或ひは賊に殺されたものではないか——確かに爾だと速断して、慌て、

二階へ駈上つた。

電燈はやはり消えてゐた、手にランタインを振翳してゐた康子は、先づ次の間で消魂ましく叫んだ。「良人、良人、御覽遊ばせ、泥足の跟がそこらぢうに……あら、雨戸が一枚開いてゐますよ」。「早く見、早く！」。

後についた伯爵は、促立てる聲で顔はした。戒心深くも猶且右の手に御秘藏の來國俊を提げてゐる。

康子は躊躇るやうに、書齋に入つた。ランタインの光は忙しく動いた。

「あッ、大變、血、血、血が一杯に……良人、良人、は、早く醫者を……アノ三浦博士を……早くお呼びなすつて。」

泣聲の下から友麿の寢床の上へ、帖然と踏けかゝつて、絹蒲團の袖の所へいきなり手を落した。「友麿、コレ、友麿ッ。」

夢中になつて揺り立てる後から、伯爵は及腰に就々した眼で窺き込んで「斬られたかッ、と、と、飛んだとをして了解したなア」。

いかにも爾う想はれる、括枕に巻いた雪白の布から敷布の上端にかけて、べつとりと滲んだ血汐は腥さい香も立つ許り、蒲團の中にすつぽりと天窓を埋めたベットの主は、喚んでも返辭をしなれば

揺ぶつても身動き一つせぬのである。

伯爵は堪へかねて、目を瞑りながら、蒲團をぐいと捲つた。

「あら！」。「な、何ぢやい、是は」。

夫妻は愕然として顔を見合つた。

「アツハツハ」。「オツホツホ」。

惘れはて、反かへつて笑つた。

友麿君の意匠妙ならざるに非るも、餘りに小兒らしかつた。背柱が座蒲團、臀部がシルクハットの

帽子入、足部は毛布、頭部は高麗焼の花瓶——これが正體の身現された身替りのお野郎様である。

同時に夜著の袖の處で發見されたのが机の上から轉がり落ちた赤インキの壘。

「奥さん、先づよかつたのう」。「ア、眞箇に私に喫驚いたしましたわ」。

人騒がせの種が知れて見ると、莫迦莫迦しいながらも、時と溜息が出た。

「又たこんな事をして、脱出したものと見える、此の混雜も知らずに、返す返すも憎い奴ぢや」。「で

も無事なら結構ですわ」。

遅れ馳に家夫が駈附けて來た、委細を聞いて是も安堵の息を吐いて

「御前、只今警察から警部が参りまして、捉まへた賊を受取ることになりました、一寸お遇ひくだ

さいませ」。「あ、爾が諾」伯爵は頷いた。「それから、あの、馬丁の源吉を呼べとの仰せでござい
ました、如何程捜しましても邸内には見えませんが、はい」。「は、ア」伯爵は苦笑した。「又た一
緒に失せ居つたか、困つたもんぢやのう、彼奴們には」。

途端にバツと電燈がついた。

八

暢氣な男を乗せた俵は、暢氣な男に曳かれて、暢氣な夜を暢氣な方へと奔つた。

赤坂を芝へ抜けて、それから京橋へ入つた。木挽町から曲り紆つて、頓て轅をゑろした所は、築地

居留地の海岸に寄つた只ある西洋館の門前であつた。

鐵柵の門の扉は固く鎖してあつた。源吉は立寄つて柱についた呼鐘を七回押すと、程なく何處から

か出て來たのが、印度人のボーイらしい男で、日本語が解るのか、何か微聲で話し合う様子だつた、

源吉は懷中から汽車の切符のやうな物を出して、その鼻先に突つけると、無雜作に宜しいと頷くのが

離れてゐた友麿にもよく見えた。頓て門はぎゆうと開いた。源吉は戻つて來て、俵を門内へ曳入れる

が早いか、門を締める響がからんと後に聞えた。友麿はさても用心深い家だと思つた。

外から見たところでは、中古の煉瓦石造で、英國式とでもいふのか、表を狭く見せて奥を濶く取つ

た三階立だつた。それが邸内に入ると庭園は南にひらけて、低い暗緑の草の間から、微白い花の匂が流れて来る。壁には藜が這上つてゐた。

車寄のところまで来て、始めて目についたのは、庭に七八臺の俵と、馬車やら自動車やらが、消燈したまゝで置いてあるとである。友麿は變だと思つた——變だと思ふ口切であつた。

源吉はさつさと石段を上つて、玄關の扉を押すと、電氣の自動報知機が唸るやうになり、と響き渡つた。忽ち横手の室から人が出て来た、それが脊の高い、肩の張つて、凝乎とした眼の凄味をもつた頑丈づくりの露西亞人らしい男だつた。

と見て、源吉は手速く例の切符を出して、黙つて差つけた。先はにやりと笑つて、やはり黙つて點頭いて、奥を指さしながら、引込んだ。源吉は後に立つてゐた友麿を麾招いた、友麿も同じやうに無言で玄關に上つた。

光の乏しい電燈が、蒼く廊下を照してゐる。其處を二人は奥へ進んだ。

「若さま、前以て申し上げたことを、お忘れなさりやアしますまいな、假令どんな變な事があつたとて、喫驚なさらねえやうに……ようがすか、それから成るツたけ口をお聞きなさいやすな、ポロを出した日にやア大變ですよ、可いかね、若さま」。

歩き乍ら源吉は囁くやうに注意した、如何してか此の邸内へ踏込むと、急に態度が變つて、薄氣味

悪いほど眞面目になつた。友麿も何だか眼に見えぬ恐ろしい力に、ぎうと體を引締められるやうな感覺がした。廊下の壁に映る淡い影法師までも、怪しい意味をもつて動くが如くに思つた。

「よし、よし、心配するな」。「まア何だ、眞先に私們の世界からお目に懸けやせう、オット、此方だく」。

廊下の突當りに閉切つた室があつた、其處を右へ廻つて階段を下りた、扉を開けると地下室だ。

友麿は一目覗いて驚いた、賑やかな町の物騒しい酒場の光景が、此の淋しい寂しい洋館の底に、活きた畫となつて、爾も夜半に現出されつゝある。

否、そればかりではない。

「まア殺せ、殺しやアがれ！」。

長いニス塗の食卓の上へばかりと大の字、仰反に寝そべつて嘍鳴立てた男がある、脱いだ法被や三尺は向ふへ叩きつけて、腹掛一つの捻鉢巻、粗上に乗つた鯉といふ見得だ。

「えッ、打棄つといてくんな、お前門に迷惑は懸けねえ、仲間の爲だ、殺つけつちまうから放して呉れ、ヨウ」。

その前方に、粗末な青い服を着た、色の黒い、船の火夫らしいのが叫んでゐる。

「まア可いッてえとよ、おい、君、怒るの？ 無理はないが、何しろ甚く酔つてるんだから……おい

止しな、會員の親睦ッてえのが此處だ、何でもいゝから俺に任して呉れ、おい。」
 總立になつて色々和めてゐるのが、都合七八人もあつた。どれを見ても普通の衣裳を著たのが無い、法被だの、腹掛だの、白いズンドに半股引だの、古洋服に兵隊靴だの、印袴纏の上に双子の羽織を引かけて、黒い靴足袋を穿いたのなど、區々の服装であつた。一目で労働者といふとが知れるが、併しそれも下層の階級ではないやうに見られた。

和める人と和められる人の手や拳が、電燈へ突當る許りに上つたり下つたり忙しく動いてゐた。友魔は其火夫の手に、大きな洋刀が握られてゐるのを認めた時に、思はずひいやりとして目を瞪つた。

「だッて、だッて、お前、癪に障るぢやねえか」。火夫は激した聲を絞つた。「ズルを張つて置きやアがつて、ヤリだと言ひやがる、這畜生は例も此の手で瞞著するんだ、その癖うぬが胸に立つた時には、こつそり壺を摺りやアがつて……」。何を言ひやがる、マドロス奴、さア殺さねえか、憚んながら此の金の土手ツ腹はな、おい、水雷くそ倉への鋼鐵艦だぞ、透せるもんなら透して見ろ、馬鹿。大の字男は腹を叩いて怒鳴る。

「な、な、生意氣なことをツ、奴、今に、ど、甚麼するか覺えてろツ……後生だ、放して呉れ、おい、兄弟」。「まア勘辨しろ、勘辨しろ」。「そればかりぢやねえ、壺を振る手つきが變だの、骰子がインチキだのと、けちをつけやがつて、揚句の果には骰子を足蹴に爲やアがるぢやねえか」。「蹴つ

たら甚麼した!」。何をツ、甚麼したも慥したも無え、手前一體骰子を何だと思つてやがるんだ、大きな勝負になりやア汗をかくと云ふくれえの活物だ、猿田彦の御神體で、一天地六東五西二、南三北四と祭り上げてから振出す程の縁起道具を、勿體もねえ汚れた足で蹴るツてえ法があるかい、獸奴ツ」。「動物園に親類は無えやいッ」。「えッ、此の野郎ッ!」。

再び人海嘯が起つた。吼えるやうな罵聲の中に、一團の黒い影が右へ顔れ左へ震れると見る間にいきなりテンプルに突當つてドンと轉覆した、上に乗つて大の字男は振落された、同時にチャラ、ンと音して、洋盃やら銀貨やらが落花のやうに飛んだ、其處へ火夫を抱いたまゝ、三四人一度に轉がつた。大の字男は其下からのそり／＼と匍出した——落ちた銀貨を素早く兩手に掴みながら。

混亂した人波の中に、洋盃の壊片で突傷られたのか、血だらけになつた顔が、二つ三つ蠢いて見えた。

友魔は扉の所へ棒立になつたまゝ、茫然と其の光景を視詰めた。

酒賣場には白前垂のお爺さんが控へてゐて、錢と引換に麥酒を注いだ洋盃を渡す、佛蘭西人だか獨逸人だか分らないけれども、鬚のない角顔の、肥つた體格なのが、箇程の騒ぎも高臺の見物、腕又したまゝ、莞爾と囁めてゐた。

「源吉、野蠻だなア、怪我人が出來たぢやないか、あッ、又た暴れ出した」。

友鷹は前に立つてゐた源吉の耳邊で囁くやうに言つた。

「なアに、始終でさね、今夜も甚麼せ、何だ、是だけぢやア濟みアしめえ、今に血だらけのお荷物
を昇ぎ出すやうな事になるだらう、厄介なこつた」。

源吉は珍らしくないと云つた様に、平氣な顔で呟いたが、頓て酒賣場の方に行つて、爺さんと何か
手短かに話をして、直と引返して來た。

「お目が止ればお次の番だ、さア出ませう、此方へ入らしやい」。

手を把つて迅々と室外に出た。友鷹は是だけなら詰らない、不思議館といふからには、最つと何か
變つたのが無ければならぬと思つた、で、夫を源吉に訊かうとしてゐる間に、舊の淋しい廊下に
戻つた。源吉は立停つて、右の壁をぐつと押すと扉のやうにスーと開いて、直その前に階段があつ
た。

後について上つた。屈曲した欄干は艶々しく彫刻されて、黄なる寶石のやうに光る。柔かなカアツ
ペツトは、春の草の碧を敷いて、履むに音もしなかつた。

上りつめたと思ふ頃、何處からかゴトゴトと話聲が聞えた、ピアノの聲もするやうだ、が、密閉し
た室から洩れて來る爲か、恰ど茶碗に伏せられた蜜蜂の唸るやうな、蓄音機の音樂のやうな、極めて
臙ろ氣な響だつた。

廊下の兩側に室が列んでゐた、其の中を奥へ進んだ。

その途中で友鷹は一つの怪しいとに出會つた、それは右手の入室——半分扉を開放してある暗黒の
中から、女の啜り泣く聲がさも物哀れに聞えて來たことである。

源吉が急ぐので、立停つて様子を確める暇がなかつた。程なく左の三番目の室へ這入ると、中に白
前垂白腕拔を着けた看護婦のやうな外國婦人がゐて、嫣然に出迎へた。

「姐さん、お客さまだ」。源吉は右の手の拇指をちよいと出して見せて、左の手指で松篋のやうな形
好を拵へて、ぶらぶらと宙に振りながら「ベリーマツチ、カムカムだ、私し懇意な大將、日本
橋大金持、銀行大株主、會社の社長さん子息、未だ色氣ない、坊ちゃん赤子ちゃん、寝んねんころ
りよ、金澤山ある、此處請合」と懷中を叩いて「宜しく頼むぜ、スットコドツコイ、可いか」。最後
に十八番のエツヘツヘがついた。「宜しい」。女は笑ひながら頷いて「社長さん子息さん、ソレ大層宜
しい、貴君難有う」。覺束ない日本語で言つて、子供のやうなお辭儀をした。左まで美しいといふ程
ではないが、色の白いこと、透明な眼の表情に富んだ可憐な顔立ちが、殺風景な喧嘩を見せつけられ
て、嘔吐くばかりに重苦しくなつた胸を、少からず和げさせるやうに感じた。でも何處の國の娘だ
か、友鷹には分らなかつた。言置いて源吉はとつと、歸りかけた、友鷹は慌て、
「あゝ、何處へ行くんだ、僕一人を殘して……一緒にゐて呉れなくては困るよ。」「何でげすね、若

さま、そんな弱いこつて化物屋敷の拜見が能きるもんですか、大丈夫だつてとよ、是からが面白えんでさア、化物が取つて食はうとしたら、掴み蒐つて退治してお遣いなせえ」嘲るやうに「此先にやア私們ア這入れねえんだから、まア此邊で御免を蒙りませう、えゝなに、時間が來たらお迎えに駆附やすよ」。

女の胸の邊へいきなり友麿を押つけて逃げるやうに樓下へ降りて去つた。

「阿郎、よく入らつしやいまして、さア此方へ」。

女は佛語で恚う言つて、馴々しく友麿の手を執つて、突當りの室へ導いた。其處が大きな食堂であつた。踏込む目先に燦然とする五彩の光華、それに射られて友麿は眩めくやうな思がした。

九

其處が廣い食堂だつた。

ゴシック式といふのか、穹窿形の天井から壁の片蓋柱にかけて、いろ／＼の彫刻を施した、モザイクで羅馬古代の繪畫や模様を現した、ステイントグラスの圓窓に巧妙なる意匠を用ゐられた、凡てが幾何學的の線を應用されて、複雑のうちに變化のある建築振であるのに、電燈や、窓紗や、石膏の立像や、油畫の掛額や、花紋の絨氈やが、その色彩をたすけて、目が醒るばかりに美しかった、美

しいといふだけで、濃淡の調和といふことには、餘り心をもちゐてない裝飾のやうにも見られたが、薄暗い陰鬱な地下室から突然此室に移つた眼には、只莊嚴に、けば／＼しい、明るい、活快な光に酔はされて、何のこともない、天國に來たやうな思がした。

何脚かの食卓は早くも客に占領されてゐた、ざつと見渡したところ、少くも十七八人はある。意外だつたのは、どの顔も皆外人であつて、日本らしいのは獨でも見當らなかつたことである。

友麿は一番隈の食卓に著いた。燃ゆるやうな緋羅紗の上へ雪白の布が掛けられて、木鐺錦地の花瓶に早咲のダリヤが生けてあつた。直天窓の上に布製の發風機が懸つてゐたが、時節だけに未だ動かかなかつた。腰を下した椅子は、彈機を入れてある、入れないのが食堂の作法だと聞いてゐるのに、是は又た氣の利いたことだと思つた。

給仕人はゐるのか居ないのか、一寸見廻しても分らなかつた。その代りに不思議な物を發見した。それは鮮かに化粧を凝らした金髪美人が七八人も居合せて、お客を待遇してゐることだ。

是ばかりでは不思議といふに値せぬ、待遇方も尋常の待遇方ではない、あつちに去つたり此方へ來たり、客と客との間を縫つて、肩に綱纏れかゝる、膝に凭れる、耳を抓る、唇に觸れる、きつきやツと巫山戯らしては、客の手から紙蓑を引奪つて喫かす、洋盃をつきつけて、酒を強ひる、殆んど傍若無人、吾邦の宴會に於る阿婆摺藝妓のそれよりも、寧ろ甚だしい振舞をしてゐる。

友麿は肝を潰した、禮儀や作法を厳ましく云つて居る外人、爾も食堂の中でこんな亂暴狼藉を取てさせて、一人のそれを咎める者が無いとは、塵も何といふ秩序のないことであらう、と睨みつけるやうに囁めてゐた。

咎めるどころの沙汰ではない、啞といふ笑聲、拍手の響、盛んにそれを歓迎する動搖めきに、卓上の花がぶる／＼と顛える。

奥からピアノの浮立つた音色が流れて来た、確かに舞踏室である、幾組かの男女が抱合つて跳廻るのが、カーテンの隙から見えた。その踊方が佛國のボルカマジュルカに似てゐる——友麿の友人で佛蘭西から歸つて来た者が、いつぞや夫を戯談に真似て見せたので、チュイロリー公園で七月の國祭日に行はれる、日本の盆踊見たいな野卑な者だと覺えてゐた。

次第に睡が据つて来るにつれて、又一つの「意外」を見出した。

直隣の食卓についてゐたフロックコートの紳士がある。鼻の下に髭のない、ひよろりとした體つきの弱々しい、長い顔の何處か間伸がしてゐる、鼻眼鏡をかけた若いのが、皮膚の色の黄ばんだ工合が甚麼してもお隣の中華國らしい、その話聲がひよいと友麿の耳に這入つた。

「私し、日本人あります、いえ、實際あります、嘘言ひません」。

その肩には例の金髪美人が朧を乗せかけて、甘へるやうに揺ぶつてゐた。

「日本人？爾ら、日本人なら日本人にして置くわ、ちよいと日本の旦那、一杯頂戴な、下すつたついでいでせう」。

女は英語で恚う言つて、左の嫩かな手を男の肩からチクタイの邊に廻して、頸を抱緊めるやうにしながら、右の方へ顔を傾けて恍然と窺き込んだ。

その語調から言つても純粹のアングロサクソンではないらしく、無下に鄙びて、ぞんざいにも裏らしくも聞えた。

友麿は熟々とそれを見てやつた、若粧りこそして居れ、最う二十五を超えてゐるかと思はれる年増で、コバルト色の鮮かな皺絹に、袖のふくらんだ上衣、乳酪色の小縁の飾ある胸當、だらりと前に垂れた黒天鵝絨の帯、縁の上下に白百合の花を綵つて、鸚鵡の羽を立てた帽子、それに寶石の燦きが胸にも耳にも指にも、小さな虹を見せてゐる。目鼻立が何處か日本人らしいが、皮膚が白過ぎる、外國婦人かと思へば髪が漆のやうに黒い、その癡腫が碧味を帯びてるやうでもある。種の知れないのが友麿に取つて、又一つの不思議であつた。

「宜しい、上げませう、ウイスキー飲みますか」若し紳士は恐悦さうな顔の下から、洋盃に手をかけた。「いえ、私、それ嫌ひよ、悪く酔つぱらつちやうなものですもの、アブサントに爲ませうと」男の體にひつついた儘で、恰と卓上にあつた——自分が持つて来て置いたのだ——壺を片手で引寄せた。

「アブサント？何ですか」。「やはりお酒よ、大層美味しいの、阿郎、御存知なくつて」。「私し始めてあります、あア是ですか」。

男はその壇を取揚げて、ちよつと目を透してから、自分で洋盃へ注いで、女の口許に持つてゆくと幾んど形式的に唇を著けたゞけで、洋盃ごと男の手を持添へて、子供へ水でも遣るやうに、口へ押つけて啜と飲ました。

「ラッ」男は咽んで「臭いすなア……青臭いッ」舌打してから「併し旨いです」。「旨くなくつてさ、オホ、」女は手巾でその口を拭いてやつて「佛蘭西の方は是ばかり召上るのよ」。

友麿はその言でふつと憶ひ出した。佛國の阿片酒——阿片にも倍した害毒のある——よく花柳社會に用ゐられて、上流の人は之を飲む者を賤む——賤む癖に自分もこつそり隠れて飲むかといふ一種の仙藥？あゝそれかと心に領いた。

して見ると、大方此の怪しい家も、又此の怪しの女も、共にフランスに多少の縁をもつてゐるのではあるまいか、とも氣注いたが、果して爾うだと判断することも能きなかつた。

男の方は飽までも日本人を氣取つて、呂律の廻らぬ舌ながらも日本語で押透さうとする。女は又た日本語がよく分るやうに見えてゐながら、故意と夫を使はずに、支那人には最も解りよい英語で挑弄ひ立てゝゐる。其處に双方の興味も掛引も野心も潜んで居のであらうが、他目には餘りに莫迦々々し

い巫山戯方なので、友麿は妬けるといふ意味ではなしに、甚だ癪に障つて堪らなくなつた。「おいッ」蟹殻聲を振立て、食卓をコツコツと叩いて「給仕は居らんのか、給仕は！」。凄い目を女の方にくれた。「あら」女は喫驚したやうに友麿の方を見た。「貴君、何時の間に入らしつて……失禮ね」。

是だけが日本語。粘つた發音ではあるが、調子が軽い。

席に就いてからそんなに手間取つた譯でもないのに、能く辛抱されたものだと思ふまでに、其の間が長かつた、長いと思ふだけに、我一人抛りつ放しにされたのが、日本人全體を侮辱されたかの如くに感じられて、遂に我慢が仕切れなくなつたのである。

「貴客、何食べますか」。

女は支那人の傍にあつた献立書を持つて來た。取つて見るに極彩色石版摺の臺紙へ、英佛兩様の文字で品書をしてあつた、其日々に出来るものをペンで書入れるらしい。佛語の方は讀めないが、英文の方が餘程妙だ、食料らしい名は一つもなく、火炎、氷柱だの、馬力、快走船だの、孔雀、女獅子だのと變な符牒をつらねてゐる。

友麿はその説明を聞かうと思つた、が、待て、寧ろ此の際、外國語は一切知らぬ振をして、彼の談話に自由を與へ、さうして此の薄鈍らしい支那人をいかに操縦するか、巧妙な發展振を見てゐる方が第一面白くもあり、彼の正體を發見するにも都合が好い、と恣う思案して、態と體裁惡さうに天窓を搔いた。

「私、解りません、何でも構はないから、成るだけ旨さうなのを二三品爾う言つてください、酒は……爾です、ね、三鞭があるなら貰ひませうか。」
献立書を投出すやうに置いて、若旦那聲を出した、慾には顔がほつと赤くなつて呉れ、ばい、と祈つた。

「あら、爾う。女は一本調子で「貴客、英語はなせない？」と念を押す。「知りません」。素氣なく言ふ。

女は輕蔑したやうな笑を帯びた眼をくれて、ひよいと立つて去つた。

殘された支那人は、例のアブサント酒をちびちびと飲みながら、時々眼鏡を此方へ向けた。奥では猶熾んに喋いでゐる。

程なく給仕人が焼肉の皿を運んで来て、三鞭酒を注いで呉れた。何處にゐたのか、それが今まで見當らなかつたのが、變つた事の一つである。頬鬚の生えた脊の分外に高い男——友麿はやはり佛人と

見た。

それが耳端へ口を持つて来て

「貴客、食べる物、最う二つ出ます、時間ありません、食べる歸る宜しい、店閉ひます、最う三十分……三十分。」

袂時計を出して、命令する様な嚴い目をした。友麿は佛然として取かけた肉叉を置いた。

何處の世界にこんな無禮な給仕は有らうか、乞食や無宿者に施與を爲るのではあるまいし、苟くも日本の若旦那さまに向つて、是を食つたら出て行けと吐しくさる、不届千萬な奴隷奴！と突然その顔を殴つて遣りたいやうな氣がした、が、此處だ、是には爾うせなければならぬ理由も秘密も寵つてゐるのであらう、夫を見顯すまでには我慢が大事、馬鹿になれ馬鹿になれと、嚙込む睡に蟲を殺して手早く夾袋から掴み出した二三枚の紙幣を、くるくると紙に包んで、故意と窃と給仕の袖囊へ入れて遣つた。

「よしよし、食事が濟めば直歸る」。鷹揚に「併し君、都合に依つて、少しぐらゐ遅くなつても可からうな」

見ない振をして、モツシユと低聲に言つて、軽く頭を下げた給仕は

「ポーン、一時間ぐらゐ宜しい、貴客、馴染ない、面白くありません、又來る宜しい、私名、ヂヨ

ツコト、最負頼みです、ヘツヘツ」。

口を縫めてお愛想笑ひをして、さつさと去つて了つた。効験神の如しである。その後姿が消える頃、入れかはつて先刻の美人が再び現れて来た。

「阿郎、済みません、お淋しかつたでせう、忙がしいもんだから、ツヒ」。

こんな意味のお世辭を言つて、支那人の側の椅子に腰を下して、膝を廻してひつたと倚添つた、男の右の手はいつか袴の下に柔かに握られてゐる。

「酒は最うお止しなさいよ、ちよいと御覽なさい、彼方で闘牌ごっこが始まつてゐますわ、阿郎も入らつしやいよ、面白いからさア」握つた手を振つた。「え、闘牌？」支那人は首を伸して覗いて見て「ハ、ア、やつて居ますな、成程面白さうだ、ドレ、拜見しませうか」。

今度はチャン式の英語になつた。忽ち美人に曳張出されて、ふらふらと歩き出した。

その酔ばらひ様がいかにも恠しく見えた。ひよろくの千鳥足は通例であるのに、是は其程度を超して、ふらふらの幽霊歩きである。茵蕪のお化とは斯る場合に適用さるゝ形容詞だが、是は夫以上の風に吹かれたフラフといふ腰つきである。多量に飲んだ氣振もなく、又た飲むべき時間とてもなかつたところから推測すると、確かに悪辣な酒の力だと爾う思つて、友麿は物怖ろしいと云つたやうな眼で、その後姿を視送つた。

女の脇に扶けられて、轉がるやうに割込んだ支那の紳士は、一同から歓迎される様子だつた。忽ち其の組に加はつて、トランプを取り始めるのが、黒く群つた人影の隙間から見えた。

「どんなとを爲るのか知らん僕は未だ外國人の骨牌遊びといふものを見たことがない、一つ拜見するとしようか」。

食卓を離れて、忍び寄るやうな足取で傍まで行つて見た、勝負に夢中になつてゐるので回顧る者もなかつた。

周圍に居列んだのが皆歐羅巴人らしい、先づ驚いたのはいづれも其の前に堆く紙幣や金貨を積んであることで、血眼の眞剣に腕を闘はして居る最中だ。

骨牌は飛ぶやうに囁く、勝負は極めて迅速だ、勝つた者は金屬製の熊手のやうな物で、賭けた金を一掃に掻き寄せる、それが又た素敵に捷い。

「奴、止せばいゝのになア、お國柄の彩票とは譯が違ふぞ、負けたら着くなるだらうに」友麿は聊か心配して、例の支那人へ眼を注いだ。

着くなるの沙汰ではない、その肩に女の脇を乗せた儘、得々乎、我軍大いに利あり、一鼓して敵壘を抜かんといふ支那式の笑を、長い顔から顔して御座る。

「ハ、ア、勝つてるな、偉い」。

心に祝して友麿は献つて囁めてゐた。と、女はついと支那人の側を離れて、何か小聲で俗歌のやらのを唄ひながら、卓子の周圍を往つたり來たりした支那人と向ひ合つて美しい鬚を生やした、眼の炯乎として三十形好の佛蘭西人らしい男がゐた、女はその男の背後を通りがてら、脇の邊をちよいと指で突いた、男は黙つて振向いた、女は数尺後へ身を退いて、左右の手を胸の所へ持つて來て、双の指を又んだり解したりした。男は偷むやうな眼づかひで、其の指の働きを熟視した、さうして軽く頷くものゝ如くに見られた。

友麿は變なことを爲ると思つた、確かに二人の間に緋ばれた一種の暗號があつて、無言の呷きを胸から胸へ傳へるものだ、とは合點したが、さて何の意味やら、秘密の爪の垢をも窺ひ知ることができなかつた。

變だ！その變だが何處まで展開してゆくのであらう、友麿の見た不思議館の不思議は、稍と一部分だけの輪廓に過ぎぬ。

一一

伯爵邸では警察署から臨檢に來た當直警部と刑事巡查へ、引提へた二人の賊を引渡して、夫々手續を済ました、賊の一人は足部に負傷したが命に關はる程ではなく、氣絶した一人は手當を受けて蘇生

した。身分も犯跡も取調べた上でなければ解らぬが、多分此頃搜索しつゝある強盜前科の大賊だらうとの事で、警官們はいたくお園の手並に驚いた様子だつた。

驚いたのは警官ばかりでない、伯爵も舌を捲いて感嘆した。一品の被害もなく忽地にそれを捕縛することができたのは、全くお園の賜物である、繰返し／＼言つてゐるが、何と思つてか、夜中にも關はらず、奥の參拜所といふ一間に、家族を殘らず呼集めた。

此の一間に先祖代々の靈を祝つてある御廟ともいふべき所で、一棟は別に白木の宮居造り、母舎から長い廊下を渡つて通ふやうにしてある、忌日でもなければ滅多に人の立入らぬ淨い齋場だ。

康子夫人も須磨子も呼ばれた。家扶の信樂誠三は親戚の長井子爵を案内して入つて來た、子爵は今夜の慘事を電話で聞いて、見舞の爲めに態々駈附けたのであつた。最後にお園も召出された。

神前の御簾は捲上げられて、古風な菊燈臺が微に高麗縁の青疊を照してゐる。檜の八足の机の上には御酒土器が載つてあるのが見えた。

「いや、此の宵中に睡いところを呼立て、氣の毒ぢやつた、實は少しお前們に、申し聞きたいと有るぢやでの」。

伯爵は急に禮服着用、圓座の上に威儀を正して控へてゐたのだ。此の突然の召集は何の爲といふことが解らなかつたので、いづれも目をまじまじさせて下手に畏りながら、伯爵の顔を見た。

「それでは別儀でもないが、今夜の出来事に就て感じたことは、誰も彼も一様ぢやらうと思ふが、實に園の働き振は勇ましくも又た痛快なことで、英家の歴史にも書き貽すべき勳しぢや、往昔戦亂の際に方つて、奮戦苦闘、一舉に敵を退けた勇士や、又た主家の大事にのぞんで、一人孤忠を守り、逆賊奸臣どもを除いたなんといふ烈婦の話は、お前門も記憶して居るぢやらうが、それにも勝して天晴な手並ぢや、此の事を世間に發表すれば新聞等にも記載されて、常人の名譽にもなることぢや、とは思ふが、賊に襲はれたなど噂をされては、いかにも家事不取締のやうで、當家の體面上如何ぢやらうかと考へたゆゑにな、一切秘密にして貰ふことに警察の方へも頼んだやうな譯ぢや、つては其の代りに委細を神前に奉告して、當人の手柄を旌表しようと思ふが、甚麼ぢや、異議はないか」。

と一座を回看した。夫人は始めて事情が解つて、成程と笑ましげに

「大層結構なお思ひ附で、異存どころでは御座いません、數ならぬ私しまで嬉しう存じますわ、代様もそれを聞き召しましたら、嘸お悦び遊ばすこと、恐れながら心得まする」。

堅苦しく賛成した。外の者も満足らしい顔で、一度に首を下げた。

「では、直ちに爾いふとに致すぞ。伯爵は神前に恭々しく平伏して、暫く黙禱してから、更に向直つて「園、もつとそれへ進め」「はい」。お園は矍鑠に手を突いた。「今申し聞ける通り、先祖代々

の靈前に其方の手柄を奉告に及んだぞ、柔弱淫靡の風が吹き荒んで、古來の武士道といふものが、その面影だになくなつた今の日本にも、猶其方の如き女丈夫があるかと思ふと、誠に頼母しいやうな心持がする、矧してそれが舊藩臣の娘ぢやとあれば、一段鼻が高い、嘸祖父の甚五右衛門も悦ぶことであらう、今後とも随分當家の爲に骨を折つて呉れるやうに、私から特に頼み入るぞ」。

嚴肅に言渡してから、用意してあつたお召縮緬一疋へ熨斗をかけたのを、足打櫓の折敷に載せて、それへ出した。

「是は誠に粗品ではあるが、當座の禮ぢや、記念の衣類でも拵へ置け」。

お園は帖然と手を突いたなりに、身動きも爲ない、有難いのか嬉しいのか、黙つて俯いて居た。

須磨子は我事のやうに、嘖々とした笑を浮べて、斜めに其の顔を覗き込んだ。

「園のとは是で宜しい、外に最う一つ云聞けるとがある、一家の大利害にも關するとなぢやから、篤と考へ呉れるやうに」。

伯爵の眼は異しく光つた。

一家の大利害！といふ語の強い、響に氣疲れがして睡たくなつた顔に、いきなり硫酸でも浴せかけられたかの如くに驚いて、いづれも重い臉を一杯に開けた。

「それは友磨のことぢや、彼兒についての相談ぢや」と冒頭をしてから「お前門の意見は甚麼か知

らんが、俺は最う所詮見込がないと思ふ。」

と言つて喟然として、その眼を天上に注いで、得知らぬ闇愁が面上に漂つて、半白の髭を微かに戦かしてゐる。少次して

「依つてぢや、彼兒に此の英家を相續させることは斷然見合せて、別に一家を立てさせるなり、廢嫡するなり、相當の處分を爲ることに致して、その代りに須磨へ然るべき養子を迎へ、此の家跡を繼がせる様にせなければなるまいと、今夜といふ今夜、痛切に爾う感じたのぢや、如何ぢや、爾しては？」

斷續の言が、さも重苦しさに聞えた。

「え、廢嫡をアノ相續をさせられないと被仰るんでございますか。」

康子は惘然としたやうに、慌てた聲を投げて、覺えず膝行出した。

「爾ぢや」唯一語。「そ、そ、そりや、ど、甚麽いふ譯でございますか、彼兒に夫程の失錯があるとは思はれませんが、外に何ぞ、私しの存じません不品行な事でも有るので御座いますか、それに致しても、廢嫡とは餘りでございます。」

夫人は躍起となつた、心臓が亢奮つてか、呼吸が喘んで、蒼白い顔の色が一層凄く見えた。

「餘りぢやと申して、是より外に取るべき手段が無いではないか、又た甚麽いふ譯ぢやと尋ねる必

要もないことで、彼が先頃來の舉動に徴しても、明かに理由が分るぢやらう、殊に昨日、彼箇程嚴しく説諭を加へたにも關はらず、其下から直と飛出して、今夜のやうな大失態をやらかし居る、到底彼は改悛の見込がない、病既に膏肓に入つてゐるんぢや、今にして大手術を施してからに、病毒の根本から切斷せんでは、遂に此の英家を滅すやうなことになる、のう、長井君、君にも昨日内々お話しした通りで、誠に耻かしい次第ぢやが、一人の子供を失ふのは、猶且一家を覆へすよりは勝しぢやらう、個様な豚兒が出来たのも、畢竟家庭の罪ぢや、實に親族に對して面目が無いのう。」

態と冷靜を粧つてゐるが、堪へ切れぬ思は波打つ肩の戰慄に現はれて見えぬ。

康子は争ふべき辭はありながら、遠慮勝人だけに口へは出さずして、腑甲斐のない涙と化るばかり黙つて俛垂れて啜り泣いてゐる。

一座肅然、神前の灯は覺束なげに瞬く。

「エ、私しが立入つて彼是申すべき場合ではないのですが、エー」長井子爵は言難さうに咳ばらひして「其の御處分は少し慘……エ、ナニ、果斷も結構ではありませんが、些と時機が早過ぎは爲ませんか、最う一應友鷹君に反省をさせるだけの餘地をお残しなすつては如何でせう、友鷹君だつてそんな莫迦では決してありませんから、よく忠告したら必ずソノ、エー、第一……」駄目ぢやツ、馬の耳に念佛ぢやツ。

伯爵は言下に斥けた。

「ではございますが、奥様も御不同意のことと御座いますし……情願、御再考くださいませやうに……何にいたせ、重大のこととありますで、ハイ」。

家扶の信樂も傍から口を添へた。

「不可んのう、お前門は……」。

伯爵に睨めつけられて、信樂は首を縮めたなりに、目を疊へ落す。

此時、お園は何と思つてか、顔をふつと擡げて、正しく伯爵の方へ向つた。

「モシ、御前さま」「何ぢや」。伯爵はお園の方を振り向いた、突然に呼んだので不審したらしい。私
は今日始めて御屋敷へ上りました者ですが、さつぱり御様子が出来ましたねえが、アノ何でござ
りますか、若殿様に何か落度がありなされて、それ故の御腹立から、御總領の格式をお取揚な
さるといふので？アノ昔は勘當とやら申したさうに、老人の話に聞いて居りますが、そげな事でご
ぢやりますか」。

聞苦しむ聲調ではあるが卒直な言だけに意味はよく透る。伯爵は笑つて

「マア爾ぢや、アハ、お前にまで飛だを聞かして済まんのう」。「御前さま、私、それに就て一
すくらす申し上げることが在るのですが、お聞き取ってくださいやすか」。「む、何事かは知らんが、

遠慮なく言ふて見い。軽く頷いた。

視線は悉くお園にあつまつた。此の野趣を帯びた風變りの娘の唇から、どんな珍らしい氣焔が吐
き出されるかといふのは、恰かも蕨時に山火事の煙でも眺めるやうな淡い興味を以て、一座の人から
注意された。けれども其の言が伯爵に對して、どれだけの力があるかなど、豫想して見る者は無つ
た。只夫人と須磨子だけは、何となく頼母しい様な氣がせらるゝ裡にも、倘しやとの薄い望が起らな
かつたでもな。

「御主人様の内所事に、家來の身として立入るものではないが、お家の大事といふ場合には、黙つ
て引込んでゐるのは不忠だ、身を粉にしても主人のお爲になるやう働かなければならぬ、又御手討
になつても、間違つたことなら飽まで御意見を申すのが、家來の道であると、祖父から堅く吩咐け
られてごぢやります、で只今遠慮なく申せと被仰いされたお言葉に甘へやして、愚かな胸に思つた
儘を申し上げやす」。「む、」伯爵は莞然とした。「御勘當と申せばお家の大事でござります、その
大事を貴君様の御一存だけでお取極になりやして、奥様や御親族さまの御異存、御家來のお諫めを
も更にお用ひなさらぬのは失禮ではござります、十萬石の御大名、伯爵もふ肩書をお持ちなさ
る尊公様にもお不似合の、我儘勝手のお振舞かと存じやす」。

毅然として言放つた、眼と眼、見合せる顔のいづれにも驚異の色が流れ渡つた。小氣味がい、よ

く言つて呉れた、と心から感謝する者は、獨り康子のみではなかつた、でも餘りに大膽な突込様に後の反動が氣遣はれて、言合せたやうに齊しく伯爵の顔色を窺ふと、案外にも機嫌が變らぬ。

「アハ、」と苦笑して「爾か、我儘ぢやツたかのう、では甚麼すりや可い」。私のお願は、若さまを一時祖父にお預け下さるやう、どんな不品行があるかは存じましねえが、祖父共々に御異見を申し上げやして屹と御精神を入替へて貰ひ申しやす、そしたら何も廢嫡など、お騒ぎなさらずとも濟むことでごぢやりやす、モシ御前さま、此のお願を是非聞届けてくださいやし、お聞届が無えければ仕方がごぢやいませぬ、私は今晚限り御暇を頂きやして、里方へ歸りやする、此の御褒美は頂戴すべき理由も無えだで、お返し申しやするが、祖父から教はつた一手が役に立つて怪我の功名になりやしたのが、手柄だと思召すなら、情願その手柄に免じて、若さまの御勘當だけは今暫くのところ御見合せを願ひやする、モシ、御前さまどちらとも、御挨拶をお聞かせくださいやし」。三つ指突きながら輝く瞳に凝然と伯爵を仰見げた。

康子は涙に咽んだ。そのいぢらしい、雄々しい、同情の深い辭を聞いては、嬉し泣をせずには居られなかつた。

「お父さま」。須磨子は堪りかねて、いきなり父の膝に取著いた、さうして下から其の顔を覗いて「園の言ふことをお聞き遊ばして、爾してやつて下さいましよ、ね、お父さま」。

その頬には露が玉走つてゐた。

「ひ」と呻くやうに頷いて、伯爵は拱んで腕を袴の上に正しく置いた。「よく申して呉れた、當家の爲を思つての忠告、その忌憚のないところが、俺の氣に入つた、流石は甚五右衛門の孫、ハ、ハ、卒直なもんぢやのう、諾、お前のいふ通りに一切を委せる、宜しいやうに計らつて呉れ。いづれも意外に驚いた、馬も御しやう、奥様の目から降した幾耗かの涙の雨も、親族や家扶の口から打出した三連發の異見の弾も、此の山出し娘の「ごぢやいやす」ほどには、人を動かす力が無かつた。

「ぢや、アノ聞届けて呉れさつしやりますか、有難うごぢやいます」。お園は歡んで平伏した。「直と祖父を呼びに遣りやんして、相談を致しやするが、若さまの事に就ては、どのやうな計ひを致しませうとも、彼是被仰りませぬやう、念の爲お約束を致して置たらうごぢやいます」。よい、干渉はせまい、萬望のう、お前們的骨折で改悛する様にして呉れい、子供一人が助かることぢやからの。「はい、畏まりやした」。大衆、聞いたか。伯爵は一座を回看して「爺と園の手に懸つたら、又た起死回生の術があるかも知れん、友麿のとは二人に委任したで、その心算で居てくる、様に、よいか。宣告してから更に「實は何ぢや、今夜中に果斷の處置を取つて、是も神前奉告しようと思ひ居つたんぢやが、園といふ忠義者が居て呉れたお蔭で、その必要が無くなつた、是も當家を守護す

る宗祖の神靈が、特に攝理くださったのかも知れんの。「お芽出たうござります」。子爵と家扶とが祝する側から、夫人は哮と息した。「相談は是で終り、引取り呉れい」。伯爵は立つて神灯をぶつと吹燼した。須磨子はいきなりお園の背後から抱著いて、無言に堅く其手を握つた。

東の空が白け渡る頃になつても、友鷹は未だ戻らなかつた。が、甚五右衛門は急使と共に、てくてくと杖に纏つて馳附けて來た。

英家の正門は颯と左右に開かれた、兩側に定紋のついた高張提灯が立られた。夜ながら、新たに打つた水の匂ひは、その光を雫にして車寄に流れてゐる。

玄關先には羽織袴の折目正しい、枯木のやうな古武士一人が、扇子を膝に突立て、足を式臺に踏張つて、炯々と表を睨んでゐる。その側には伯爵から借物の來國後の銘刀一振！
甚五右衛門は斯くして友鷹の歸邸を、今か今かと待つてゐたのだ。

一一一

其夜の友鷹はいかに？不思議館のあらゆる不思議を探検せぬうちは、死すとも還らぬ意氣込で、今

し壯んに好奇の血を躍らせつゝある那裡だつた。

妖しの美人と暗號で何か打合した男は支那人の向ひ側に席を更へた。さうして前の如く骨牌を取り始めた。

美人は支那人の背後に立つて、その肩に凭れかゝる様にしながら、一々手許の骨牌を窺いては、矢張指を折つたり組んだりして、向ふ側の男に合圖をした。

男は見ぬ振をしてそれを見た、支那人が牌を投げる番になると、其の顔へ眼を据えて凝然と睨む。睨み様は尋常でない、一直線に奔る凄い光芒に、ラヂウムほどの強烈な力が籠つて、焼點を焦すのではあるまいかと想はれるばかり、恐ろしい顔色だつた。

と、妙だ、今まで捷誇つてゐた支那人の旗色が急に悪くなつて、ばたくと負け續ける。前に小盛高になつてゐた紙幣や金貨の山が、ざらりと頽れて行く。

それと反對に、睨んだ男の方は、とんとん拍子に勝つて捷つて、場錢を掻き集めること、鯨の百川を吸ふが如くである。

卅分と経たぬ間に支那人は幾んど全滅——と云つてもよい、前に在る現役兵に綺麗に慶殺されて了つて、衣兜から豫備兵までも繰出したが、それすら瞬く隙に戦死したのである——する程の大損害を蒙つた。敗けた金高はどのくらゐか、他自に算むとは能きなかつたが、少くも七八百圓を下らぬと

想像された。

その金は無論外にも散つた、が、大部分は例の男に分捕されたのである。

支那人は遂に堪りかねて手を引いた、立揚つてひよろ／＼と食堂の隅に去つて、長椅子の上に倒れた。最う醒め際に近くなければならぬ筈の酒の酔が、未だ強烈の魔力をその全身に燃やしてゐるかの如く、ぐつたりと萎えた體を不行儀に投げ落して、どろんとした眼を此方へ向け、左の手を低く舉げて「あい、君、君」と英語で美人を呼んだ。

女は馳寄つた、見てゐると水を洋盃に盛つて吞ます様子であつた。

支那人が組から脱け出すと、いづれもうんざりした様な氣配で、骨碑を投出した儘卓を離れた。喫煙室に行くのか、舞踏室に這入るのか、ばら／＼に影が消える。女と腕を組合つて、何處へか煙となつたのも五六組ばかりあつた。

友麿はハツと我に復つた、時計を見ると午前二時、給仕から注意された時間が三十分も経過してゐる。驚いて食堂を出た、出たことは出たが、勘定は誰に渡すのやら、源吉は何處にゐるのやら、更に勝手が知れぬ。支那人の事も何となく氣に懸る、奇怪な男女、それも最つと突込んで研究して見たいやうな思ふする、探り得らるゝ丈は此魔界の奥の奥まで探りたくもある。後髪を牽るゝといふのが、妙に未練が加はつて歸る氣にはなれなかつた。

帽子とインパチスを預かつた女が、脱帽室にゐる筈である、彼の女を捉まへて一叩き聞いて見ようと心注いで、急いで其處へ入ると、電燈の氣疎い光が壁に懸けた主なきハットを淋しく護つてゐるばかり、索然として人影が無い。

所在なきに袂から燐寸を出して紙巻を吸ひ始めた。と、ばたりと食堂の扉が開く音がして、誰やら出て來たやうだ。

細目にドアの隙間から覗くと、それが今まで氣遣つてゐた支那人である。前の女が其の手を肩に擔いでゐる、擔がれた支那人は後向になつて踵々と歩む、歩むのではなく引摺られるのだ。跡に數尺の距離を置いて、ぬつと立つた儘、腕を固く又合せて、のつそ／＼と跟いて行くのが、例の外國紳士だ。

巨きな眼は相變らず光つてゐる、大蛇のやうに閃々した、蒼い瞳の著處は、正しく支那人の面である。

送り狼！ 送り狼！ 友麿は如何といふ譯は知らぬながらも、直覺的にぞく／＼と心の惡寒を感じた。

三人は二階から下へ降りた、友麿も室を出てこつそりと後を追つた。階段を下りると、電燈が別世界のやうに微暗い、長く屈曲した廊下へ疎らに二燭ぐらゐる光が灯つ

てゐる、それが友麿に取つて好都合だつた。

二人は廊下の南側、角から三つ目の室へ支那人を連込んだ。さうして堅く鍵を下した様に取られた。

友麿の好奇心は勃然と亢奮した。拔足して其室の前に忍び寄りうとした途端、地下室の通ひ口の方で、ごとくと話聲がして、黒い人影が朦朧と背後に現れた。

友麿は慌て、姿を隠さうとしたが、他に逃場所がないので、後へ小戻りして、階段下の薄闇い壁のところへ身を寄せて、それを遣過さうとした。

先方は友麿の居るのに心注かぬらしく、面前数尺の廊下先を何か話し合ひながら、重い足音を立て通つて行つた。通る所を友麿が窺いて見て、はつと驚いた。

一人は門番の印度人である、後の一人は酒場で見かけた醜ら顔の肥つた爺さんそれが擔架の様な物を昇げてゐた。其の擔架に乗つたのが、日本人の若い男で、盲縞の腹掛を著けたばかりの胸の邊からだらりと宙に垂れた腕にかけ、生々しい鮮血が臙脂をふりかけた様に、黏然と流れてゐた。

「ムー、ムーン、く、苦しいッ」。

太い唸聲が跡に引いた。齒を切つて鼻を空さまに投出した眞蒼な顔が、微闇い光線にちらりと見えたりであるが、去つた後までも友麿の眼に、篋深く彫りつけた様な物凄しい印象を残した。

「あ、とう／＼殺られたな」。

友麿は獨語を云つて見送るうちに、先刻の酒場の喧嘩を憶ひ出した。「どうせ尋常では濟むまい、今に血だらけのお荷物を擔ぎ出す様になるだらう」と云つた源吉の言葉が胸に泛んだ。さうして絶えずこんな血腥さい騒ぎを繰回してゐるのか、想ひ當つた時に、半獸半裸人種が此の深夜に餌を争つて、咬み合つてゐる地獄のやうな地下室は、そも何人の惨忍なる設計に依つて成つたものか、といふことを怪しまずには居られなかつた。

「甚麼したらう、彼奴、さうか捲込まれやしまいな」。

源吉の安否が氣遣はれた、何を爲てゐるだらうと不審もされた、最う一度見て遣らうかとも思つたが、夫よりも大きな疑問がある、待て、其方が先だと頷いて、直と爪先を三號室に向けた。

何處からか冷たい夜の空氣が忍んで来る、電燈を目蒐けて飛著く蛾の羽音までが、幽かに頭の上で聞えた。

息を殺して、右の眼を扉の鍵穴へあてた。凸形の少なき罅隙は首尾よく腫を呑んで、室内の秘密を赤裸々に、爾もこつそりと見せて呉れた。

「あッ、あッ、大變なことを爲てる」。

友麿の心臓は高く鼓動した。

支那人は寢室の上に寝てゐる。顔は見えないが、ホワイトシャツを着た上半身が、落ちかゝる毛布の間に横たはつて、片腕を額の邊に乗せてるやうだつた。餘程困睡してゐるのか、身動き一つせぬ。左右には例の男女が立つてゐた。女は左の手に支那人の胸衣を持つて、右の手に頻りと衣兜の中を漁る様子。男は何だか書類のやうな物を片手に握つて、腮の先で指揮でもするやうな素振だ。

「最う何にも有りやア！しないわ、お生憎さまよ」。

女は凭う言つて、腹立しげにその胸衣を投げ出した。

「いや、そんな筈はない、胸衣に無けりやア窄袴の方を探して見ろ」

男は凄しい目をくれた。

「駄目よ、手巾ぐらゐなものよ」。

體を屈めて、毛布の下へ手を差込んで、暫く搔搜すうちに、其の指先に摘み出されたのが、一枚の書類らしい紙片だつた。

「ちよいと、這麼物が有つてよ」。「何だ、此方へ出せ」。

男は手逸く引奪つて、それを披げて見る眼の脛が、絃を切つたやうに急に弛んで、にた／＼と笑つた。

「占めたッ、五萬圓！五萬圓!!」。「えッ」。女は叫んだ、轉がる如く男の側へ寄つた。

二人の語聲は壁に耳に響いても、憾むらくは佛語である、友鷹には何の事やら、聾の芝居見物。驚いたとを爲る、此奴等二人は確かに馴合だ、ぐるになつて仕事を行ふのだなと友鷹は心に囁いた

時に、渾身の血が騒ぐやうな懐がした。捜し當てた紙片は何だか罷くは見えなかつた。只紙幣にしては少し大き過ぎる様だと思つただけで

あつた。男の肩越しは俺目になつて、それを覗く女が笑顔がさも嬉しげに且つ嬌かしかつた。

其時、寝てゐた支那人が勃々と蠢き出して、伸した右の足をへの字形に立てながら、何か嗷々と妄言をいふ。

「あら」と吃驚したやうに、女は男を突退けて、自分の體を楯にその姿を庇つた、さうして呢と支那人の寝顔を覗いた。男は徐かに後退しつゝ、迷足の姿勢を取つて、手を扉の提梁に懸けた。

友鷹はハツと吐胸を突いて眼を鍵穴から離した。出られぬ間にと急いで室の前を立去つたが、玄關の方へ行けば好いのを、狼狽して反對の方向に逃げた。生憎突當りが行止りの壁で出口がない。引返さうとして、途中に踏々してゐる所へ、のそり／＼と歩いて来る男と撲然出會つた。

と看ると、それが例の巨きな眼である、自分の跡から三號室を出て来たものと想はれた。友鷹は素知らぬ顔で摺違つた。

「あゝ、君、君」。先方は日本語で喚びかけた、調子が外人の様でない。「は、私ですか」。怖なび

らぬ顔で摺違つた。

つく。「君は何誰です」立停つた友麿の風采をちろ／＼と看ながら、矢張俱樂部の會員ですか。友麿は甚だ挨拶して、一寸面吃つた。「はい、え、あの」。少頃口をもじ／＼させて「爾うです、私は今夜始めて参りました者で、日本橋の三輪武兵衛といふ銀行業ですが……はい」。出鱈目も是より外に答へ様が無い。

「三輪さんですか」。險な目つきをくれて小首を傾げて「階下に何か御用ですか」と詰るかのやう。

「はい、實はアノ、伴の車夫の……車夫の所在が知れませんが……苦しい。」「あ、車夫、爾うですか、伴の者なら外に待つて居るでせう、彼方へ入らつしやい」。玄關の方を指さした。「有難う、どうも勝手が知れないので」。

友麿は軽くお辭儀をして、足早に玄關の方に向いた。廊下の角を曲る時に回顧ると、その男は猶且小間い隅に立つてゐて、自分の後影を見送る様だつた。

外には月があつた、一徹黒い雲が西に渦巻いて、その光を黄金色の笹縁にしては、呑んだり吐いたりする、庭の疎らな木立には夜露が濕つて、青い螢火がふら／＼と迷つてゐた。

「確かに此邊だつたな、一、二、三、む、此の室だ、此の室だ」。

口の裡で言つて、洋館の窓下に拔足しながら忍び寄つたのが、友麿だつた。

其處が南に面した最下層の、支那人の寝てゐる三號室に當るので、牖の硝子戸からあかあかと燈光が洩れてゐる。

四邊を回顧して、窓際へ右の手を懸けようとした時、驀然として飛んで來た一頭のポインターらしい犬が、足下でいきなりウオーと吼え立つた。

畜生!! 失敬な奴、と思つた刹那が、颯のやうに躍り蒐つた犬の、牙を鳴して矢庭に咬著かうとする時であつた。急いで飛揚る足と、犬の腮とが相去る纒かに一寸、辛くも鎧戸へ捉まつて牖口へ乗ることができた。犬は口惜しさうに眼を瞋らして、剪けるやうな聲を絞つてゐる。

其の窓は半圓アーチで、硝子戸を開いた儘、茶色の紗帷が引いてある、殆んどそれを突破るやうな勢ひで、どしんと室内に飛降りた、足は下に落ちたが、天窓はカーテンに絡まれて、何だか風呂敷でも冠されたやうだつた、慌てた手つきで推のけて、稍と顔を出した、が、眼は布擦がしたのでひりひりと痛を覚え、容易に眼を開け得なかつた。

室は餘まり潤くない、裝飾の工合から見ると佛國式のベッドルームらしい、と思つたゞけで、如何はしい裸體の塑像も、刺繡畫の屏風も、陶器の花臺も、注意して見る暇がなかつた。

支那人は寢臺にゐぎたなく睡つてゐる馴も普通よりは高いやうだ、鼻眼鏡を頬から滑り落して、ばかりと開いた口から色い反齒を剝出し黄た圓杯は、濟まし切つた先刻のハイカラさんらしくもない。

胴衣は不思議と著てゐた。

友麿は窃と入口の扉の所へ寄つて、少頃廊下外の様子を伺つた、寂然として足音もせぬ、頷いて今度は窓際に寄つて、カーテンを細目に庭を覗いた、犬は見切をつけたものか、黒い木立の陰あたりでクン／＼と鼻を鳴すのが聞えた。

怪む者もない、占めたツ！

「モシ、モシ、貴君、貴君」。

寢臺の側に蹲躍んで、ぐい／＼と支那人の肩を揺つた、感じがない。

「あら、君！」。

燥つたくなつて、平手でいきなり其の横ぞつ頬をびしやりと撲つた。

「ウ、ウー、喚他来、快々、嘿」。

何か寢言をいつて、長い舌を出して、べろ／＼と唇を舐る、天窓を横つちよへバタリと落して。

「おい、起きたまへ、君、大變だぞツ」。

友麿はその耳端で低い聲で呼んで、頬邊をきつと抓つてやつた。

「啊、疼的！」。

痛いので稍と目を覺した、友麿の姿がその瞳に映ると、吃驚したやうな顔をして、右の腕を突きな

がら半身を擡げた、が、又た枕の上に頽然と天窓を持つていつて、兩手で顛顛の邊を抑へながら眉を顰せた。

「貴君、何用あります、私し安眠妨害、失敬ありませう、莫迦ツ」。

不機嫌さうに咎め立てる。

「君、それどころぢやないせ、何方が莫迦だか秤にかけたいくらのなもんだ、おい君、僕はな」。

扉の方を回顧つて、ふつと氣が注いで、急いで再び立寄りて、袂の紙片を嘗つて、鍵穴の所へ粘然と貼りつけた。

「君に非常の事を密告しようと思つて、態々此の窓から忍んで來た者だぞ、夫程の好意を有つてる僕に對して、失敬とは失敬ぢやないか、先づ眼を覺したまへ、眼を……寐眊けてゐたんぢや話が出来んよ、君」。

「え、非常の……何ありますか」。

「君、何か奪られはせんか、まア、あの胴衣を檢めて見たまへ」。

支那人は變な面色、急いで胴衣の袖囊へ手を差込んで、瞿々と搔き搜したが、忽ち愕然として叫び出した。

「あツ、大變、と、と、奪られました、盗られました、五、五、五萬圓!!」。

「シユツ」。

友麿は手を振つた。「貴君、貴君、ど、ど、泥坊、だ、だ、誰あります、誰あります、誰あります、それ教えて下さい、早く

教える宜しい、な、何者です」。

といふのが訥つて且つ慌てた缺舌なので、頗る可笑しく聞えた。急いで寢臺から飛降りて、立たうとしたが、惟しくも足がぶる／＼と顛えて、俄かに重心を失つたやうに撲地と又た寢臺へ仆れて、双手に天窓を抱へた。

「痛い、大變痛い、目が眩る、目が眩る、ウーン」。

眞蒼な顔で上目に天井を視詰めながら唸つた。言ふまでもなく悪酒の祟だ、友鷹は一層氣の氣になつた、手近に在つた水をカッブに沃いで飲まして遣つて

「君、少し氣を沈めてから話を爲たまへ、それを奪つた者は僕が確かに見て置いたから、まア心配しなくとも可いよ、併し五萬圓とは驚いたなア、何だい、一體その金は？ 正金ぢやなからうね」。

「ではありません、香港銀行爲換、横濱正金銀行受取る手形あります」。

答へながらも猶瞞々してゐる。

「ア爲換か、道理で紙幣にしては形狀が變だと思つた、それから君は支那の何處で、又たどんな身分の人ですか、差岡がなかつたら先づ夫を聞かせたまへ、事情に依つては及ばずながら、僕、一臂の勞を盡すぜ、君の爲に、え、名刺は持つとらんのか」。「私、中華民国政府の者あります、官名話す少し困る、鄭文元いひます、二年前、神田法學校少し居ました、革命運動歸りました、東

京横濱私し故郷同じこと、今度政府の用事久し振参りました、奪られた金、私しの物ありません役所の物あります、それ大變困る、私し申譯ない、國戻れない、迷惑非常あります」。

今にも泣出しさう、炎の様な太息だ。

「は、ア、君は官吏か、すると官金なんだね、その五萬圓は……それから何處に泊つてるね、君……宿の名は？」。「横濱グランドホテル、今日東京へ來ました、當方未だ宿ありません」。「爾か、そして一體此の家は何だい、君は何を爲に這處所へやつて來たね、餘程變な家ぢやないか」。

鄭文元といふ男は、それを惟しむ言を惟しむもの、様に、始めて友鷹の風采を熟々と眺めながら「貴君は阿誰ありますか、貴君こそ何の用事此の家來ました」。

其反問に幾分かの冷笑も交つてゐた。

「僕か、僕は君、探檢さ」と言つたが解らないので「エクスプローションだ」と註釋した。「おう、貴君、警察の探檢ありますか、それゆゑ私し盜られた品調べるありますか」。

「ノウ、爾ぢやない、僕は獨立探檢隊だ、日本橋の……」と言ひかけたが、這處問答で時間を潰してゐるうちに、萬一の事があつてはならぬと氣が注いで「まア可い、夫は君の判断に任せるとして先刻食堂で君と怪しからん眞似をしてゐた女があるだらう、何處か巴黎ジャンらしい、垢抜のした美人だつたが、彼奴は何者だ、君とどういふ關係があるのか、まアそれを露骨に話して見たまへ、

其上で僕が目撃した事實を教えて上げるから……」。「おう、彼の女ありますか。鄭はにゆつと眉を蠢かした。かゝる那裡にも此の男について廻る一種の蟲は、特別の本能性を敢て怠らず忠實に働かせつゝある。彼の女、私し能く知りません、一昨日の晩始めて遇ひました、佛蘭西日本混血兒、名お鶴さんいひます、併し皆々爾う呼びません、トラツプスバイダーいひます」。

先づ是だけ話して顯顯を指で壓してゐる、ずきりと痛むものらしい。

「ああ混血兒か、多分爾うだらうとは思つたが、いやに歐羅巴人を氣取つてゐるから一寸解らなかつた、トラツプスバイダーといへば君、土蜘蛛のことだせ、係蹄をかけて血を吸ふ……あッ、なるほど、解めたく、怪しからん奴だね、何だ、君の情婦か、屹と爾うだらう、其麼して又た其様危険な女に引蒐つたんだ」。

友鷹は底から叩き出すやうに訊く。

「いえ、爾ういふ譯ありません、一寸した關係、深い馴染、未だ其處まで行かないあります」。

「曖昧なことを言つて「お鶴さん、なか／＼巧いあります、私し氣に入りました、へ、」聲は盆の窪から出る。「何が巧い」「エへ、」「此の家は君、ホテルか」「否」首を振つた。「では料亭か、珈琲店か」「否」にや／＼と笑つた。「解らないな、何だ!?」更に突込む。「俱樂部あります、マグテットクラブ、面白い所です、會員三人紹介ない這入れません、私し横濱紹介貰ひました、一昨日晩、瑞西のゼン

ツルマン一緒來ました、泊る朝歸りました」。「マグテット? 磁石だな、磁石俱樂部とは其麼いふ意味だらう」。

此家の輪廓は臆ろげながらも知るとを得た、けれども疑問の殻は猶硬くして、纔かにその一角を突破つただけである、此機會に最つと深く考へもし、尋ねもしたのであつたが、神經の反應とでもいふのか、廊下に誰やら歩いて居る様な氣がせられて、何だか後が懸念でならなかつた、で早く話の鼻をつつけようと急いで

「君、先刻賭博を行つたらう、ギャンプリングさ、彼の時君の正面にゐた男、彼箇を君は知つてるか」「私の正面?」重さうに額を手で支へて「知りません、誰ありましたかな……甚く酔つて夢中さつぱり覺えませんが」「困るなア、爾う謔いがなくつちやア、君は何でも七八百圓敗れたぢやないか、夫は悉皆その男に奪られたんだせ」「む、敗けたこと、薄く薄く、それ覺えてゐます、負けた何でもありません、今晚又た回復すあります、心配ない」。

兩手は脾腹を押つて、勇氣を引立てるやうに呟と息を入れたが、忽ち其下から額に深く皺を寄せて「貴君、貴君、今の話其麼しましたか、と、盗つた奴、何者あります、それ早く教えてください」。

「憶ひ出したやうに促く」「さ、それが今のトラツプスバイダーとそれから君を敗ました毛唐だ」「えッ、彼女が!?」ど、甚麼して」。

鄭は愕然として目を据えた。

途端に隣の室の戸がぎうと開くやうな音がした、ことごとと靴音も聞えた。友麿は手で鄭を制して窃と椅子を離れて入口の方へ立つた。見ると鍵穴に貼りつけて置いた紙が下へ落ちてゐる、手逸く拾つて検めると、その濡れた紙片の面に、ピンのやうな鋭い物で突いた痕跡が歴然と残つてた。

「あッ、失敗つたッ」。

顔色を變へて駈寄つて来て、いきなり鄭の耳端へ口を著けた。

「君、君、誰かに見られて了つた、最う圖愚々々しては居られん、僕は是で失敬するが、今の一件は明晩まで知らん振をしてゐたまへ、可いか、警察だの何だのと騒ぎ出すと、却つて味噌をつける種、出る物も出ないやうになるぞ、そして其の結果が君の體に、どんな危害を受けるかも知れんから、飽までも知らぬ假態がいゝよ、可いかね、僕に考がある、明晩又やつて来て、屹と君の爲に彼奴們的の面皮を剥いでやつて、奪つた金を美事取戻して見せるから、萬事僕を信頼して委しとき玉へ分かつたか、なに大丈夫だ、横濱の銀行へは僕から電話でもつて、取附けられないやうに注意して置く」。

疾言に囁くと、鄭は眼をばちくりさせながら頷いて

「それ承知、貴君屹と来るありますか、名前、名前教えて行く宜しい」。「僕は英だ、約束を違うも

のかい、日本男兒だぞッ、莫迦ッ」。

罵るやうに捨臺詞を言つて、窓際へ寄るが早い、飛上つて翩然と庭外へ降りた。鄭は愕然と口を開いてそれを見送つた。

隣室の窓の戸がバタリと音した、突然大聲で叫んだ者がある。

友麿は慌て、庭の木立を潜つた。

その影を見蒐けてズドンと打放した拳銃は、闇を揺つて消魂しい響を颯げた。

一四

三十分許の後は、友麿を乗せた俵が源吉の手に曳かれて、麻布の六本木通を走りつゝあつた。

走るとは言ひたくない、それほど鈍い足取だつた、梶棒は昂つたり低つたり、あらい鼻息が一步ごとに刻まれる。

「おい、源吉、大丈夫か、そこいらで借るやうなことはありませんか、お願だ、もつと急いで呉れ、見ろ、東がポーと白くなつたぞ」。「へえ、それは承知してゐます、承知はしてゐるが何分にも……瓦斯が、その馬力が抜けつちまつたんで、足の弾機がな、運轉困難とお出なすつたんで……此分ぢやア御屋敷へ著くのが明日の午砲かな、ア、睡い、のツべらぼうに睡い」。「戯談ぢやない、確乎し

ろよ、あい、夜が明けたらそれこそ天下の大事件だぞ、初めは脱兎の如く終に蝸牛ぢやア困つちまうぢやないか、さ、懸賞の値上だ、十五分、十五分、五圓！五圓！」。「え、五圓！うめえぞ、先刻の二圓が一ツ飛に倍以上になつちあア。義理にも奮發せずやアゐられねえ、よし來たッ、慾と差曳で命限りやツつけろ、うん、うん」。

想の外手間取つたので、友麿は氣が氣でなかつた、何でも家内の起きない前に書齋に這入つて、知ぬ貌の半兵衛を極込んでゐなければならぬと、炒られるやうにぢりぢりと躁つた結果、二度までも懸賞を張込んで尻から火をつけたのであるが、徹夜の道樂にうんざりして、さながら瓦多馬車の瘦馬のやうに勞れはてた源吉君には、此の奨勵法もさつぱり効驗がなく、二町と駆切らぬうちに忽ち舊に復つて了う。

此處まで來る間に、訊くだけのとは訊き、話すだけのことは話し盡した、不思議館といふ一つの怪物が、どういふ形状と色彩の、頭や尻尾、爪、翼を振動かして暗い空氣の底に蠢いてゐるのか、研究しようと思つたポイントはあらかた捉まへ得られた。最ら源吉に話すことはない、考へることもなし、只一秒も早く著きたい、祈るとは夫ればかりであつた、かく祈りながらも沈黙しつゝ車に揺られてゐると、今までの氣疲れが手傳つて、睡るともなく昏々と無我の境に入つた。

「若さま、若さまッ」。

耳端で呼ぶ聲がするので、ふつと目を開いた、車の轆は下りて源吉が側に立つてゐる、すると屋敷の裏手、土塀についた非常門の前だ。

「ちう、最ら來たか」。

蔽膝を取除けて急いで車を飛下りた、と、源吉の周章へた目色で、その袖を軽く引いて、門の所を指さして

「若さま、ちよ、ちよつと……何だか變な物が……アレ、彼所に貼紙をしありやすせ」。「なに、貼紙？ ドレ」。

門を見ると、果爲扉の上に白い物が貼つてある。

「訝しいなア、何だらう」。

源吉に燐寸を出させて、門際に寄つてバツと火を摺つた、その光線に映つたのが、一枚の大奉書へ墨くろく」と

メシメ切

何人たりとも此門より出入すること御無用に御座候、御用の方は表門へ御廻り下されたく候

英家執事

友麿は呀と驚いた。

「あゝ、源吉ッ、是を見ろ、是を……軍機漏洩、敵の手が廻つたぞッ、あゝ、甚麽する、源吉!!」
泣くやうな聲の下から、突と源吉の肩へ手を懸けて、悶えるやうに揺ぶつた。

「えッ、ば、ば、露見やがつた!? そうりや大變だ」。

源吉は蒼くなつて、頽然と車の蹴込へ腰を落した。

「よしッ、表門へ廻らう!」。

暫く思ひ悩んでから、友麿は奮然として恚う言つた。切端詰つて見ると最う自暴だ、進んで船首を敵艦の横つ腹に突當て、諸共に沈没するか、一方の血路を切開くか、勇らしく最後の勝負を決するより外に途がないが、併し餘儀なく振つた勇氣、實の所は薄氣味悪くないでもなかつた。

「え、表から……可うがすか」。源吉はその無謀に呆れた様だつた。

「いゝとも、堂々とやるべしだッ、心配するとはない、その車を曳張つて後に跟いて來い、責任は僕が脊負つて立つ」。

眼を張り肩を聳かして大股に歩き出した、威風凜凜——と源吉には見えた。

「仕方が無え、ヤツつけろい、恚うなりや俺も御大將の馬前に討死するばかりだ、何でえ、スツト
コ三太夫のバイバイ面、貼札なんぞ爲やがッて、べらんめえ、是でも日露戦争ぢやア、大けえ勳章
を三つも貰つた三聯隊の勇士だぞッ」。「黙つて來い」。「へえ」。

急に氣が強くなつた、が附焼刃の悲しさは、足の爪先から顛ひて來る。

長い堀を廻つて表通りへ出た頃は、最う牛乳配達ごうにゅうはいたつの車と摺違ふばかりの時間であつた、白む空の微
明りで、路上に狂つてゐる小狗の影も見られた。

正門前に來て友麿はハタと立停つた、

「あッ、門が開いてる、少し早過ぎるな、おや〜高提灯など出てゐる、あゝ源吉、いよ〜變だ
ぞ、こりや……一寸見ろ、様子が訝しいよ」。

源吉はあつかなびつく、門の蔭にかくれて、柱に取著いて首を長くして邸内を窺いた。

「あ、あ、あ、全家起きてやがらア、不可ねえなア、こいつア」。びつたと額を打つ。

「さア、突貫だッ! 突込めッ!」。

南無弓矢八幡さばかり、側目も振らず驀地に駆込む友麿の跡から、源公もきよろきよろした目つき
で空車を曳入れた。

「やいッ、此の野郎!」。

突然物陰から躍り出した男が四五人、仲間の馬丁やら車夫やら書生やらが、紛然と源吉を押取捲い
て、その胸倉へ折重なる手の十字火、彈のかはりに拳を固めてほかほかと吃はした。

「痛え〜、何爲やがるんでい」。源吉は悲鳴を揚げて、敵諸共、右から左へ雪崩れた。

驚破こそ伏兵、友麿は愕然とした。

「こりや、源吉を、ど、ど、甚麼する、俺の命令で同行したんだから、源吉に罪は無い、それを毆るといふ法はあるか、莫迦ッ」。

此一喝で手もなく敵の包圍が解けた。

「俺の指圖も待たんで、源吉に手を附けると承知せんど、源吉、憚る所はない、部屋に行つて休め、何だ、爬虫動物奴」。

睨つけた、源吉は嬉しからざるを得ぬ。

「へえ、私ア公明正大で、へい、何だ蜂蜻蛉の動物奴、さア、蒐れるなら蒐つて見ろい」口眞似をして腕を振つてゐる。

それを跡に、友麿はづかづかと玄關に進んだ、見ると甚五右衛門が羽織袴の嚴つい装で、式臺の所へ動乎と腰を懸けてゐた、他人でないだけに、聊か安心のやうな頼母しいやうな氣持もした。

「いやア、爺、来てゐるな」愛想のよい聲を懸けて「お前に聞いたら解るだらうが、甚麼したんだ、一體……此の有様は……誰かち客でも来るのか」。

甚五右衛門は黙つて返辭をせぬ、信と睨みつくる眼は爛々。
「あア、少し耳が遠い方だつたな、此の未明に御苦勞なことだ、おい、一寸退けて呉れ」。

と履物を脱いで、さつさと玄關へ上らうとする所を、甚五右衛門の枯木のやうな手を閃かして、どんと突いた、友麿は後にひよろひよろ、危なく體が頼れようとした。

「爺、何を爲る失敬なッ」目を瞑らす。

「失敬とは其方のこと、案内も乞はず理不盡に玄關先に飛込むとは、ぶ、ぶ、無禮千萬、老いたれども香取甚五右衛門、主君の命に依つて此の御玄關を守る上からは、巖の上の金城鐵壁、假令百萬の敵を以て攻め寄するとも、只の一人通すことではないわ、其方は何者だッ、名を名乗れッ！」
鑼を打つやうな聲だ。

えらい見脈なので友麿は、此の老人老碌をしたんではないかと思ふほど、愕きもしつ不審もした。

「爺や、何を言ふのだ、眞面目くさつて……アハ、ハ、こりや可笑しい、僕の姿が目に入らななのか、アハ、ハ、」笑ふとは怪しからぬ、甚五右衛門未だ盲目には相成り申さん、此の通り兩眼柄として日月の如くに輝き、千里の外に這ひ居る蟻の影さへよく見えるわ、何者ぢや、速かに名を名乗れ」。

腕を張つて息捲いてゐる、頑として石の如き態度だ、友麿はいよゝゝ呆れて

「好い加減にしないか、おい、僕だよ、友麿だよ」。「ハ、ア友麿といふと」。「困るなア、英友麿只今歸つて来たんだよ」と大きな聲で云つて「未だ解らないか、髯奴ッ」。「ホウ、英友麿とい

へば當家の御子息ぢやな。「勿論」。「虚偽を申すな、こらッ」。「えッ」。「苟くも從三位伯爵の御嫡男にあらせらるゝ若殿が、夜中無断に御屋敷を抜け出し、いづれとも知らず徘徊などいたして今頃ぬけ〜と戻つて參る所以があらうか、當家の若殿は左様な放埒者ではないわ、是まで御兩親に對し御心配をかけ、又は人の批難を受けられた例等は只の一度もなく、天晴御華族方の模範とも相成つて御座る品行方正の君子ぢやぞ、その御名前を騙つて當家に入込むとは、奇恠至極の大膽者、察するところ若殿の姿を装ひ、音聲を眞似、此の老人を欺いて奥へ通つた上に、金銀などを盗み取らうとする鼠賊の輩であらう、おのれ、夜の明けぬうちにさりと〜と消えて失せ、愚圖々々いたさば容赦はない、當家秘藏の一刀來國俊此處に在り、エ、老後の思ひ出、此の香取甚五右衛門が六十年來鍛へ揚げた眞影流の腕にかけて、眞二つにいたして呉れるぞッ！」。

ざり〜と膝行出して、どかりと突いた刀の鐙、炎のやうな眼の下から、腕を捲つて怒號した。その凄じい勢ひに友麿は肝を潰して、飛揚るやうに慌て、逃出す所を、後方から無圖と領首を捉へられて、手もなく甚五右衛門に押窘められた。

「爺や、あ、あ、謝罪るよ、ぼ、ぼ、僕が悪いのだ、おい、爺や、許して呉れ」。

式臺の上でばた〜と腕いた、是でも不思議館で日本男兒だと威張つた男だ。

「あいや、勘辨罷り成らん、眞實の友麿殿ならば耻といふものを御辨へでござらう、いや、悪いと

は能きないもの、父上の御異見に忤つて又た夜歩きなどを爲された爲め、天の冥罰でな、只一夜の間に驚くべき變事出来、其許の御身上にも由々しいとが湧いて參つた」。

「えッ、變事？な、な、何だ」。「最早其許の不行跡は一家中存せぬ者はない、獨り御自分の耻のみならず、父君の耻、御先祖の耻、一門の耻ぢや、その耻晒しを爲されたのが面目ないとならば、其許も武士の胤、潔よく切腹なされい、さ、腹を召させられい、甚五右衛門謹んで介錯仕る」。

「えッ、せ、せ、切腹！」。

刀を前に投出されて、友麿は情ない聲を絞つた、兎脱けようと躁つても、其の乾枯びた腕一本が鐵の門、びくともしない。

「爺や、そ、そ、そんな野蠻なと言はずに、ゆ、ゆ、許して呉れ、おいッ、嘆願だ」。

叫んでゐると、足取軽く玄關へ駈出して來たのがお園であつた、急いで前に廻つて、祖父の手に絶つて

「お祖父さま、お腹も立ちませうけど、このやうに被仰つてごぢやりますから、情願許して進せてください、私から能うお話申して、屹と改心なさるやうに爲るでがすよ、の、祖父さま、お願ひでござやります、若さまを私に任せてください、さ、其々に謝罪ますだに」。

優しい調停、時に取つての救ひ綱、友麿には嬉しかつた。

「ひ、お前が引承ると申すのか」。甚五右衛門は頷いた。「可い、任せるであらう」。手を放すと、友麿は撲地と前へ偃つた。

一五

お園は友麿を此方へと導いた、何處へ連れ込むのかと不審しながら、柔順に其の跡に随いて行く。母家へはとうとう一歩も足踏させずに、迂回をして庭から庭へ木立を潜つて、奥の離亭に引入れた。此の棟は伯爵が道楽に建てた御數寄屋風の茶寮で、廬地の植物から石燈籠、飾井、萩垣角戸に至るまで、遠州好みの寂を見せた構ひだつた。

茶室の風爐には蘆屋釜が沸つて、茶を點てるばかりの用意がしてある。朝露の釣瓶といふに卯の花一朶を生けて、紫野の寸松庵が五月雨の歌を書いた軸物を室床にあしらつたのは此曉らしい。青磁の千鳥からは得ならぬ香を吐かれてゐた。

「確かお園とか云つたな、お前の名は……いやいろ」と心配を懸けて濟まなかつたね、先刻爺の言つたことは、何だか些つとも僕の肚に落ちないが、一體甚甚したといふのだ、夜宵中爺が來てゐるのも變なら、何か事件が出來したとか、僕の身上に飛んだ影響を及ぼしたとか云ふのも訝しい、つまり僕が夜歩きをしたのが家に分つて、それゆゑ彼廬仰山な騒ぎをして、歸邸を待受けてゐたと

いふ様な譯か、お前知つてゐるなら話して呉んか、悪いとは謝罪を爲る心算だから……」

友麿は茶室に設けてあつた席に着いて、今茶を點てゝあるお園に向つて話しかけた、夜來の勞れで睡くなければならぬのが、妙に氣がわくわくして、眼も耳も病的に鋭くなつてゐる、流石に懸念と見えた。

お園は沈著はらつて、朝ごみの作法を紊さず、向立の千家流の美事の手前を見せながら、口を緘んで返辭をせぬ。

「おい、甚麼したといふのだ、事情を話して呉れんか」……」

猶無言。水屋の水盤に飼つてある河鹿が、ひろくと涼しい音を立てると、朝風が颯と瓦燈口から吹込んで來る。

「不加減でも恥かしうござります」。

お園は大徳寺の茶碗に、色濃き翡翠の泡を噴せて、恭々しく友麿に侷めてから、

「若さま、只今お尋ねになりやんした事柄につきまして、恐れながらお答へ申し上げやす、貴君さまは昨晩限り、お殿様から御勘當になりやんしたお體で」「お、勘當!?あの放逐か」と喫驚。「はい、左様ださうでござりやす、そいで父と私しが、種々にお調停も申し上げやしたけれど、きつい御立腹でござりやして、なか／＼お聞濟下さいませぬ、それを達てお願ひ申した上、お詫の叶

ふまで御預り申す様、漸くの事に御許しを戴きやしてごぢやります。「なに、預る、僕の活きた體をか」。「就きまして父と二人が取計ひ、當分此のお離亭を借用いたしやして、恐れ入つたのでがんですが、尊君様の御身を押籠め申すことに、仕りましてごぢやいます」。「えッ、押籠める？ぼ、僕を、か、監禁するのか、ジョ、ジョ、戯談ぢやない、お前門父子は何の権利があつて、身體の自由を拘束するのか、怪しからん、そ、そりやア不法監禁だ、第一憲法に違反してる、ぼ、僕は、そ、那、麼……」。

友麿は躍起となつた、お園は冷然。

「いゝえ、何と被仰いやしても、此お離亭からは戸の外一寸お出し申すとはごぢやりませぬ、油断なく番をいたすやうにと、父から厳しく吟附かりやした以上は、私しも武士の娘、命に懸けても……」。「だッて、だッて、それは無法だ、不合理だ、亂暴だ、蠻的行爲だ」。「それとも強ひて外面へお出ましになりたければ、據所がごぢやいませぬ、勿體ないが尊君さまをすつぱりと手に懸けやした上、私は其場を去らず自害いたすばかりで、さ、御覽じませ、此の通り用意をいたして居ります」。

左の袖をばつと拂つて見せた、帯に深く吞ませてあるのは確に黒塗鞘の懷劍！

「あッ、是は驚いた」。友麿は目を圓くして惘れ果てた。

お園は正直に眞面目に、是だけのとを言つてから、前夜の出来事を話して、自分が差出がましいとは思つたけれども、一家の大事に側の思慮などを願てはゐられず、我から進んで此の事件を引承けたのだと、その由來を説いて聞かした。

友麿には凡て意外のと許りであつた、第一自分が忍んで出た後から、強盜が這入るなど、いふとやらして、既に怪異な事實であるのに、目見得に來たばかりの小間使——吹けば折れさうな纖弱い乙女が、それを相手に烈しい格闘をして、勇敢にも二人ぐるみ手擒にしたなどは、殆んど小説以上のロマンチックな奇蹟である、嘘だらう、此女何を言ふのかと、始めのうちは爾う思つて、笑つて聞いてゐたが、更に虚飾ツ氣のない田舎言葉で爾も謙遜して語るのである、脈絡もはつきりと透つてゐれば今朝からの様子を考へ合しても、さも有りさうなとなので、嘘ではないと自ら判断すると、此のお園といふ一婦人が、友麿の眼を突破るほどの恐ろしく偉大なヒーロンになつて映つて來た。

昨日書齋に入つて來た時は、何だか變に野暮な、妙に陰氣くさい、寧ろ哀れなほど肉の營養に貧しい、精神の活氣を缺た田舎者だとはかり思つた。甚五右衛門奴の孫だけに、可厭な女だな、こんなのも東京の空氣に觸れたら、些とは女らしくなるだらうかぐらゐに、頗る淡泊に觀た。それも一寸した感じであつて、今朝までは此女が家に居ることすら忘れてゐた。それが案外なエラモノであることを見發された時に、友麿は昔の巴御前やジャンダーク、希臘の神話にあるゴーゴンの事杯を憶ひ出さ

ずにはゐられなかつた。さうして是が正しく現代婦人の一人であることを惟しみ、どんな教育を與へたなら、こんな不自然な「男のやうな女」が出来るかと疑ひ、その弱々しい姿や顔、舉動や言語と一致せざる力、勇氣、技術が、何處で調和されてゐるかを深く不審した。

が、嬉しい、感謝すべきである。父の怒の極度に達して、危なく放逐されようとした場合に、身を以て庇つてくれた同情は、所詮今時の奉公人根情には見られぬ優しさである。流石は甚五右衛門の家庭で育つた女、よくも馴染の薄い僕をそれほどまでにと、思ふと有難くないでもない。でも、胸の底では其の親切に同化させまいと邪魔するやうな聲もした、何の、放逐なら放逐でいい、爾うなつた方が却つて僕の手足を伸すに都合がよいのだ、餘計な世話を焼いて人の自由を束縛する、と反抗するやうな傲慢な気分も潜んでゐた。

父の命令なら何も絶対に服従せんでもよいが、死を以て守るといふ此恐ろしい女に蒐つては、可厭でも服従しない譯にはいくまい、拙いとして殺されたら大變だと、餘儀なく服罪仕つて、神妙に座敷牢に沈著いた。

お園は一步も離停から出ない、次の間にさちんと控へてゐる、體のよい女看守だ。食事や其他必要の品は、母家の方から誰かゝ一々搬んでゐる様子だ。

朝飯が済んで、氣が弛んで來ると、急に睡くなつた。ごろりと横になつて一寢入やらかした。目を

覺して見ると何の間にか絹衣具をかけてあつた。時計は最う一時だつた。

午飯もお園が給仕をした、何だか食客に來たやうな氣がすると笑つた。お園は黙つてにこりとませぬ。

書籍が見たくなつたので、書齋にあるのを五六冊取寄せて呉れと頼んだ。お園は電氣呼鈴で母家から人を呼んで吩咐けた様だつた、少頃してから届いた。

目の前に持出したのが、誂へたブックでない、古い／＼盡だらけの寫本が「かさね、把つて見ると「甲武軍記」、「武邊一夕話」、「武林珍談集」、「大阪冬御陣記」、それから振つてゐるのが「猿蟹合戦」。まだ驚くべきとがある、其本に添へて、ぶんと樟腦の匂のする擊劍道具一組！

「いやア、何だい、こりや」。

お園は恭々しく手をついて、眞顔に

「それは個様でござります、祖父が使を以て申しやすには、お部屋にある御本は何でがんですか解らねえけんど、いづれ碌な物ではござりますまい、左様な本を御覽になりやすから、兎角にお心が狂ひ勝、御兩親様に御心配をお懸け申す様になるのだ、今時の學問は若い者に毒になればと云つて、決して樂にはならぬえから、一切お見せ申す譯には参りませぬ、お退窟凌ぎとなれば是で澤山、第一教訓にもなり又た面白い、御覽濟になれば文庫藏から、和漢孝子傳を取出して差替へます

ると、こないに申しやした、はい。「いやはや實に、恐れ入つて口が听けない」。友磨は額に手をあて、折角ですが是はお返し申しませう、古物展覽會でも開く時に、又た拜借いたしますよ。一つ皮肉つて突返してから「その撃劔の道具は何だ、盡干か」。「いゝえ、是れはあの、御徒然の時に其處のお庭先で御運動なさる様にと、祖父から遣したもので」。「ハ、ア、よくお氣が注かれたな、併し一人で竹刀を揮回したところで、仕様がないやないか、樹でも叩くか」。「未熟ながら私しがお相手を仕りやす祖父は劔の極意大極に均し、大極一たび動いて萬象生ず、其の機を捉へて無念無想となる、十惡の念又た丹田に發するとなしとやら申しやすから、尊君様の御精神を鍛へる爲め、日に何度となく御立合を願ひ、鹿島神陰流の一手二手を御指南申せと、左様に吩咐つてごちやりやす」。「戯談ぢやないせ、お前に何度となく打叩かれた日には直と腦病だ、まア〜御免蒙る、堪忍して呉れ、堪忍して呉れ」。

友磨は片手で拜んだ、お園は笑つて

「オホ、そないに怖なうごちやりやすか、私し鬼ではがアへんがの」。何だか知らないが、南無夜叉明王、命だけはお助け下されい、ハ、ハ、ハ。釣られたやうに苦笑した。「モシ、兄さま、兄さま、ちよいと」。

圓窓の外で突然優しい聲がした、青い糸萩のゆらぐあたりに鮮かな人影。

「阿誰でござやいます」。友磨より先にお園が聞つけて立揚つた、半開き残した障子を引いて、外を覗いて「あら、お姫さま、御用なら私に……」。

其處に立つてゐたのが須磨子である。

「園、いゝでせう、兄さまとお話したいの、遇つて可くつて、ね、ね」。

と首を斜めに、愛らしい目をくれた、

「左様でござやいますの」。お園は一寸猶豫つて「外のお方様ではねえだから、差間はあるまいと思ふですが、アノ、お姫さま、こりや私のお願、どうぞの、長話を遊ばさらねえやうに……祖父に知れると大事でござやりやすから」。

流石に女、優しく答へて手招きした。その下から須磨子は突と駆寄つて、友磨の姿を見るといきなり「兄さま、私、く、口惜しいッ」と泣き出して、轟と窓際へ取著いて身を戦かした。

「須磨さんか、甚磨した、何が口惜しいのか」。友磨は坐を立たうともせぬ。「何がツて、餘りですわ、阿兄は……」。涙を啜つて「昨日私から彼歴に申し上げたやございませぬか、それに直と這

麼失策をなすつて……」。又た泣いて「お父様は仕方がございませぬけれども、お母様や私しの心配がどんなだと思し召します、同じ家にゐながら、公然お目に懸るとも能きないやうになるなんて、何といふ情ないとでせう、家庭の平和を破るのも、こんな辛い思を爲さるのも、悉皆兄さまの御心

から出たとですわ、わ、私、く、口惜しうございます。」「須磨さん、おい、お前又た異見に來たのか、異見なら聞く必要はない、僕ア些とも辛いとは思はんよ、座敷牢といふとは話に聞いてゐたが経験するのは今破天荒だ、悪くないな、親父の叱言を聞かなくても、氣が暢々する、實際樂天地だぜ、おい。』

友磨は冷笑つた。折柄、四目垣の蔭から星のやうな目がぎよろりと光る、それは甚五右衛門であつた。

一六

須磨子は泣顔を擡げて

「よく那麽事が被仰られてね、餘程甚麽かしてらつしやるのよ、阿兄は……御自分の我儘といふものですわ、それは……我儘よ、自暴自棄よ……家庭といふとを些とも考へて下さらないんですもの、餘りですわ、些とはお母様の身にもなつて御覽なさいな、今朝から御飯も召上らずに、爵いでばつかりゐらつしやるぢや御座いませんか。』

家庭といふとを根據にして十分攻撃してやりたいのであつたのが、一途に怫然としたので思つた理窟も纏まらずに、切々の詞になつて了つた、でも其の眼だけは精一杯に鋭くして、兄を威嚇したつもりであつた。

「家庭々々といふが、家庭が何だ、苟くも六尺の男兒が蝶螺殼のやうな狭い天地に齟齬してゐられるか、ホームなんてえ物は人間の意氣を殺す一種の牢獄だ、僕は死んでもそんな所に囚へられてゐたくない、必要なら何處か大きな植民地でも拵らへて、其處を生涯の家庭にも墓にも爲るさ、こんな小ぼけな英家ぐらゐぢや、樂々と手足も伸ばされやしないぢやないか。』

お株の大言、傲然として睨み返した。須磨子は手もなく根底から叩き壊されつ口惜しさに堪へられなかつた、争ふ道理は餘るほど腹にありながら、弱い女のその武器を取直して、正面から一氣に打つて蒐るべき氣力が伴はぬ、寧ろ背後に廻つて、情の方面から優しく突いて見ようと思ひ直した。

「ですけれどもね、兄さま、阿兄は血肉の關係までもお切んなさるといふ、那麽不道德などは能きないでせう、阿兄の方で切らうと爲すつたつて、世間で許しやアしませんわ、お父様やお母様は何處までも阿兄の親、阿兄は何處までも私の兄ですわ、可厭だの嫌ひだのと被仰つたつて、その關係は一生涯ついで廻りますから、何處にゐらしつても甚麽おなんなすつても、阿兄はやつぱり英家の人よ、英といふ一字は取れるもんですか。』

恚う言つて、足下に置いた蔓細工の籠を把上げた。中には蕉果だの櫻子だの桃だのが、珠を累ねた如に堆く入つた。

「兄さま、是はね、お母様から下すつたの、友は好だから持つてつてお遣りつて、オホ、秘密よ、美味さうでせう、食べたいでせう」甘へるやうに一寸その顔を見て「阿兄は冷たい心でゐらつしやるけれども、お母様の方は此の通り熱うい愛情を注いでゐらつしやるの、その御思召しに對しても、彼廢事を被仰るのは勿體ないぢやございませんか、それにねえ、兄さま、早く御改心をなすつて、お詫が叶う様に……」聲が潤んだ。「若鯛いなア、チヨツ」友磨は舌打して「那廢物は要らん、持つて返れ」喉から手の出さうなのを怵へましたといつた様に故意とらしく叱り飛して横を向た。「あら」須磨子は憫れた、取著く袖がないのを更に一息踏込んで「兄さま、それでは、あの、今朝程ね、廣瀬さんが入らつしつて、喜多子さんの結婚ね、彼の日取を、早くつて爾ういふ申込があるんだらうつてね、大變困つてらした御様子よ、先方が急いでらつしやるくらゐだから、兄さまさへ確乎してらつしやれば、今にも喜多子さんと芽出たく御結婚が能きますのにねえ、甚麼してこんなお心に……」。

又た泣いた、お園は終始俯き勝に黙つて聞いてゐたが、此の話の時だけはふつと目を舉げて、特に注意する様だつた。

「可厭なことだ、斷つて了へッ、結婚問題なんぞ！」。

友磨は不機嫌らしく叫んだ。

と、四目垣の蔭から甚五右衛門がのそ／＼と出て来て、須磨子の知らない間に竦然と後に立つた。

「こりや、お園、何故面會を許したツ、兄妹縁者たりとも一切遇はせてはならぬと彼箇程堅く申し聞けたに、エ、不甲斐のない奴だ、モシお姫さま、此處は尊嬢のお出なさる處では御座いません、さ、さ、速かに立ちなされい」。

引裂いたやうに、須磨子は戻つて去つた。邪慳な兄の言葉が、無念で無念でならなかつたのであらう、去る時まで手帕を顔にあて、泣いてゐた。

甚五右衛門は不機嫌らしくお園を叱り飛ばして、何人にも一切會はせてはならぬと固く注意してから、須磨子の後を追つて路地を出た。康子夫人から内々に贈つたといふ水菓子は、遂に友磨の手に渡らず甚五右衛門に持去られた。

須磨子が來たのも、異見がましいと言つたのも、又た爺が飛出して止めたのも、或ひはぐるになつて自分の精神状態を試さうといふ一種の狂言ではなかつたかと、友磨は薄々そんな氣がせられたばかりで、別に恚といふほどの深い感じも後に残らなかつた。只恚にも旨さうな、露が滴れさうな好物の水菓子を、一寸見せつけられたばかりで持つて去かれたのが、冬の遊獵にあたら獲物を逸したやうな心持がして、未練でならなかつた。

こんなとで日が暮れた。底に潜んでゐた一つの心配が、俄かに勃々と蠢き出して、さながら蝙蝠の時を得貌に翼を張つて飛廻るがごと、闇へ行、闇へ行くと嘆かし立てる、それが堪切れぬ程の惱ましさである。

蒼醒めた支那紳士の顔や、悪黨らしい外人の物凄目付、そんなのが隠約と暗に泛ぶ、お園が持つて来た籠行燈の火影でばつと前が明るくなると、華やかな食堂の光景が忽然目先に現れて、其の中に蝶のやうな怪美人お鶴さんの姿が、ひらひらと出沒する。

「弱るなア、彼箇程固く約束したんだから、是非出掛けて去つて救つて遣りたいが……五萬圓、五萬圓！行かなければその金がフイになる、否、金の問題ぢやない、日本青年の體面にも關する大事件だ……と云つてこんな監禁されちア、如何することも……ア、弱るなア」。

腕又しながら壁に凭れて、悶えるやうに息を吐いた。と、庭先の何處かで、ゴ、ゴ、と間の抜けた聲が聞えた。

「は、ア、例の先生だな、啼いてる啼いてる、ウフ、ウフ、」思はず會心の笑を洩らした。「我に蝦蟇仙人の術あらばだ、君を煩はして霧を噴かせ。その霧に乗つて兒雷也のやうに、ドロン〜と飛んで行かうものを……此の壁一重が鐵のだ、チョツ、可厭になつちまうなア」。

青山の原で手捕にした蝦蟇は、源吉に吩咐けて此の茶寮の露地に放し飼にしたのだつた。今啼いて

るのが夫らしい。

「む、彼奴、如何したらう、何も知らずに待つてゐたらうな」。その啼聲でふつと源吉が憶ひ出した。

「モン、若さま、若さま……」。

途端に瓦燈口——茶の會に客の入る上手の通路——の所で、自分と呼ぶ者がある、極めて低い忍び聲だ。友麿は振返つたが、黙つて様子を見てゐた。

「若さま、モシ」。今度は指などで羽板をことごとくと叩く響がした。

お園は茶立口の次で何を爲てゐるのか出て来る氣配もない。

「誰だ、誰だッ」。微聲で答へて、小障子を引きながら窺と覗いた。

「へ、私で」。源吉だつた。

「如何した、無事でゐるか」。友麿は後を見て言つた。幾んど敵地で主従が廻り合つたかの様、嬉しさに胸も轟く。

「いえ、とら〜やられつちまひやした、へい、朝つばらから延喜でも無え、飯も吃はせずには呼出しやがつて、あの甚五右衛門の老碎爺奴え、都合に依つてお暇申し附けるなかと、横柄に吐しやアがるぢやござせんか、糞忌々しいから、エ、勝手に爲やがれ、火を放つて焼拂ふぞと嘍鳴つてやりやしたら、先づ其方の幘鼻禪から焼拂へ、衛生上宜しくないと來やがつた、あんな癪に障る爺ッた

らありやしねえや、チョツ」。「コレ、静かにしろ」友麿は制して、「では僕の爲に解備されたか、む
！」。ばらばらと瞬きして「源吉、濟まんやア」。流石に聲が顫へた。

「源吉、是も僕から出たことだ、汝には實に氣の毒でならん、が併し、決して無責任なことは爲な
い、今に屹と汝の證明が立つやうに、又た生活の方法もつくやうに、一切僕が引承けて遣るからな、
最う少し時機を見て呉れ」。

友麿は詫を爲るやうに言つた。自分の犠牲になつたかと思ふと、そらに哀れでもあり、又た罪の
ない者を能く調査もせず、不公平な裁きをした家扶や爺の仕打が、憎くつてならなかつた。何途本
人を庇護して惨めな思をさせぬだけの手當をすることが、當然自分の義務だとは氣はついたが、差向
き以上は慰めて遣るべき術もなかつた。

「と、と、飛んでもねえ、首になつたからつて、貴君に尻を持込んで負さるやうな、そ、そ、那麼
卑怯な私ぢやアござせん」。源吉は嬉しさうに水涕を吸り上げて「なアにね、お前さん此の屋敷ばか
り日が照りやアしませんや、何處へ行つたつて食はぐれの無え生一本の兄いだが、尊君をどツかへ
曳張出して、悪い遊びでもさせたやうに、劈頭から爾う思えやがつて因果も引導もあつたものでな
く、泥坊猫でも追ン出すやうにブイと首に爲やアがつたのが、忌々しくつて堪らねえから、恣なり
や最う意地づくだ、一生涯友白髮尊君に附纏つて、南極だらうが、北極だらうが、地獄だらうが、

極樂だらうが、何處へでも貴君の尻馬に乗つかつて、飛んで廻つてからに、さア甚だだ、是でも二
人の仲を切れるかと、彼那門にギヤフンと參らせて遣らなけりやア蟲が承知しねえんだ、だからね
若さま、こんな野郎でもお氣に召したら、どうかお見棄なく可愛がつてお呉んなせえ、俺アお前さ
んの爲なら命も投げ出すよ、エ、實際おべツかるんぢやねえ」。「ぼ、僕を、そ、夫程までに信頼し
て呉れるか」。友麿は窓越しにその顔へ感激の目を投げた。「併し源吉、家は困りやアしないか」。「いえ、
なアに、嗚アが、その些と怒れやがつて……」。口の中で呶々といつてゐたが「チョツ、畜生ッ、如
何なるもんけえ、男の意地だいッ」と擱んで手拭を足下に叩きつけて、其手で鼻を摩つた。

友麿は少頃黙つて灯を見詰めてゐた。
「乃で若さま、昨夕の一件は甚ださいやすね、今晚てえ約束なら行つて遣らなけりやア、彼のチ
ヤン公が可哀想でげすせ、實ア夫があるもんだからね、甚だ様子かと思つて、日暮方を幸ひ表の方
からこつそりお庭へ這入つて、此處まで忍んで來たやうな譯で……如何ですかい都合は出られやし
ませんか」と低聲で言つて窓の口から奥を窺いて見て「あ、あ、居やアがらア、番をしてやがるん
だな、獸奴」と呟いた。「さア、それで氣を揉んでるんだ」。友麿は術なげな太息を吐いて「困つたな
ア、一通りでない頑固な女で、出ると殺すと云つてるんだから……」。「え、殺す!? だ、誰が……」。
「お園といふ、ソレ、昨夕強盜を取捉まへた大變な奴だ、汝、聞いたらう」。「えッ、あの爺さんの

孫で、いやア、そいつは恐ろせえ難物だ」。

二人は急に情氣で了つた、内で唸れば外でも呻く、話はひとり切れた。

お園は母家から搬んだ夕餐をお膳立して、恰ど其時、目八分に捧げながら恭々しく持つて出た。

友麿は喫驚したやうに瓦燈口を立つた立際に手逸く小障子を閉めて、何吃はぬ顔で席に復つた。

「若さま、最う時分時でござりますで、召上り遊ばすやうに」。

生頂面に下手に畏まつて、塗盆を前に端と姿勢を正した。

「いや、僕は食ひたくない、下げて貰はうか」力なげに其の膳を突いた。

「おや、甚麼してござやいます」お園は氣遣はしさうな目で顔を仰見げた。

「最う胸が……胸が、い、一杯だ」瞬きして俯垂れた、固く手を又んだ儘。

「え、お胸が……如何なされました、何か御心配な事でも、あの、急に……そんなら其様に私しへ

被仰つて下しやいますし、出来ます事なら何とか致しやすで、何卒御遠慮なく」。

今までになく優しく聞かれた。其の詞から友麿はふつと思ひついた、叶はぬまでも説いて見ようか、

真心を打割つて絶つたならば、よもや素氣なく振棄てはせまい、と咄嗟の間に爾ら決して、いきなり

袖を這つて、お園の前にびたりつと兩手を突いた。

「園、お前に一生のお願がある」え 一生のお願？」お園は驚いて「何でござやいます」と目を

据ゑた。「外のとでもないが」友麿は手を突いたなりで「僕を、あの、僕をな」言出しかねて少頃口

籠つてゐたが「情願、今夜一晩だけ出して呉れないか、出して呉れんければ、ほ、僕は……だ、だ、

男兒としての面目を失ふて了ふのだ」。

源吉の話にそゝられて、胸が曇つてゐた矢先であつた爲か、自分の詞につまされたやうに、急に悲

しくなつて、要領すら明晰といはれぬ程の不甲斐なき男になつた。お園の顔色を窺はうとして擧げた

目が、潤む睫毛に遮られて霧の如だつた。

「出して呉れ？あの、尊君さまを……やれまア、飛んだことを」お園は意外らしく受取つて「出し

て進せられるくらゐなら、何もこげえにお附添ひ申してゐる理窟が、無えではござやいませんか、

そりやハア餘り滅相なお言葉ですが、そげえな事したら尊君さま、爺さまから手討にされますだ

ぞ」と目を睜つたが「何でござやいますッて、出なければ男の面目が……あの、男としてのお顔が

立たねえと、慥う被仰るのでござやいますか、それは一體如何いふ譯で、さア、最つと詳しく嘸し

てくださう」。

拒絶しながらも、流石に優しい女性の、理由を聞いた上でと再考するだけの餘裕を置いた。友麿は

それに勵まされて

「相手が日本人なら未だ我慢の仕様もあるが、何處の國の浮浪人だか性の知れない悪黨者が當面の

敵で、それに苦しめられてゐるのが支那の紳士だ、その支那人を悪黨の手から救つて遣らなければ五萬圓といふ大金を奪はれた外に、或ひは生命に關するやうな椿事が出來するかも知れん、それを傍觀しては居られぬから、今夜必ず出掛けて行つて救濟すると本人に盟つたのだ、若し違約をすれば、救ふべき時機を失して、むざむざ本人を死地に陥れ、日本青年としての信を隣國に缺くとになる、そ、それが、此友鷹に堪へられん、實に忍び難い苦痛なのだ。

是だけ前提してから、友鷹は出來得るだけ細かに事情を碎いて嘯した。

磁石俱樂部とは或一種の引力——酒、女、賭博——に依つて吸ひ著けるといふ意味であらう、其名から推しても純然たる魔窟であることが知れる。

何人が創立者で、誰が支配してゐるのか、どういふ規約が内部にあるのか、其處までは判明せぬが源吉が見馴れ聞馴れ記憶してゐるところでは、會員は少くも三十人はある、その幾んど全部が文明を看板にしてゐる白哲人種だから驚く、勿論立派な人格ではない、紳士といふも表面だけの、半獸主義のライセンチアスマンでなくばアラツプ、どうで碌な團體ではない。東洋人も偶には來る、併し會員ではなく、一時のお客として遊ぶだけだ。日本人は絶無と云つてよい、是まで二三人探檢に入つたけれども、紹介がないとの口實の下に玄關先から逐はられ食堂まで踏込んだ者も相手にされなかつた。秘密は嚴重に保たれてゐると見え、會員同志でも館内の出來事を知らぬ者が多い、大金を捲揚げ

られたの、惡辣の手に蒐つて骨酷い目に遇つたのといふ噂はあるが、その被害者は會員側には一人も無く、凡て日本の觀光客といつたやうな旅人であるのが、一つの不思議だ。

それは階上の方の話で、階下の方——地下室は日本人の専有に屬してゐた。此處に來る者は代議士の抱車夫、車宿の親方、お屋敷の馬丁などは先づ上の部で、土方の頭、汽船の火夫、コック、得體の知れない前科者の破落戸など五十人許が、それでも申合規約めいたものを拵へて、俱樂部組織にしてあるから可笑しい。女氣のない代りに酒と博奕が真で、毎晩のやうに大きな勝負もあれば喧嘩もある。元締は佃島の親分から杯を返されたとか返したとかいふ深川の三日月寅といふ遊人で、規約書に會長といふ肩書が記してあるのが聊か滑稽だ。テラは四歩六の割で館主へ納めるのだといふ。

最一妙なのは、此の魔窟に出入する者は凡て「七」の字を符號としてゐること、俱樂部員に渡つてある銀製の徽章を見ると、羅馬時代の王冠の上に朱で「7」の字を彫つてある、其冠の飾にしてある寶玉の所に嵌めた小粒の硝子を、光線に透して窺くと、裸體美人の寫眞がありくと現れるなどは振つたものだ。地下室の連中は徽章を有たぬかはり、回数切符のやうなのを買取つてある。それを行くたびに一枚づつ裂いて門番に手渡すのだ。極彩色のアツシリア模様は佛語で何か書いてあつて、やはり是にも七の字を刷込んだのが、事情を知らぬ人が見ても一向解らない。此の切符を賣つた金を仲間の病氣見舞や、酒場の爺さんへの附届、會の維持費などに充るのだといふ、面白い仕組だ。門の

扉も七つの呼鈴で開く、夜の七時開館、朝の七時閉館、お客に關する一切の事務は七號室で取扱かつて、使用人は七人と制限されてゐる。客は七人まで長く宿泊することは能うが、其他は又來るとも朝の七時迄に歸らなければならぬ。酒場の獨逸人が今年七十になるなどは、全くとのお景物だ。

源吉の知つてゐるのは是だけで、怪しの美人が大勢居るとに就いては、餘り多くの消息を語り得なかつた。友鷹は人の話に聞いてゐる高等地獄！巴里のモンマルトルや羅旬街邊りに巢を吃つてゐるコツコツと呼ぶ魔物。若くは倫敦のピカデリー街に横行するホワイト、スレーブと渾名のついた春賈婦、米國のデスレビユタブル、クワターといふ暗黒界に生血を吸ふ哀れの女、大方そんな種類のものだらうと判断した。

目つきの恐ろしい男、それも何者だか源吉には解らなかつた。窓から飛降りた時に、ビストルで狙撃したのが、甚麼やら其の男らしかつたと想はれるので、源吉に見込を聞くと、なに、那麼奴は幾人も居る、拙にまごつくと蜂の巢のやうに渾身へ穴が穿くと、物騒な返辭であつた。

以上を詳しくお園へ話して聞かせて、紙へ其の不思議館の地形から間取圖までも描いて見せた。

お園は謹んで聽いてゐた、別に駭いた様子もない、友鷹が不思議と感じたほどに不思議とは思はなかつたやうだ、そんな事もあるかねと淡い興味を以て、世間噂を耳にするやうな他々しい體度が、いかにも無神經らしく見えるので、友鷹は急に張合抜がして、所詮此方の嘆願を容れては呉れまいと、

その返辭を聞かぬ先から早失望の氣味であつた。

と、猶豫なく與へたお園の答が案外である。實に小氣味のよい程の案外である。

「宜しうござります、承知仕りやした、お出し申しやす、でがんですが、尊君様お一人ばかりをお出し申す譯には参りませぬ、何様なことがあらうと御側を離れるなど、固く吩咐かりやした私しでござります、何處へなど御附添ひ申しやす、さ、お支度遊ばせ」。

的は美事に貫けた、最早記すべきとは無い、只此際友鷹が源吉の忍んで來てゐる理由を明して、其處へ呼入れて、三人膝を突合せての相談に、敵の裏をかく一つの作戦計畫が出来揚つたことだけを、手短かに附加へて置く。

其夜の十一時頃、築地のマグネット俱樂部の玄關先へ、フランダース二十馬力の新しい自動車は横著にされた。

徐かに車から降りたのが、縞セルの軽い脊廣にバナマの帽子、黒眼鏡をかけた年若の紳士で、外に高島田の御屋敷風、服装こそ地味なれ、アイク燈の光に凄いほどの艶かさを、その面長の顔に見せた娘である。

無論、友鷹——お園!!

玄關に出て來たのが、昨宵見たとほりの露西亞人らしい頑丈造りの男だつた。友鷹はづかくと

前に進んで

「私し中國天津銀行つとめる者、宋倪田あります、私し友人鄭文元こちら来て居る、それ遇はせること頼みます、急な用事ある、早く頼む。」

出鱈目な支那人らしい口調で、先づ脈を引いて見た。玄關番の男は鋭い目をちろ／＼二人に浴せかけて。

「鄭さん、何用あります、用事いふ宜しい、俱樂部規則なか／＼嚴ましい。」

沮む色が十分に見えた、此方の出様に依つては一步も踏込ませまいと、入口の所へ頓が立つたやうに蹙つてゐる。友鷹は小腕に抱へた折靴を一寸叩いて見せて態と莞然して

「鄭さん、金持て来い私し云ひました、ソレ、牌、牌」と札をめぐる手真似をして「金ない、大きい勝負なりません、私し其金持つて来ました、一萬圓、一萬圓、此の中在る。」

我ながら天晴上出来、是でもかと其男の顔を見仰げると、急に機嫌が變つた。

「金、宜しい、差間ない。領いたが「此の姐さん、どなた？」と今度はお園に劍尖を向けた。「む、此の日本別嬪さん、鄭さん馴染、妾ッ」と笑ひながら言つて「鄭さん、指環買う約束、未だ買ひません、それ頂戴出懸けました、今貰う直歸ります、日本別嬪さん、皆々薄情、金欲しい、親切ない嫉妬やくとありません。」

鄭を連れ出しはしないかといふ懸念を打消す爲に言つたのが、さも自然らしく聞えた。お園は可厭な顔をして下を向いた。

「アツハ、左様か、宜しい。同じ様に大笑して「別嬪さんありますな、結構結構、味もない、香もよい」と露人のよくいふお世辭を奉つた。

斯くして二人は無事に難關を通り抜けた。源吉は自動車の運転手を庭先に廻して、自分は小蔭に立つて此の間答を聞いてゐたが、占めたとばかり鼠啼して、何喰はぬ顔で跡からのそ／＼と上つた。

「おい、大將、氣が揉めるな、チャンコロの癖にあんなのをせしめやがつて、ヘン、畜生如何する氣だい、構うこたアねえ、みつちり引奪つてやんな、癖になるよ、なア。大將。」

其男の肩を軽く叩いて、片手に例の切符を出すと、「む、その通り／＼」と首を振つての御機嫌だ。源吉は地下室に行く假態をして、素捷く廊下の隅に忍んだ。露人は先づ二人を階下の應接所らしい室へ入れて出て去つた。程なく復た引返して来て、友鷹だけを鄭の居る室へ案内した。その跡にお園は残つた。

明るい電燈が輝いてゐる、伯爵家の西洋の間よりは猶一倍綺麗美やかな裝飾にお園は驚異の目を翳して、あちこちと見廻してゐると、半分開いてゐる扉の外から、怪しくも咽び泣くやうな聲が聞えて来る。それが前夜友鷹の廊下を通る時に、ふと耳に入れたのと同じ泣聲だつた、正しく女！

お園は覺えず椅子を離れた、さうして徐かに扉の外面へ首を突出して、その聲の出所を確かめようとした。

聽てその泣聲が、向ひ側並びの二室から洩れて來るのであるとを突止め得た、直前の室から右へ二つ目らしい、と思ふと自然に足が動き出して、その室の前まで行つて見た。

不思議の物を見たい、變つたことに打突かりたいと思ふ好奇心よりは、寧ろ其の泣聲の底に潜んだ悲哀の、どんなであるかを知らぬまでも、他に聞過してゐるものが、いかにも無情の様に感じられてならかつたので、切ては其人の姿だけなりとも、想やつての業であつた。先が女だといふのが、猶一入憐みの心を引立たせたので。

扉は一尺ばかり開いてゐた、其處から垣間見ると、電燈の光を脊に、一人の婦人が絨氈へ頽れたやうに膝を折つて、椅子の上に肱と顔とをのせながら、突伏したなりに泣いてゐるのであつた。

雪のやうな衣を着けた後姿から髪の工合、西洋の人でもなく、又た日本の女とも見受けられなかつた。

泣いてゐるかと思ふと、ひよいと起返つて、双方の肩へ手を懸けて、脊りに體を跪かせて何か叫ぶのが、得堪へぬ苦痛を訴ふるが如くである。

お園は黙つて見てはゐられなくなつた、思ひ切つて扉を引くが早い、駈込むやうに突と側へ寄つ

た。

「モン、何故そないにお泣きなされる、何處か痛いのでがんですか、如何しただといふのかね、空ア。後から肩を抑へるやうにして、斜めに其の顔を覗くと、其女は恟然として回向つた、小さな眼つきの可愛らしい、頬から腮にかけて曲線の迫つた、色の較や蒼醒めた十八九の娘である。

「私は一寸此家へ用達に來たので、別に心配する程の者ではねえだから、差支が無ければ、其譯を話して呉れさつしやい、都合に依つては及ばずながらも、力になつて上げますだよ、甚麼したかね」。

何と思つてか、不安の目づかひをして翟々と自分を囁めてゐるので、お園は更に言を繼足して、其疑を解かうとした。

「何處で御座るだね、貴娘は」。「私朝鮮あります、平壤家あります」。

果して朝鮮の女だ、日本の空氣は餘程吸つたらしい口吻で、手短かに恚う答へる下から、忽ち顔を擧めて

「あゝ痛い、痛いッ」。

と身悶して、仰反るやうに足を投出した。お園はその脊を摩つて

「何處か痛いの、お腹？胸？」。「か、肩、て、て、手、ひどく酷く、私打たれました、アイゴ、

アイゴ！」

又泣出した。腕を捲つて検めると眞紅に脹上つてゐる、確かに筈の痕だ。

「おや〜大變だ、誰に打たれたのかね、何故そないな折檻を……打たれる譯があるのかね。」私、三日前此家に連れられて來ました、恐ろしい人が居ます、私に妓生なれと言ひます、私可厭〜言ひました、大層怒ります、食物與れませぬ、此の部屋入れました、時々來ます、打ちます、足踏むあります、先刻も來ました、私殺すと言ひます、殺される宜しい、殺せと私言ひまして、殺す待つて言ひまして、今出て行きました、私欺されました、く、く、口惜しいです、彼箇人ありません、鬼あります。」

まだるい辭が血を滌すやうに、淋漓と白い齒から洩れて來る、その缺舌が聞くに堪へぬ一種の哀調であつた。

先方は痒い所に爪がとどかぬやうな覺束ない日本語、此方はそれに劣らぬ怪しげな地方訛、粘つた口でねと〜と話し合ふのであるから、双方の意思が疏通するまでには餘程骨折れた。が、同じ度合に熱した心の融け様も早く、お園は明白に、左の如き悲惨の事情が此の少女に纏綿してゐるのを會得した。

名は沈桂林、今年十八、祖父は朝鮮での名家で、明治十七年の事變に際して、日本黨の洪英植や朴

泳孝の股肱となり、盛んに活動したものだ。それが運悪く仕損じて、閔族の爲めに殺されて了つたので、子の奎といふのが京城を逃げて僻阪に潜伏し、日清戦争後始めて平壤に出て來て土著した。その間に出來たのが此の桂林である。京城で少しばかり日本語の練習をしてから、東京の女學校へ入るべく、釜山から汽船に乗つた。と同船した佛蘭西人だといふ女が、私がお世話を爲ませうと親切に云ふので、一緒に横濱まで來た。躰て此の館内に連込まれた、と、がらりと態度が變つて、就學の周旋どころか、客の伽をしろの妾になれのと脅かす、驚いて拒んだが承知せぬ、隙を見て逃さうとする、玄關口で取捉まつて大きな強さうな男幾人かに、打つたり蹴られたり慘々な目に遇はされた。それから此處に押籠められて、容易に室外へも出られぬ始末、今日で一週間泣き透したといふ。

「まア何といふ慘めなことだらう、ぢやアお前さまは誘拐とやらに遇つたのだね、女子の癖に悪いとを爲る、呆れたものだなア。」お園は美しく目を睜つた。「宜しい、愆うするがい、だよ。」倍と思ひ定めて「まご〜して居ると、大事な操を破らなければ、苛め殺されるやうになるだから、一時も早くお逃げなさい、い、え、逃ると云つてもお前さま一人を手放すのぢやない、私が逃がして上げるのだよ、構うことはないから、其處の窓から飛下りて庭へ出さつしやい、可いかね、それから玄關を右へ廻ると、私の乗つて來た自動車ちう車があるから、其の車中へ這入つて、膝蔽を被つて隠れてゐるのだよ、可いかね、人に姿を見られないやうに、さ、是を著て行かつしやるが可い。」

充分に注意を與へてから、室の隅にあつたテーブル掛を外して来て、沈の肩にふはりと桂けてやつた。

「有難う、有難う」。沈は感謝の涙に目のうちを輝かしたが、それでも恐怖に曳かれて遅疑ふやうに「大丈夫ありますか」。「早くなさいよ、発見されると面倒だに……え、私が引承けたといふのが解らないのかね、齒痒い人だなア」。

お園は地烈たさうに腰を押して、窓の下まで連れて去つた。

途端にぎらと扉が開いた、ひよいと出た真白な顔の側に、閃然と光る耳環、乳酪色の乳房の張つた胸當から、だらりと寶玉のブルーチが下つた。

「あやッ」。驚いたと見えて、いきなり駆込んで来て。飛著くやうに沈の裾を執つた。「ど、ど、何處行くッ！」。

足を椅子から離して、窓口に乘つた沈は、呀と動悸ついで、覺えず鎧戸にかけた手を引きさま、後へ顛がり墜ちようとした。

お園は黙つてつゝと寄つた。右に織腕が舉る下からばたりといふ肉の響、沈の裾を取つた女の手は拂ひ落されて、くるくつと踵が轉つた。

「う、ひん」。

逆指にかけてから、石火の如くにその喉へ飛ばしたお園の拳は、逆十字にぐつと絞つた。苦悶の呻きに和して、がたぐたと靴が鳴る。

「あッほ、ほ、ほ」。お園は冷たい笑聲の下に其の手を放した、女は投出されたやうに、撲地と仰向に仆れた。

一八

此の時二階の一室では、友麿と「目の恐ろしい男」との間に、手詰の談判が開かれて、今しも激しく争ひつゝある那裡だつた。支那人の鄭文元も同席してゐた。

「知らん？ 確かに知らんといふのか、可しッ、それならば僕からあらためて訊ねるとがある」。

友麿は懸けてゐた大玉の黒眼鏡を脱して、徐かに卓上に置いて、儼乎と相手の男を睨みつけた。鄭の友人宋倪田と稱して面會もし、その舉動から言語までハイチャンらしく粧つてゐたのが、卒かに假面をぬいで、生粹の日本人に早變りして、鋭い調子で斬込んで來たので「目の恐ろしい男」は喫驚したやうに椅子から立揚つたが

「ひい、君はジャバニユースだね、氏名國籍を詐つて此の倶楽部に入込むとは不都合な奴だ、何だ、何を尋ねたいのか」。

相變らず流暢自在な日本語だ、腹の中は知らず表面は狼狽へた體もなく、再びどかりと椅子に著いて、腕又しながら例の陰險な眼を此方へ注いだ。似たと思つたが倅こそ昨宵の奴だなど顔を讀んでるものらしい。

「僕が何であらうと那麽事は問題外だ併し聞きたいといふなら名乗て遣らう。僕は英友鷹といふ一書生だッ」投げつけるやうに叫んでから「汝は僕の顔に見覺がある筈、昨晚の事を忘れはしまッ」。「ええ、知らん」相手は空嘯く。「慌けるなよ、おい、汝は賭博の場所でお鶴とかいふ變な女を道具に使つてからに、不正の手段にかけて、此の鄭君から根こそぎに金を捲揚げたではないか、我邦では賭博すら既に禁せられてゐる、然るに汝は其上を行つて、詐欺的行爲で人を陥れる、先づそれからして既に法律上の罪人だ」。

喝破する傍から、鄭は間の抜けた聲で

「爾です、爾です、それ違ひない、金返す宜しい」と撥を合す。「喧ましいぞ」相手は沈著きはらつて、カイゼル鬚を燃りながら「敗けたのが口惜しいのか、口惜しいからそんな出鱈目な口實を捏ね上げて、俺を脅迫しようとするのか、若いぞ青二才、俺を尋常の毛唐と思つたら大きな間違だ、箱庭のやうな日本の空気を十年餘りも吐いたり呑んだりして、隅から隅、裏から裏まで見抜いてゐるスフヒングスだ、お前門の手に乗るやうな男ぢやない、拙な真似をすると、反對に法律の罪人に

して遣るぞ」。

凄いことを言ふ、流石に體度が惡黨らしい。友鷹は乾笑つた。

「生意氣なことを言ふな、日本には未だ不正の惡漢を保護する法律はない、そればかりなら未だしもだが、汝はその女と共に謀になつて、鄭君に毒酒を強ひつけて、幾んど知覺を失ふまでに酔ひ潰して置いて、階下の室へ連込んだ上、胴衣ズボンの隠囊までも一々漁つてゐたではないか」「え、ッ」。「惘然と顔色を變へた」。「其の時に盗つた銀行手形を溫柔しく返させて、無事に納めたいと思ふ僕の好意を仇に、何處までも白を切るなら最早止むを得んことだ、日本の警察官を煩はして、斷乎たる制裁を加へるが、それでも猶知らんと言ふ心算か、さ、甚麼だッ」。

友鷹は右の拳でどんと卓子を敲いた、眉は昂り眼は輝く。

「だ、だ、誰が、そ、そんなことを言つた、假にも此の倶楽部の幹事、幹事の職にある俺を、ど、泥坊呼はりするからには、確實の證據があるだらう、さ、その證據を見せろ」。「威丈高に脰を張る」。

「僕が證人だ、其の現場の扉の鍵穴から見えてゐたのを知らんか」「え、ッ、鍵穴から!」。「どきりとした」。

次第に聲が高くなるので、形勢不穩と見て取つてか、倶楽部のボーイが例の玄關番の大漢子と二人の印度人と呼んで来て、戸の外から室内を覗いてゐる。此のボーイは前夜友鷹と食堂で顔馴染にた

つたデョッコーといふ男で、友鷹は與し易い奴だと目をつけてゐた所から、此處へ來ると鄭文元に吹込で呼寄せて貰ひ、若干か祝儀を掴ませて置いて、目の恐ろしい男の事を聞くと、國籍や本名は不明だが、此の俱樂部の幹事で、日本通だといふのを看板に、自ら櫻富士男と名乗つてゐる此處の大立物だと話した。で、デョッコーに手引を頼んで面會を申入れると、鄭の友人だとあるので別に怪しむ色もなく、直と此の室へ二人を通して遇つたのであつた。こんな關係がある爲にデョッコーは、自分の失策から富士男に迷惑が懸つては大變だと心配して、急いで仲間を呼んで來たものらしかつた。

と、一方には源吉が何の間にか階子段を上つて、二階の廊下先に隠れて、遠目に此の有様を覗めてゐた。

ボーイの一團は、卒といふ場合に室内へ飛出んで、友鷹と鄭とを袋叩きにして遣らうといふ意氣込だつた。源吉は又た源吉で、彼奴們に指一本でも著けさせて堪るものか、愈々といふ間際には、俺が矢面に立つて、死ぬまでも奮闘ると手拭にきりきり〜と捻をかけて、目を放さず敵の動靜を窺つてゐたのだ。

室内の風雲漸く急。

「アツハツハ、おい、戯談も好い加減にしるよ、俺が人の衣服を探して、金や手形を盗るやうな男か、まア人格の如何を見てから、那麼戯談を言つた方が可からう、ハツハツハ、俺は紳士だよ、お

い、ハツハツハ。

名だけ日本人の富士男は哄笑をして

「では昨夜窓から飛下りて逃げたのは、君だつたな、その室には此の鄭さんが寝てゐたから、紛失したとすれば其時だ、その犯跡を暗ます爲に罪を俺に託けるとは酷いぢやないか、ハツハツハ。更に笑つた、笑つたかと思ふ刹那、活と眼を瞞らして、虎の吼えるやうに

「泥坊は汝だツ！無禮者奴ツ！」

と、叫ぶ下から張固めた右の拳を側面から不意に飛して、油断してゐた友鷹の左の頬を力任せに撲たうとした、が、友鷹が素捷く身を引いたので、拳はすつと鼻尖を流れて、隣の椅子に凭れてゐた鄭の首頸をがんと打つた。

「痛いッ」。鄭は首を抱へて飛揚つた。

此の一撃が破裂の信號！四人は扉を蹴つてどゞと躍り込んだ。

と見た源吉は驚破こそと捻鉢巻、腹掛一つの戦闘準備をして、いきなり其の室へ飛入つた。

其時お園は階中で朝鮮婦人を逃して遣つた時だつた。氣絶した女を其儘に廊下へ出て來ると、恰度頭の上でどか〜と板敷を踏鳴らす足音がして、叫聲も臙ろげに交つて聞えた。偕こそと思ふと最う沈乎としては居られない。急いで先刻見て置いた階子段を上つて、その物音を棊に應接室の前へ駆

附けて、外から覗いて見ると、今が大格闘の那裡である。

友麿は一人の外人と取組んで、下手に壓かれ、その足を印度人が靴で蹴つてゐた。源吉は玄關番の大漢子と二人を相手に、椅子を振上げて打合つてゐた。お園は外人の右手に握られた短銃を見てひやりとした、銃口は今し友麿の喉へ直下に向いてゐるのである。

危機只一縷！

お園は猛然として其の渦紋の中に躍り込んだ、絹の如き軟肌に燃える血の白蛇の鱗は、きりりと裂けた眼に輝いて、香風一陣、吹き煽る薄桃色の襦袢の袖が、臂の邊から花のやうに閃いた。

手は真先に玄關番の露人に觸れた、只觸れたと見えた、と伝といつて胸を抑へて、後へ踏けて、どしりと、壁に突當つて、其儘大きな體を仆して了つた。確かに心臓へ雁下の當身を吃つたのだ。

それにも眼もくれず、直ちに友麿の側へ駈寄つた、その裏かな織腕が「目の恐ろしい男」の肩に懸ると、友麿へ馬乗になつた男の體はぐつと後に傾いて「う、う、うん」と呻き立てた、その際に友麿はいさなり胸を突いて跳起きた。

お園は先づ袖車の技にかけて、後から首を絞つけて置いて其の儘ばたりと仰向に仆した。姿勢は忽ち上四方に變つて、相手を上より抑へつけ、側面から飛躡る一人の印度人を釣込んで、其の臍の邊へとんと明星の殺を吃はせると、だゞと後退つて窓の下に尻を撞いた。

組敷かれた男は、剣返さうと力を絞つた。が、さながら針に縫ひ止められた蝶のやうに、現在の位置から一寸動くことが能きなかつた。右の肩を擡げるとその肩が痛む、左の脛を張らうとすれば其の脛がずんと痺れる。無念！切齒の下から黄いろい息。

斯くしてお園は室内を見廻した。

残るボーイは源吉に打惱まされて室外に逃げて了つた。源吉はピリケン面になつて袒裼の儘戸口に仁王立、来る者は只一挫ぎと椅子を真向に振翳してゐる。

「若さま、若さま」お園は急しく呼んで「盗られた物は取戻しましたか」「いや、か、か、返さん、ご、ご、剛情な奴だ、し、仕方がない、け、け、警察だッ」。友麿はハツハツと呼吸を促しくして、覆れた卓子へ體を靠せかけて、目を險しくしつゝ答へた。

「宜しうごちやいます」。お園は頷いて

「これ、盗つた金券を返せ、返さぬと承知せぬぞ」。信と下を睨みつけた。

「何をッ、生意氣なッ」。富士男は組敷かれたなりに、右の手を纒かに動かして、握つた拳銃を上に向けた。

ズドン?! 消魂ましい響は屋を揺がした、お園の胸から滾と立つ煙。

友麿はハツと思つた。

「雀ではないだよ、莫迦ッ。」

撃たれた筈のお園は、その煙の中で冷笑つた。何時の間にか姿勢は轉じて、裸絞の馬乗になつてゐた。

「さ、返すか、返さないか、返さなければ殺して遣るぞッ。」

殺氣奔る眸を、富士額のほつれ毛の下に、銀鈴の如くきらめかして、十字に又んだ腕にぎいぐいと喉を絞る。

「うん、く、苦しい、た、た、助けて呉れ、お、お願ひだ、く、苦しい。」

下では顔を顰めて、ばた／＼と腕く。

「そんだら返すか」「返すよ、伝」「さア、出せ、何處にある」「チヨ、胴衣だ、か、袖囊だ。」

お園は手を弛めて友鷹を顧みた。友鷹は突と側へ寄つて、胴衣をかき探すと、果して其の手形が現はれた。

「む、是だ、ちい、鄭君」。呼ぶと卓子の蔭から「おう」と間の抜けた返辭をして鄭が出て來た。顔の色は灰のやう、猶且がた／＼と顫えてゐる。

「君、是だから」「あ、是あります、是あります、有難う有難う」。雀躍する。

「跡に構はず、早く歸り玉へ、早くせんと不可んど」。友鷹は促した。

「多謝」。鄭はふら／＼と室を出て去つた。

「さア、最う用が濟んだ、園、引揚げよう」「助けるのかね、命冥加な奴だな、これ、こんな悪い事は止さつせえよ、是に戀りたら精神を入れ替へての、今までの罪滅しに潔白な人間になんねえと、今度こそは眞箇に殺されて了うだよ、覺えてゐる、これ」。

富士男は答へなかつた。手を放されても起揚る元氣がない、頽然と臥てゐた。

「ちよつこら、お待ち遊ばせ」。

お園は室内に僵れてゐた印度人と露人とを曳起して、一々誘ひの活を入れた。

暢氣？ 大膽？ 不可解の女？

一九

此の騷擾に當夜遊びに來てゐた俱樂部員や、その相手の女などが喫驚して、いづれも廊下先へ駈出して來て、睜々した目で様子を窺つてゐたが、事情が不明なものと日本人の見脈が猛烈なものとで、誰一人手を出す者もなく、唯不得要領に囁き合ふのみであつた。

その間を三人は悠々と引揚げた。さうして敏捷に自動車に飛乗つた。

友鷹は來た時と同様自ら運轉手の任に就いた。獅子の吼ゆるやうな警笛を凱旋の喇叭がはりに勇

ましく唸らせて、源吉が颯と開いた鐵扉の門を奔り出ようとする時、待てと叫んで駈出して来た女がある。回眸るとそれはお鶴さんと呼ぶ混血兒の美人であつた。

階下の室でお園に喉を絞られて、一旦氣絶したのが、間もなくボーイの介抱で正氣づいた。二階の騒ぎが鎮まつた頃は、お園の所在を探すべく、血眼になつて館内を躍り狂つた時である。と、玄關に出て来て、ひよいと認めたのが、其の自動車に乗つた朝鮮婦人の姿で、お園はそれを隠すやうに自分の膝の上に突俯させてゐた。見ると口惜しさが赫と込めて、二人とも曳摺下して蹴つて遣らねば腹が癒えないやうな氣がした。幾んど狂的に泣聲を投げて、獸の如くに車に飛付いた。

「下りろッ、悪魔!」。「何爲やがるンでえ、すべらべつちよ奴、毆殺すぞッ!」。

お鶴が無圖とお園の袂を掴む刹那、赫然と車の上に跳り込んだ源吉が、びしやりと其の横面を撲りつけた。でも必死、掴んだ袂を放さなかつた。

「寧そのと生擒つて了へ」。友磨は笑つて車の足掻を弛めた。

同時に車寄から、飛降りた男がある。

「覚えてゐたか、奴!」。

脱兎の勢ひで車の前面を遮つた、その手から鋭い洋刀のやうな光が跳つた。凄い目、カイゼル鬚、確かに富士男だ。

「未練な奴だなア、操殺すぞッ」。

友磨はさり／＼と把手を絞つた。富士男の體は筋斗打つて足を空にばたりと倒れた。友磨を目蒐けて斬りつけようとする所を、全速力の車に突飛ばされて及ば倒まに我手を傷けた。

怪魔の影は夜風の一道の白煙を曳いて彗星の如く明石町の河岸を疾走した。

源吉は小腕に緊しくお鶴を抱いてゐた。摺抜けようと腕き立てつゝ叫ぶのを

「喧ましいやい、黙つてろッ」。平手で顔をばかり／＼と撲しつけた。

新橋から芝へ入つた頃は、流石に度胸を据ゑたと見えて、お鶴は大きな聲も立てず、狂ひ疲れた體を源吉の脇に委ねて、何が悲しいのか潜々と泣いてゐた。

友磨は途中でそれと思ひついたものらしく、櫻田本郷町の通を一直線に芝公園の中へ乗著けた。懸て増上寺前に來ると、びたりと車を停めて一同を降した。

「お鶴さん、とか云つたね、お前は……なア心配するとはない、決してお前の身禮に危害を加へるやうな、そんな亂暴などはせんから、安心して此方へ來て呉れ玉へ、少し話したいことがあるのだ、園も一緒に來い、源吉、汝は此處で車の番をしろ、若し巡查でもやつて來て、訝しいと思つて尋ねる様などがあつたら、正直に身分を名乗つて公園へ散歩に來たと云へ」。
吩咐けて置いて、三人を松林の中へ連込んだ。露に濕つたベンチが、葉越の月に空しく横たはりつ

俄かに言を杜切らして俯目になつた。

「甚麽したですか」「はい、あの、夏の旅行に瑞西に参りましたんですが、如何した事情でせうか、アルプス山の麓のホテルで、人に、こ、こ、殺されました」。

お鶴は聲を潤んで絲の如に縋かつた。

「え、殺されたツ!?」友麿は啣へた紙巻を口から拵ぐやうに掴み取つて「だ、誰に? 何者です、殺した奴はツ」「解りません、皆無夢です」「ふむ、太息で承取つて「奇ですなア、そして貴女の名前は矢張お鶴さんといふのが本名ですかな」「いゝえ、私には父が命けて呉れました眞實の名があります、ナタリー、ドラ、ファイユでありますの」「難かしいですなア、やつぱりお鶴さんの方が佳いやうだ」。

お園も沈桂林も硬くなつて聽いてゐた。

端緒は十分に曳出した、最う夫以上の事は此方の手加減一つで、どんな秘密でも聞得られるといふものだ。友麿はこんな話にかけては甚だ不得手で、兎角に書生流になりたがる、それをば稜を立てさせないと努めて、一言いふにも人の知らぬ深い注意を拂つた。でも女の方は存外の淡泊で、此方で秘密だらうと思つてゐることも左程に氣には止めぬらしく、寧ろ喋舌過ぎると思はるゝくらゐに、露骨に身上を打明けた。

ナタリー、ドラ、ファイユでは日本人同士の交際に不都合だといふので、母のお雪は別にお鶴と名を命けた。十七の齡まで神戸で育つて、それから横濱へ来て、佛國へ渡航した。五年目で歸朝した時に一人の若い男を同行した、それは父の親族だといふので、彼國へ行つてから始めて知己になつたビエール、ラベレイと呼ぶ技師で、興行師の様な者に傭はれ、モンマルトル——巴里の北にある淺草公園といつたやうな所——あたりで、モンターギユリユツシュと稱ふる木馬館のやうな娯樂場を持つてゐた男だ。お鶴は此のラベレイにいろいろと親切にされたのが纏になつて、先から言寄れた儘遂に割ない仲になつた。で、母の承諾を得て公けに結婚すべく、一緒に日本へ來たのであるが、母は索性が氣に入らないのか、但しは其の人品が好ましくなかつたのか、體好く拒絶した。ラベレイは怒つてお鶴を上海へ連出して、一年許の間競馬や富籤の才取の様などをしてゐた。其中に母のお雪が神戸で歿くなつたので直ぐ駈附けて來てお鶴に十數萬圓の遺産を相続させた、その金も賭博や女狂ひに叩き込んで、二年と経たぬ間に綺麗に摺つて了つた。マグネツト俱樂部といふのは其跡で拵へた一種の事業で、神戸から横濱東京のあらゆる道樂者を一網にすくひ上げてゐる。櫻富士男といふ目の恐ろしい男がそれだ。

お鶴は是だけの事實を語つた、が、二人の心を縛つた戀其物が今も猶、昔のまゝの美しい色彩をたもつてゐるか其麼か、現在の自分は男に對してどんな氣分であるか、其の邊の消息は更に洩らさな

つた、併し男の弱點は奥まで看抜いてゐるらしく、時々不平染みた意味をほのめかす語氣だけは、十分に汲み取ることができた。少くも愛情の根柢がぐらつてゐるといふとは、友麿に察しられた。

俱樂部の内情は聞かんでも好い、けれども一つ、是非確めて置かねばならぬ事がある。恐ろしい目！それだ。

お鶴の答は極めて單純であつた、そして無邪氣に笑つた。

「何でもないの、催眠術よ、オホ、」。「えッ、催眠術!? 道理でッ」。

友麿はさきくりとして膝を打つた。

二〇

英家では前夜の強盜騒ぎから、急に思ひ出したかのやうに、不寝の番を設けて夜巡りを仕始めた。

車夫馬丁書生などが組を分けて半夜交代、例の甚五右衛門が特に主人護衛とあつて、昨日から屋敷へ詰切つた儘、夜間は一睡もせず、武士の矢並つくりの梓弓の、曲つた腰を突張らせながら、六尺棒をコトン〜と撞鳴らして、夜警隊の指揮監督をしてゐる。老人の冷水、止せばいゝにと若い者は苦り切つた。

恰かも午前一時といふ頃合である、かち〜と拍子木を打つ書生の後に跟いて、甚五右衛門はよくした足を裏手の非常門際に運んだ。と、書生はひよいと立停つて「おやア」と聲を揚げた。

「香取さん、香取さん、へ、へ、變ですよ、變ですよ、門が開いてゐます、門が……ちよ、ちよいと御覽なさい」。

書生は慌てた調子で訥るやうに言つた、何と思つてか、急にわな〜と頓え出して足の波動が、右手に翳した提灯にまで傳はつた。

甚五右衛門は黙つてその灯の下から差覗いた。いかさま非常門の戸が一寸許開いてゐる、鍵も外れた儘だ。

「さ、奇怪ですな、な、何でせう」。

書生は懼々と老人の顔を瞻つた、或ひは前宵の賊の同類が復讐に來たのではあるまいか、と疑ひ危むやうな色が、十分にその目に露れた。

「さればさの」。老人は少頃考へてゐたが、「大方日の暮方に此門を閉めるのを、失念したものと見えるわ、誰だか知らんが不注意などだ」と何氣なしに言つた。「いえ、僕が閉めたんですよ、僕ですよ、確かに閉めたんで、そんな譯はないです、失敬なッ」。書生は躍起となつた。「お、爾か、では誰かが内から出て、歸りしなに閉めるのを忘れたのかな、いや賊などの仕業ではない、最う屋敷の隅

から隅まで見巡つたが、何の異状もないからには、不審するにも及ぶまい、時に今夜は何時かの、なに、先刻一時を打つた？すると九つ半頃だな。

老人は恚う言つて傍の大銀杏を仰見げた、その梢には薄い銀河が流れてゐた。

「お前はな、先に引揚げて呉れ、私は茶寮の方を一寸見廻つて行くから……」。爾ですか、提灯は其塵しまし。「要らん、左様な物があると却つて不自由ぢや、持つて行かつしやれ」。「あんな負惜みを行つてるよ、ぢやア失敬ッ」。捨臺詞を殘して書生は立去つた。一人になると流石に氣怯れがすると見えて、忙し拍子木を敲きつけるのが、木立の闇を揺がして聞えた。

甚五右衛門は頷いて、茶室の方へのそり〜と足を運んだ。

友麿は芝の公園からナタリのお鶴と一緒に御成門外で出會つた夜稼の車へ乗せて、築地迄送り届けることにした。

お鶴に向つては眞心を砕いていろ〜と忠告を試みた。それは日本の警察に睨まれぬ先に、早くそんな罪な商賣を廢して、正しい世渡をするやうに、情郎のラベレイを説き懲めては如何か、秘密は露顯の第一歩なりとある如く、早晚マグネット俱樂部の底が割れて、劫晒しをする様になつたら、亡き父の名を辱しむるようになるではないか、日本人の血の體の半に享けたものなら、同胞の體面といふ

とも考へて欲しい、といふのであつた。

お鶴には幾分か反省を促す薬になつたか、或ひは空耳に聞流されたか、その場合には取立てゝいふ程の手徹もなかつたやうである。只有難う〜と何遍も繰回して別れた、それが眞から出た有難うであつたらしい。

四人連で自動車を麻布の斧町まで飛ばして、友麿とお園は下りた。源吉は朝鮮婦人を伴つて車を右へ廻した。

此の自動車は斧町の佐伯伯爵家——その令嬢と友麿と婚約のある——から源吉が嘘八百で貸りて來た物である、友麿の服装や何かも、源吉が近所の損料屋から算段して來たので、明晩返すといふ約束である。

友麿とお園は裏手の非常門から這入つて、無難に茶寮へ戻つた、時間は恰ど午前の二時卅分。出る時に灯は消して置いた、お園は座敷を手探りに籠雪洞の在る所へ行つて、袂から燐子を出した。友麿も爪先さぐりに跡に跟いて、其處に突立つた。

ぱつと火を摺つて、雪洞に移さうとする途端、お園は「あらッ」と叫んで、いきなり其火を吹燼した。

「あら、甚塵した」。友麿は闇の中から聲を懸けた。

燐寸の光線にほつと映つたのが、甚五右衛門の姿であつた。彼は扇子を袴の膝に突立て、少し反身に茶室の真中に儼然と坐つてゐたが、その窪みか、つた眼の炯々と底光して、星の如く小間い所に燃えて見えた時は、さしものお園も恟乎として、不意に猛獣に出會つたやうな心地がした。

黙つて隠れてくれ、ばよいのに、友麿は同じ驚きに釣込まれて、甚麽したくと聲を立てる。それがお園に取つて甚だ迷惑で、氣の利かない人だと怨まれました。

最う仕方がない、見られた上はと度胸を据えて、無言に又た燐寸を拵つた。いつもの如くに沈著いたつもりであつたが、その火が籠雪洞に移るまでは、手先の顫えるのが自分にも解つた。

「おう、爺や！爺やないか」。

友麿は灯を透して其の影を見て、今更のやうに喫驚してゐる。お園は齒痒く思つて、何にも被仰らぬやうにと目で知らせたが、更に通じなかつた。

「甚麽した、今頃？何だつて這屋夜半に出て来たんだ、寝ておればいゝに」。

書生流にぼんぼんやつつける。辯疏は恚うと胸の中で算段してゐたお園は、落膽するほど打壞されて了つた。

「こりや、園、それへ出ろ」。

友麿が何と云つても返辭一つしなかつた甚五右衛門は、怖い目で孫を睨みながら、扇子を擧げて前に招いだ。

に招いだ。

「はい」お園は三指突いた。「お前は不肖甚五右衛門の孫ではあれど、先祖を正せば徳川四郎義季十六代の末裔たる左近太夫隆政、後年越前家に仕へる身とはなつたれども、流れは同じ三河武士ぢやいかに汚ららしい明治の教育を受たからと申して、武門の血統を引であるお前なら、よもや士の道は忘れはせまい、忘れたとあるならば、そりや精神が腐つたのぢや、人間として數へるとの能きない穢多非人ぢや、如何だ、忘れはせまいのう」。「はい、忘れはいたしません、幼少の時から仰せ聞かされました武士の道は、肝に鑄りつけて、よう存じて居りやする」。

お園は神妙に答へた、友麿は芝居の臺詞でも聞くゝな氣持で、目を張りながら二人を瞻つてゐた。「む、さもある筈ぢや」甚右五衛門は鷹揚に頷いて「よし、然らば最う何事も申し聞かせるには及ばぬ、これ、園ッ」と一際聲を勵まして「主君への御申譯、さ、此場を去らす生害いたせッ！」。さり／＼と霜なす眉が昂ると共に、膝の下から取出した一振の懐劍、それを憂然とお園の前に投出した。

「えッ、じ、じ、自害をさせるんだつて、あいつ、じ、じ、爺や、な、な、何だつて、そ、そんな亂暴などを吩咐けるんだ、おい、爺やッ」。

友麿は顔色を變へて、急しく前へ膝行出た。幾んど句を成さぬまでに聲が訥る。

「あいや、貴君の關り合つた儀ではござらん、お控へなされい。」だつて、だつて、そ、そいつは……」

お園は手を突いたなりに俯いて、瞬き一つ爲なかつた。

一一一

二人に別れてから源吉は、朝鮮の女學生吳桂林を自分の住居へ連込んだ。

借物の自動車は佐伯伯爵の邸まで乗つけて、門番を叩き起して引渡したし、損料屋の方は、明日になつてからお園が衣類を一纏めにして、夫となく使に持たせて届けて寄越す約束であるし、金は當座の手當に損料を含めて、三十圓だけ友麿が心附をして呉れたし、最う大體は鼻がついた、残る仕事は此の朝鮮婦人の世話をして、相應の學校へ入れて遣るだけのことだ。

源吉は重荷を下したやうな爽快した氣分になつて、自分の家に戻つた。

「さア来た、此處だ、此處が俺の御殿よ、アハ、蠓蝶敷みてえな家だが、お前の國のやうに不潔ぢやねえからな、おい、豚小屋と間違えねえやうに頼むせ、おつと危ねえ、其處は溝だ、氣を注げて呉んな。」

青山の墓地に近い霞町の狭い通に、軒の低い平家建、表の方は小さな店構へになつて、女房の内

職に駄菓子か何かを售つてゐる。裏手は大きな栗の樹を劃に直と草原つき、涼しい青風が三聯隊の喇叭の音を吹き送るといふ田舎染みた住居であつた。

源吉は店の戸をどんと叩いて

「あゝ、お峰、開けて呉んな、今戻つたよ、濟まねえが起きて呉れ。」

その濟まねえには意味があつた、けれども吳桂林にはそれを讀む力がなかつた、只小さな眼をばちばちさせて、佯し氣に更行く月を仰視げてゐた。

「あゝよ、今開けるよ、何だねえ、蒼蠅い、お待ちツてばさ。」

いくら呼んでも返辭が無かつたのが、源吉が熱れて下駄を扉へ叩きつけてから、稍とのとに這麼御挨拶があつた。調子の迫つた甲高な聲だが、併し何となく婀娜つぽく聞えた。

聽てがらりと戸が開いた、微開い洋燈の光が店に吊した草鞋の腹へ流れた。

「さ、お入り。女は中に立つてゐる。濟まねえなア、お峯、一寸勝手を片付けて呉れ、お客があるんだから。後を振向いて「這入んねえ」と臆を動かした。「え、お客？」女房は表へ顔を出して「何誰、今時分」。月明りに覗いて見て「あや、お巡查さん？」と驚いた。「アハ、何を言つてるんだ、他の姐さんだよ。」「えッ、姐さん!?へえ!」解せない様子で、茫然と突立つた儘考へてゐた。「ま、退けて呉れ」。源吉はそれを突退ける様にして、吳の手を把つてずいと沓脱の所へ這入つて「其處で

履物を取るんだ、いゝかね、さ、上つた」。

吳桂林はちづ／＼と勝手へ通つた。吉は洋燈の芯を掻立て、其道を片附けてから、長火鉢の傍へ綿の潰れた座蒲團を直して吳を坐らせた、吳は變な風に頼した膝の一隻をその端へ載せた。

其處へ女房のお蜂が来た。二十五六の小柄な體つきで、蒼味が、つた顔の眼の險しい、鬚に結つた髪に縮れ癖のある、眉毛の薄い、打見からして意地の悪さうな相貌ではあるが、役者の紋を崩したらしい中形の古浴衣に、桃鷲色メリンスの扱帯を締めてゐる其の嗜好の工合が、どうやら尋常者らしくない舉止だつた。

態と隅の方に行つて、片膝を立て、じろ／＼と吳の姿を瞻るのが、睨むやうな目づかひである。

「あゝ、うんざりしちまつた、おい、お峰、酒は無かつたかい、冷でいゝ、一杯吳んな」と云つてから「おい、蚊帳を外しな、狭つ苦せえちやねえか」。

源吉は火鉢の横へ胡坐をかいて、びたりびたりと蚊を叩き潰した。

「ヘン」お峯はやけにぐいと立つて、蚊帳の釣手をいきなり曳張つた、糸はぶつりと切れて手の下に青波が蜿つた。「どなた？此のお方は……どちらのお嬢さまなの」。

少頃睨みをくれてからお蜂は劍尖を良人の方に向けた。天候險惡、叢立ち黒雲の一角にそろそろと稻妻。

「是か、大事な預り物だ、いろんな話があるんだけども、マア明日のとししようや、何しろ朽然と草臥れつちまつたから、口を听くのも可厭になつた、蟲抑へに一杯引かぶつて、俺は直と寝るから、エーと此の姐さんを何だ、成るツたけ清潔な蒲團にな、それから新らせえ蚊帳もあつた筈だが出すのは面倒だらうから、今夜だけ一つ蚊帳に這入つて貰ひねえな、頼むせ、いゝか」。

源吉は無頓著に言つて、骨の抜けた團扇をばたばたさせながら、備さうに大な欠伸をした。最う賁を喫ひ元氣もない。

「ヘン、頼むもよく出来た、清潔なものも汚ないのも、蒲團は二枚ツきやありやアしないぢやないか、そして新しい蚊ツてえの何處に在るんだい、くだらない見得をお張りでないよ」。

お峯はつんとした果して雷鳴、風颯然として来るだ。

「何を言つてるんだ、莫迦ッ」。「莫迦でなけりや我慢をしてゐやアしないよ、莫迦なればこそお前さんの様なお利己者を後生大事に守つて、莫迦にされ／＼實を盡してるぢやないか、尋常の人間なら今頃は疾に御免を蒙つてる時分だよ、どツちが安本丹だが、鼻の下を測量するメートルでも借りて来て、試しにつもつて御覽な、勝手な真似をして女房を困らせるのがお利巧かい、ちよいと浮氣はお米の代用にやアなりやアしないよ、お巫山戯も好い加減におしなねえ」。

愈々風雨だ、源吉は呆れて

「おい、くだらねえ嫌味をいふなよ、手前何か履違えてるんだな」「下足番のない錢湯ぢやアございません、はい、嘸お勞れで居せられませうよ、私なんぞとお口をお聞き遊ばさるのもお可厭でございませうよ、一つ蚊帳に寝るまで聞きやア最う澤山だ、どうぞ御勝手に睡しく御就寝遊ばせ、私は此處で不寝の番をいたします、はい」「仕様のない奴だな、異う皮肉つてばかり居やアがつて、手前此の姐さんを何だと思つてるんだ」「弛んだ眼を昂げた」「何とも思つてやしない、大事な預り物だと言つたぢやないか、そんなに大事な物なら自分の働きて他に聞つときやアい、のに、何故お米もない國へ連れて來たんだよ、わ、私に、こ、こんな苦勞をさせといて、何處の産婆だか看護婦だかは知らないが、變てけれんなハイカラを面當に曳摺込むなんて、あ、餘りだよ、お前さんは……些とは私の身にも……アツ口惜しいツ」。

泣聲になつて喚く下から、いきなり側に在た挽物細工の貰入を投げつけた、潑と立つ黄煙に源吉は飛揚つて咽返つた。

「ゴホン、ゴホン、き、き、狂人奴ツ、な、何を爲やアがる、ゴホン、ゴホン」。「き、狂人にもなるぢやないかツ」お峯は己れの狂的發作に強い弾力がついたかのやう、勃然と起揚つて、喫驚してゐる吳桂林の髪をぐつと執つた。「おい、て、て、手前は何處から來た、何處から來やがつたんだよいくら私を追ん出して跡釜へ据らうと思つたつてな、そんな圖迂々々しい眞似をさして置くぢや

ないから、顔でも洗つて出直しておいで、エツ、此の阿婆摺奴、よくも家の吉さんを魅して、ぬくと押掛けて來られたね」。

驚破こそ落雷！ 吳は劈かれた朽木のやうに突伏せられた、その領首を炎の如き熱い息がすうくと煽る。

「痛ッ、痛ッ」堪りかねて泣出した。

一一一

一方にこんな喜劇染みた出來事が起つてる那裡に、英家の茶寮には舊式な切腹騒ぎが持上つてゐた。

「畏まりやした」黙つて手を支いてゐたお園は、決然と顔を擡げて「何事も申さぬと仰せあるなら、私しとても何にも申し上げは致しませぬ、御意の通り潔よく生害いたします」

何の間に解いたか、紅なし友禪の腰帶できりりと兩膝を縛つてから、突と前にある懐劍を把上げて押戴いた。

「あッ！」友鷹は目を圓くした。

「む、天晴よい覺悟、美事にやつてのきやうぞ」甚五右衛門は微笑んだ。

「若さま、御免、祖父さま、御介錯ッ」。お園は二人に一禮してから、右手にすつと鞘を拂つた。白光一閃、あはや其喉へ。

「おい、待てッ」。友麿は叫んだ、飛突いたのは幾んど夢中、気が注いで見ると後ろからお園を翼縮にして、右の手は刃物を持つた腕を固く握り、左の手は肩を越して乳房の邊を轟と壓迫してゐた。促しく喘ひ息で眞白な首頸に髪の毛が揺ぐ。

「是はしたり、若様には何故孫の生害をお止め召さる、無用のお手出はお控なされたが宜しからう」。爺やは苦い顔をして睨みつけた。

「だッて、だッて、ら、ら、亂暴だよ、さ、さ、殘忍だ、つ、つ、詰腹を切らせるの、喉を突かせるなんてえことは、そ、そりやアお前、野蠻だ暗黒時代の風習だらうぢやないか、二十世紀の今日、そ、そんな非文明的な眞似をされて、た、堪るものぢやない、お前は一體貴重なる人の生命を何だと思つてるんだ、ば、ば、莫迦なッ」。

友麿は必死となつて争つた、その面へ爺やは冷かな目をくれて

「あいや、拙者が勝手に致すことに、他人のお差圖は御無用でござる、耻を知るは義の端なり、生死只義の一字に繋る、是れ武士道の常でござるわ、可愛い孫ぢやけれども道に誤つた不所存者、義の前には涙を呑んで殺さねばならぬ、拙者の胸中は貴公如き弱輩の知る所ではない妨げせずと手を

凶度



引きなされッ」。

滑稽だなど、笑つてゐられる場合でない。友麿は更に一際興奮した若い血潮の唸を、その禿頭へ浴せかけた。

「頑冥、實に度し難い奴だな、汝は……無暗に人を脅迫して自殺をさせるのが武士道か、爾も祖父だといふ尊屬親の威光を濫用して、孫の命を奪ふなんて、残忍兇暴鬼の様な振舞だ、お園は如何した、何の罪があつて死ななければならぬのだ若し罪があるとすれば、それは僕の責任で、お園に何等の過失も落度もありはせんのだ、今日、汝、法律で人を罰するにも、第一審から第二、第三、上告再審まで経るだけの権利が與へられてゐるぞ、夫程人權の尊重されてゐる世の中に、一言半句その罪状を取調べるでもなく、理由を示すでもなく、藪から棒に死ねと宣告する奴も奴、はい死に生すと服従するお園もお園だ、そんな馬鹿者が家の舊臣にゐるかと思ふと、僕ア情なくなる、いや、何と言つても僕は不承知だ、責むべき廉があるなら僕を責めろ、何だ、弱い者いぢめばかりを爲やがつて……耻を知るのが武士道なら、おい、爺や、汝から先切腹しろ、チョツ賣残りの南瓜奴！」

此の刹那の手も舌も實際インスピレーションに練られた、緊張し切つた意氣のさながら天を衝くかのやう、甚五右衛門の喉首へ咬著いても、此の可憐な女を救はずには置かぬといふ崇高い同情が、渾

身の血を絞つたのである。

「では貴君様は、孫の自害をお止め下されて、その料を御自身にお引受けくださらうといふ御意で御座るかな」。

甚五右衛門は別に争ひはしなかつた、争ふべき理窟も古い頭腦相應に持つてゐたのであらうが、何かそれを避けて他の方面から念を推した。

「勿論だ、多分汝は今夜園と一緒に外出したのを見て、立腹したのであらうが、出たのは悪い意味ではない、ないどころか、大いに悦んで貰はんければならぬ程の善い功德をして來たんだ、出んければ汝の所謂武士道が立たぬ所から、僕は非常に煩悶して、園に事情を訴へてからに、拒絶されたのを無理に承諾して貰つたんだ、園は自分の職責は十分に盡してゐる、夫ばかりでない、僕を助けて實に花々しい働きをして來たぞ、元來ならば能くやつたと讃めんけりやならんのに、唐突腹を切れる喉を突けのと迫る奴があるか」。

友麿は未だ怒が鎮み切らなかつた。恚く辯護するうちにも、目を険しくして、力を籠めて掌に何遍か自分の膝を打つた。

「ホ、ウ、善い功德をしたと仰せらるゝと、そりや如何なる儀で御座るな」。「何だ今時分、訊くのは遅いよ」。

前夜來の話を要點だけ摘んで聞かせた、自身が親しく其の線内に飛込んで引搔廻した事實を、若い者の勇ましい舌尖で有の儘に語るのであるから、率直明快、眼の前に活きて躍るやうであつた。

甚五右衛門は固く拳を握りつめて、瞬きもせずに聞いてゐたが、遂には我を忘れて前へ乗出して來て、ひ、ひ、といきむ様な聲を懸けた。

「いや、それは小氣味のよいことで御座つた、園、出來し居つたな、ふむ」笑顏に孫を見て「左様などゝは聊かも存せんものぢやから、若さまに喉かされて、若氣の誤りから何れへか夜遊びに出居つたとばかり心得てゐた、ハツハツハ、齡を老ると兎角に短慮一徹に相成つてのう」。

先づ安心とばかり扇子を開いて胸を煽いだ、友麿はそれ見るといつた風に、意地悪く翳つて遣つた。

「爺や、すると喉突き一件は甚麼なるんだい、最う命令取消か」。「はい、それどころでは御座いませぬ、全く私の思ひ違ひでな」。「思ひ違ひでなで澄ましては居られまい、人に死なうとまで爲せて置きながら……悪いと悟つたら何故謝罪をせん」。「孫奴にでござるか」。「爾さ、詫をするのが至當だらう」。「でも……」。「でもぢやないよ、夫とも詫をする代りに今度はお前が皺腹を切るか、如何だ」。「何の悪意もない擲擲に過ぎなかつたが、老人の方は眞面目に受けて、少頃考へてゐるが、懸てひたりと手を突いて」。

「御尤の仰せ、こりや託をせずには済まされませぬ、園、此の祖父が悪かつた、先刻來の鹿忽の段、平に許し呉れよ、これ、此の通りぢやぞ」。

お園は悲しいのか嬉しいのか、横を向いて眼を拭いてゐた。

「ハツハツハ、まア夫位で可からう、時に爺や」友麿は笑ふ下から急に眞顔になつて「園の方はそれで落着いたが、今度は僕の番だ、僕は今夜、無断で此の家を脱出したその責を引いて、自分の方から出て行くから、爾う思つて呉れ」。「えッ、何と御意遊ばします」餘に突然であるので、其意味が解得めなかつた。「暇を貰うんだよ」。「お暇を? どなたからな」。「両親から……」。「御両親より?」。「爾うさ」。「そ、それは又た何故に」。

甚五右衛門は驚いて詰寄つた。

二三

最う程なく夜が明けるといふ時分だつた、麻布霞町の源吉の門口に立つた二人連の男女がある。

恰ど其際は女房のお峯と源吉とが、家の中で大立廻りをしてゐる那程なので、隣の人が雨戸を開けて覗くのであらう、明るい裸洋燈の光が庭の生垣を越して、横壁の上に動いてゐた。

驚いて表へ逃出す朝鮮婦人の吳桂林と、中へ這入らうとする男と、店の戸口の所で確と突當つた。内と外から方に任せて同時に引いた扉が、溝を外れてはたりと横に倒れた。

「あら、吳さんぢやぢやいませんか」男の後に立つてゐた女が聲を懸けた、と、吳はその姿を月明りに見て「貴君、お園さんありますか、おう嬉しい」突と駈寄つてその袖をぐいと掴んで「早くお這入りください、喧嘩、喧嘩あります」懼々しながら家の中を指さした。

「なに、喧嘩だ、誰だッ、相手は? 何だ、妻君ぢやないか、莫迦々々しい、甚麼したといふのだ」中を覗いて見て、急いで飛込んだのが友麿であつた。後から吳の手を把て入つたのはお園である。

「えッ、這畜生! 一思ひに毆殺して遣るから覺悟しろッ、是でもか、是でもかッ」。「こ、こ、殺せッ、殺されるなら殺して見ろ、ば、ば、化けて出るぞッ、奴ッ」。「あ、痛え痛え、これ其處を絞めちやア不可ねえ、おいッ、放せ」。「死んだッて放すものか、燃り潰して上げるんだよう」。「蚤ぢやねえやいッ」。

互ひに叫び立て、取組んでゐる、源吉の手は女房の黒髪へ、お峯の手は亭主の足の邊へ、蟹の鉄のやうにひたと咬合つて、足も齒も爪も一樣に敵を撃つ器械、蹴る、食著く、引搔く、ばたくと疊の塵を揚げながらの死物狂ひだ。

「いやはや、呆れた奴們だ、こらッ、止さんか」友麿は源吉の脊中をびしやりと叩いたが、夢中になつてゐるので其の聲も耳に通じなかつた。

「あッ、危ない、火事になつたら如何するだね」お園は蚊帳の所へ覆れかゝつた洋燈を起した。

二人で稍と引分けると、最う目が冥んでゐるお峯は、友鷹を亭主だと思つて、悲鳴もろとも其の胸へ飛菟つた。同じ様に気が上釣つてゐる源吉は、お園を婢と間違へていきなり衿を引摺んだ。

「何を爲る、こらッ」「あら」お峯が喫驚して手を放す機会に、此方の源吉はお園に突飛されてひよろ／＼、婢の尻に衝突つてどかり。

二人は體面惡さうに脊中合せに跣まつた、慌て、肌をさすやら、褌を掻合せるやら。

「アハ、ハ、仕様のない御夫婦さまだ、一體甚麼したといふのだ、おい、源吉」。

友鷹は笑つて訊いた、と、天窓を掻き掻き尻込して

「いやはや、實に……飛んでもねえところがお目に止つて、頭も腰も掻上りやしません、なアにね、お前さん、根を洗つて見りやア詰らねえとから湧いて出たんで、是つてえのも皆な此のワイフの莫迦つてえ蟲がさせる業、天下に阿房くらゐ恐ろせえ物は無えんで、へい」。「何だとい」解けた髪を掻上げてゐたお峯が「能くまアそんなとが若様の前で言はれるね、生洒蛙／＼としてゐるよ、此人は」。「黙つてろい、暗ましい、エ、ナニ、實のところは、ソレ、其處にゐる吳さん、吳さんを連れて来たところが、お前さん、異に氣取りやアがつて、情婦だらうの馴染だらうのと吐しやアがつた揚句に、手荒いとを爲やアがるから、私も癩に障つてね、つひ勇敢なる行動に……」。「アハ、ハ、ハ、ちやア嫉妬喧嘩か、何のこつた、莫迦も好い加減にしろ、ハッハッハ」。

夫婦喧嘩の仲裁役としては甚だ不適當な柄であつたけれども、原因が原因だけに、事實の證明者たる友鷹の辯解直ちに功を奏して、さしもの騒動はさながら大風が風いだやうに鎮撫された。

「あら、爾うなの、マア」お峯は狐が落ちたやうな顔をして「若さま、眞箇に何でございましたかねえ、つひ女の淺慕な心が何なもんですから、飛んでもないとを何して、オホ、お前さん、堪忍おしよ、何が、そら、何なんだからさ」流石に體面惡さう「あれ、彼塵事を言つて瞞著してやがる、何が何したつてんだ、此の甚助奴、焼くのもいゝが最些と手加減をしるよ、手前のは大道店のピフチキで、眞黒焦で手が著けられやしねえ」源吉は餘勇を張つてゐる「だつてさ、お前さんが可愛からなんだよ、新宿にゐる時だつてちよい／＼行つたぢやないか浮氣をするほど、氣に働きがあるから未練で焼きもする、だよ、勘忍してお呉れつてばさ、ちよいと」甘へる様な手つき、味な目づかひ。「何いつてやがるんでえ、エヘ、」源吉は恠しくにやついて「若さま、いつでも此の通りで、始末にいけねえ亞刺比亞馬のグータラワイフで、エヘ、」。「ハッハッハ、最う平和條約の締結か、話が早いなア、ハッハッハ」。

友鷹は大笑した、吳桂林はほつとした、お園だけは眞面目にきちんと控へて、友鷹の背後から團扇の風を送つてゐる。

「時に若様、其麼して御屋敷へお歸りなさらねえので、お揃えで態々こんな處へお在なすつたん

で、變でげすなア、又閉出しを吃つて、這入れねえてえな譯でげすか、一體如何したツてんで？」源吉は氣遣はしげに友麿の顔を見た。

「いや、實はそれに就てな、お前へ相談しようと思つて、特に押掛けて来たんだが、おい、源吉、僕は最う後の家へは戻らないよ、二度と再び鬨を跨がん決心だから、お前もその心算でゐて呉れ」。「えッ戻らない？何故」。「何故ツて、可厭なんだ、可厭だから飛出して来たんだ、逃げて来たのさ」。「えい、逃げて来た？あの逃亡、逐電、ハイ左様ならのスタコラサで」。「爾うだ」。「へエー」。

源吉もお峰も驚いた様子だった、少頃は無言、隅々に眼だけが光つた。

「だつて訝せえちやごアせんか」源吉は何か思ひついて「訝せえや、逃げるのに貴君、女連ツてえ法があるもんですか、爾も座敷牢の番人でげせう。その番人のお園さんと一緒にのこ〜飛出して来るなんて、エへ、こいつア些と受取れねえや、泥坊が巡查と一緒に逃走したツてえ話は、未だ承はらねえからなア 戯談でせう、若さま」。「だけでもさ、お前さん」。「黙つてゐられぬ性分のお峰は、傍から突いと口を挿んだ」。「お若いお人達のとだもの、何とも言はれやしないわ、水の出端の何とやらでね、ちよいと、ホラ有るぢやありませんか、今は身で身をうらむらさきの、棲にかしくを反古染に、覺悟も對の晴小袖さ、ね、若さま、そんな一件なんでせう、蝶花の外を吹雪の二人

連、狂ふともなくほらくと……男が好くつてらつしやるからねえ、無理もないよ、寧ろ彼の世に新婚旅行、闇魔帳には妻と書く、可厭ですよ、若さま、心中なんかなすつちやア、オホ、」。「なに、心中だ？莫迦ッ、そんな譯ぢやない」。「友麿は消なしつけた」。「是には事情がある、二人とも聞けッ」。

友麿の話は意外である、聞人が氣の軽い源吉だけに、へエーといふ大きな聲を連發して驚いてゐる様子は、傍で看ても可笑しいくらゐだった。

その言に舉ると、友麿は、お園と一緒に外出した責を引いて、潔く家を出るから承諾して呉れろと、甚五右衛門に迫つたが、飛でもない心得違ひだと立腹して言下に斥けた。さうして自分が主家の爲に盡す苦心を訴へて、速かに放逸の行ひを改めてくれるやうにと、孝道の大切なるを説いて聞かせた。老眼には露が光つて聲も嘎れ勝であつた。友麿は謹んで聞いてゐた、二度とそれを言出さなかつた。頓て甚五右衛門は母家へ戻つて去つた、その跡で友麿はお園に向つて、自身の教育、志望、意思、感情などが全然父と一致せざることや、家庭の風儀と調和を缺いてゐるとやらを話して、自分が精神的の不具者と見られてゐる理由から、若しも此儘に拘束され壓迫され、永い苦痛を受けるならば、遂には發狂するより外はないと、極端な結果までも啣つやうに言つて聞かせた。實際自分も辛かつたので、甚五右衛門のとは質が違ふけれども、同じやうに涙が出た。と、お園は何と思つてか、此

言に沁々と同情したやうな氣色で、爾ういふとなら貴君の御氣任せになすつた方が宜しいでせう。行きたい所へ行つて爲たいとを爲たらば、それでお胸が霽れる譯、私は決してお止め申しませぬ替りに、何處までもお附添ひ申します、と思ひ切つたと言つてのけた。是には友麿も少からず荒肝を挫かれた、が、嬉しい、自分の無理な望を其方から買つて呉れた優しい心が、體も溶々するほどに嬉しかつた。我といふ者が變つた人間であるとは既に自覺してゐる、お園も變つた女であるとは今日始めて發見した、その變つた考が變つた考で想ひやつて、變つた立引をして呉れるのであると思つた。お園に深い分別が有るか無いか、有つてもよい、無くて可、そんなとは問題でないと多寡を括つた。その下から直と駈落の相談になつた、極ると急いで遺書を認めた、お園も祖父に宛て何か書いた、裏手の非常門から出るのは危険だといふので、今度は茶寮の後の塀を乗越えた。さうして途中から夜稼の車に乗つて源吉の所へ駈附けたのである。

半分は巫山戯たやうな駈落沙汰も、源吉に取つては大いに有難く、歡迎せざるを得なかつた。暇を出された腹癒に、飽までも附資つて思ひ知らせ遣らうと期してゐた其の復讐心が、是で幾分か満足したやうな譯である、只女房のお峰だけが、迷惑さうな心配らしさうな顔色だつた。

兎角するうちに夜が明けた、いろ／＼と是から先の方針を協議した末に、取敢へず一世帯を持つとに定めて、場所は友麿が好きな上野附近を選んだ、氣逸に源吉が探出した家は、山下の花園町といふ

名からして詩的な、而も植木師の庭にある隠居家だつた。

下女は置かず、お園と吳桂林と三人で自炊するといふ約束、吳は追つて此處から本郷の學校へ通ふ筈である。

足下から鳥が立つやうに引移つた、といつても體だけで、勝手道具は是から取揃へるのである。

二日目の夜、吳を留守番にして、二人は買物に出た、その歸途に不忍池の畔を逍遙きながら辨天前へ來た。

一一四

何講とやらの大山詣りが揃ひの行衣でちり／＼と鈴を振りながら、提灯をつらぬ梵天を押立てて講中を廻るのを、後からぞろ／＼と彌次馬が附いて行く。その雑沓の中を泳ぎ抜けて、稍このことに池の所へ出ると、水を渡る風が汗ばんだ顔を涼しく吹いて流れた。

「ひどい目に遇つたね、ぐい／＼壓つけられる機會に、日和下駄でいきなり足を踏まれつちやつた、あゝ痛い」。

辨天の石橋前に來てから、友麿は立停つてお園を顧みた。

「え、踏まれなさいました？まア」。